福岡市埋蔵文化財調査報告書第717集

板付周辺遺跡調査報告書第24集

— 板付遺跡第50・56次調査報告書 —

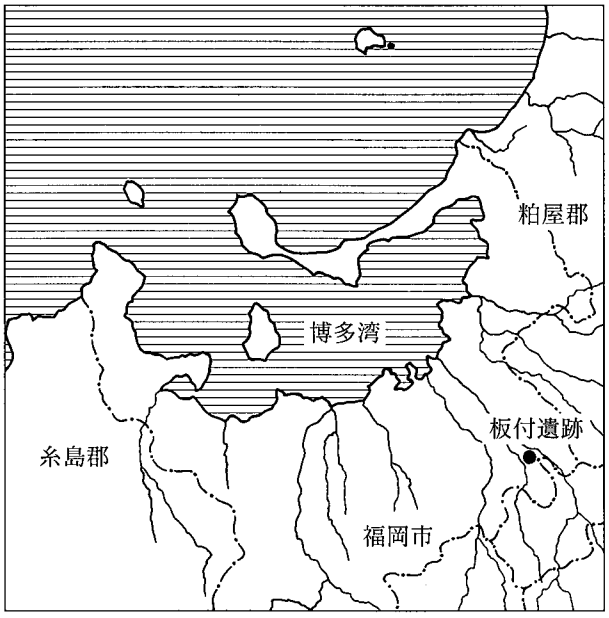
2002

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第717集

板付周辺遺跡調査報告書第24集

— 板付遺跡第50・56次調査報告書 —



遺跡名	遺跡番号	調査番号
板付遺跡第50次	ITZ-50	8654
板付遺跡第56次	ITZ-56	8907

2002

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの文化財が分布しています。本市では、文化財の保護、活用に努めていますが、都市基盤整備事業や各種の開発によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は、博多区板付四・五丁目地内に所在する板付遺跡内で、共同住宅建設や神社整備に先立って発掘調査を実施しました板付遺跡第50・56次調査の報告書です。

本調査では、弥生時代から室町時代にかけての集落が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。

発掘調査実施にあたり、費用負担などのご協力を賜りました永松トミ子氏や板付八幡神社代表佐伯昌彦氏をはじめとする関係各位に感謝の意を表します。

また、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長　生　田　征　生

例　言

1．本書は、博多区板付四・五丁目地内の開発に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が国庫補助事業（一部、受託）で、発掘調査を実施した板付遺跡第50・56次調査の発掘調査報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は、山口譲治・吉留秀敏・牟田裕二・池ノ上宏・上方高弘ほかが作成した。

3．本書使用の遺物実測図は、平川敬治・井上加代子・山口朱美・山口譲治・吉留秀敏が作成した。

4．本書使用の写真は、遺構を山口譲治・吉留秀敏が、遺物を平川敬治・吉留秀敏が撮影した。

5．本書使用の図面の製図は、山口朱美・吉留秀敏が行った。

6．本書使用の方位は磁北である。

7．本書の執筆は第１～３章を山口譲治、第４章を吉留秀敏が分担し、編集は山口譲治が行った。

8．本書収録の出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本 文 目 次

第1章　序説 …… 1
第2章　遺跡の位置と環境 …… 2
第3章　調査の記録 －第56次調査－
1．調査の概要 …… 7
2．竪穴住居跡・掘立柱建物と出土遺物 …… 8
3．土坑と出土遺物 …… 17
4．溝と出土遺物 …… 21
5．その他の遺構と出土遺物 …… 61
6．まとめ …… 64
第4章　調査の記録 －第50次調査－
1．調査の概要 …… 65
2．弥生時代の遺構と遺物 …… 65
3．古墳時代の遺構と遺物 …… 72
4．板付八幡古墳について …… 75
5．近世の遺構と遺物 …… 78
6．まとめ …… 83

挿 図 目 次

Fig. 1　板付遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
Fig. 2　報告調査地の位置および第56次調査地地形実測図 …… 4
Fig. 3　第56次調査地遺構配置実測図 …… 6
Fig. 4　第10号竪穴住居跡出土弥生土器実測図 …… 8
Fig. 5　第10号竪穴住居跡（SC－10）実測図 …… 9
Fig. 6　第11号掘立柱建物（SB－11）実測図 …… 10
Fig. 7　第12号掘立柱建物（SB－12）実測図 …… 11
Fig. 8　第14号掘立柱建物（SB－14）実測図 …… 12
Fig. 9　第15号掘立柱建物（SB－15）実測図 …… 13
Fig.10　第16号掘立柱建物（SB－16）実測図 …… 14
Fig.11　第17号掘立柱建物（SB－17）実測図 …… 15
Fig.12　各柱穴出土白磁・須恵器・土師器実測図 …… 16
Fig.13　各柱穴出土弥生土器実測図 …… 17
Fig.14　第2～5・18・19号土坑（SK－02～05・18・19）実測図 …… 18
Fig.15　第8・9号土坑（SK－08・09）実測図 …… 19
Fig.16　第2・8・9号土坑出土須恵器・土師器実測図 …… 20
Fig.17　第1号溝出土須恵器・瓦類実測図 …… 21
Fig.18　第1号溝（SD－01）土層断面実測図 …… 21
Fig.19　第6号溝（SD－06）実測図 …… 22
Fig.20　第6号溝出土弥生土器実測図（1） …… 23
Fig.21　第6号溝（西側段落ち）出土弥生土器実測図（2） …… 24
Fig.22　第6号溝（西側段落ち）出土弥生土器実測図（3） …… 25
Fig.23　第6号溝（西側段落ち）出土弥生土器実測図（4） …… 26
Fig.24　第6号溝下層出土弥生土器実測図（1） …… 27
Fig.25　第6号溝下層出土弥生土器実測図（2） …… 28
Fig.26　第20号溝（SD－20）土層断面実測図 …… 29
Fig.27　第20号溝上層出土弥生土器実測図（1） …… 30
Fig.28　第20号溝上層出土弥生土器実測図（2） …… 31
Fig.29　第20号溝上層出土弥生土器実測図（3） …… 32
Fig.30　第20号溝上層出土弥生土器実測図（4） …… 33
Fig.31　第20号溝上層出土弥生土器実測図（5） …… 34
Fig.32　第20号溝上層出土弥生土器実測図（6） …… 35
Fig.33　第20号溝中層出土弥生土器実測図（1） …… 36
Fig.34　第20号溝中層出土弥生土器実測図（2） …… 37
Fig.35　第20号溝中層出土弥生土器実測図（3） …… 38
Fig.36　第20号溝中層出土弥生土器実測図（4） …… 39
Fig.37　第20号溝中層出土弥生土器実測図（5） …… 40
Fig.38　第20号溝中層出土弥生土器実測図（6） …… 41
Fig.39　第20号溝中層出土弥生土器実測図（7） …… 42

Fig.40　第20号溝中層出土弥生土器実測図（8）…… 43
Fig.41　第20号溝中層出土弥生土器実測図（9）…… 44
Fig.42　第20号溝中層出土弥生土器実測図（10）…… 45
Fig.43　第20号溝中層出土弥生土器実測図（11）…… 46
Fig.44　第20号溝中層出土弥生土器実測図（12）…… 47
Fig.45　第20号溝中層出土弥生土器実測図（13）…… 48
Fig.46　第20号溝中層出土弥生土器実測図（14）…… 50
Fig.47　第20号溝中層出土弥生土器実測図（15）…… 51
Fig.48　第20号溝中層出土弥生土器実測図（16）…… 52
Fig.49　第20号溝中層出土弥生土器実測図（17）…… 53
Fig.50　第20号溝中層出土弥生土器実測図（18）…… 54
Fig.51　第20号溝中層出土弥生土器実測図（19）…… 55
Fig.52　第20号溝中層出土弥生土器実測図（20）…… 56
Fig.53　第20号溝下層出土弥生土器実測図（1）…… 57
Fig.54　第20号溝下層出土弥生土器実測図（2）…… 58
Fig.55　第20号溝下層出土弥生土器実測図（3）…… 59
Fig.56　表採遺物実測図…… 60
Fig.57　出土土製品および石器実測図…… 62
Fig.58　出土石器実測図…… 63
Fig.59　第50次調査周辺地形図（縮尺1/400）…… 66
Fig.60　第50次調査全体図（縮尺1/100）…… 67
Fig.61　弥生・古墳時代遺構図（縮尺1/60）…… 68
Fig.62　遺物実測図－弥生土器１－（縮尺1/3）…… 69
Fig.63　遺物実測図－弥生土器２－（縮尺1/3）…… 70
Fig.64　遺物実測図－旧石器・弥生時代石器－（縮尺2/3）…… 71
Fig.65　遺物実測図－古墳土器１－（縮尺1/3）…… 73
Fig.66　遺物実測図－古墳土器２・石器・鉄器－（縮尺1/3、2/3）…… 74
Fig.67　遺物実測図－板付八幡古墳石室実測図（縮尺1/100）…… 75
Fig.68　板付八幡古墳墳丘測量図（縮尺1/600）…… 76
Fig.69　板付八幡古墳墳丘採集遺物（縮尺1/3）…… 77
Fig.70　建物SB01～03、板付八幡神社旧社殿平面図（縮尺1/100）…… 79
Fig.71　遺物実測図－近世土器－（縮尺1/3）…… 81
Fig.72　遺物実測図－近世青銅製品－（縮尺1/1）…… 82
Fig.73　板付遺跡群南台地全体図（縮尺1/1,300）…… 83

図　版　目　次

PL. 1　第56次調査遺構検出状況
PL. 2　第10号竪穴住居跡、第11・12号掘立柱建物
PL. 3　第14・15・17号掘立柱建物、第8・9号土坑、第6・20号溝
PL. 4　各遺構出土遺物（1）
PL. 5　各遺構出土遺物（2）
PL. 6　各土坑出土遺物
PL. 7　第６号溝（上層・西側段落ち）出土土器（1）
PL. 8　第６号溝（上層・西側段落ち）出土土器（2）
PL. 9　第６号溝下層出土土器
PL.10　第20号溝上層出土土器
PL.11　第20号溝中層出土土器（1）
PL.12　第20号溝中層出土土器（2）
PL.13　第20号溝中層出土土器（3）
PL.14　第20号溝中層出土土器（4）
PL.15　第20号溝中層出土土器（5）
PL.16　第20号溝中層出土土器（6）
PL.17　第20号溝下層出土土器（1）
PL.18　第20号溝下層出土土器（2）
PL.19　出土土製品および石器
PL.20　第50次調査地点近影、調査地点の現状
PL.21　調査地点全景、拝殿部ならびに板付八幡古墳
PL.22　出土遺物
PL.23　板付八幡古墳石室

第1章　序説

1．はじめに

博多区板付五丁目地内の板付八幡神社の整備が計画され、同神社の代表者である佐伯昌彦氏より昭和62年１月20日に、また、板付四丁目地内では、地権者である永松トミ子氏より共同住宅建設が計画され、昭和63年10月22日にそれぞれ福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）に、埋蔵文化財事前審査願書が提出された。

申請地前者は、周知の遺跡である板付遺跡に含まれており、洪積台地にあたること、同神社内に古墳が所在していること、分布が予想できる弥生時代から古墳時代にかけての遺構群が開発により破壊される恐れがあることなどから、埋文課は記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、本調査を実施した。

申請地後者は、板付遺跡の南西部にあたること、開発計画が共同住宅建設であり、遺跡が遺存している場合は遺跡が破壊される恐れがあることなどから、埋文課は遺構の遺存状態の確認と遺跡の内容把握のため試掘調査が必要であると決定した。

試掘調査は、南北に長い台形を呈する対象地944㎡について１×30ｍの試掘調査溝を１本設定し、昭和63年10月24日に実施した。試掘調査では、耕作土を除去した地表下20cmで、平面形方形の竪穴住居跡と平面形隅丸方形や円形を呈する柱穴が検出できた。時期を決定できる遺物の出土はなかったが、これらの遺構群は弥生時代から古墳時代にかけてのものと想定された。

以上の試掘調査結果を受け、埋文課は申請地全域に弥生時代から古墳時代にかけての集落が遺存しており、現状保存が必要であると決定し、申請者と埋文課は共同住宅建設の計画変更について協議を行ったが、現状保存は困難であり、申請地全域を対象とした発掘調査を実施することとなった。発掘調査にあたって、今回の開発は個人の永松トミ子氏による事業であるが、用途が共同住宅建設であるため申請者と調査費、調査期間、出土遺物の取り扱いなど協議を重ね、調査費の一部を永松氏に負担していただくことで契約条項が整い、調査契約が成立し、調査事務所など附帯条件が整ったあと、本調査に着手した。

調査名	板付遺跡第50次調査			板付遺跡第56次調査			
遺跡調査番号	8654	遺跡番号	ITZ－50	遺跡調査番号	8907	遺跡番号	ITZ－56
調査地地籍	博多区板付五丁目7－39			博多区板付四丁目９－２			
分布地図番号	24－0094･0842			24－0094			
開発面積	60㎡	調査実施面積	83㎡	開発面積	944㎡	調査実施面積	720㎡
調査期間	1987年1月26日～同年2月29日			1989年4月17日～同年6月10日			

2．調査の体制

調査の体制としては、以下に示す体制を構成した。緊急調査であるため充分なる体制は組むことができなかったが、発掘調査の委託者である永松トミ子氏をはじめとする関係各位の協力のもとに、発掘調査は順調に進行いたしました。関係各位に謝意を表します。

板付遺跡第50次調査

調査主体　　福岡市教育委員会　教育長　佐藤善朗（前）　　生田征生

調査総括　　埋蔵文化財課長　柳田純孝（前）　　山崎純男
　　第２係長　飛高憲雄（前）　　調査第２係長　力武卓治
調査担当　　山口譲治・吉留秀敏
事務担当　　松延好文（前）　　御手洗　清（文化財整備課管理係）
調査協力者　　上方高弘・甲斐田嘉子・松本幸子・尾崎君枝・坂井昭美・星子輝美・石田晴美・山崎美枝子

板付遺跡第56次調査
調査委託者　　永松トミ子
調査主体　　福岡市教育委員会　教育長　佐藤善朗（前）　　生田征生
調査総括　　埋蔵文化財課長　柳田純孝（前）　　山崎純男
　　第２係長　飛高憲雄（前）　　調査第１係長　山口譲治
試掘調査担当　　山崎純男・常松幹雄・小畑弘己
調査担当　　山口譲治
事務担当　　松延好文（前）　　御手洗　清（文化財整備課管理係）
調査協力者　　池ノ上宏・牟田裕二・石田晴美・尾崎君枝・甲斐田嘉子・坂井昭美・星子輝美
整理協力者　　犬丸陽子・井上加代子・平川敬治・山口朱美・石川慶子

第２章　遺跡の位置と環境

１．本調査報告遺跡の位置（Fig.1・2）

福岡平野のほぼ中央部には、北流し、博多湾に注ぐ那珂川（中流域で諸岡川合流）・御笠川があり、両河川の中流域から下流域にかけては、春日丘陵から延びる中位あるいは低位の段丘が形成されている。これらの中位・低位段丘は著しく開析され、南東から北西方向に断続的に延び徐々に低くなる高まりがあり、これらの段丘上には、南から須玖遺跡群・弥永遺跡・南八幡遺跡群・井尻Ｂ遺跡群・五十川遺跡群・諸岡遺跡群・麦野遺跡群・井相田遺跡群・高畑遺跡・板付遺跡・那珂遺跡群・比恵遺跡群などが所在しており、その北には砂丘が発達し、博多遺跡群が所在している。いずれも弥生時代から中世にかけての拠点的な性格をもつ大遺跡で、弥生時代以降、福岡平野のなかで中心的役割を担ってきた地域であるといえよう。現在、この地域は、福岡市・大野城市・春日市の三市にまたがっており、都市基盤整備が整い、ＪＲ鹿児島本線・西鉄大牟田線、国道・県道・市道が縦横に走り、宅地化が進み博多市街地と一体化しており、標高20～5m前後の緩やかな傾斜はもつもののほぼ平坦な地形となっている。

板付遺跡は、御笠川中流域の諸岡川との間に位置する北・中央・南の洪積台地を中心として所在し、本報告両調査地は、標高12.1ｍを頂部とする南台地上に位置している。第50次調査地は、南台地の南東斜面に位置し国土地理院発行の５万分の１地形図（福岡）の北から23.6cm、東から8.1cmにあたる。第56次調査地は、南台地の標高9.2ｍ前後の南西部裾に位置し、本調査実施までは水田として使用されていた。本調査地は、国土地理院発行の５万分の１地形図（福岡）の北から23.8cm、東から8.2cmにあたる。

1.板付遺跡
2.高畑遺跡
3.那珂君休遺跡
4.諸岡遺跡群
5.席田青木遺跡
6.雀居遺跡
7.東那珂遺跡群
8.比恵遺跡群
9.那珂遺跡群
10.五十川遺跡
11.井尻B遺跡群
12.箱崎遺跡
13.吉塚新町遺跡
14.堅粕遺跡
15.博多遺跡群
16.東比恵三丁目遺跡
17.雑餉隈遺跡
18.日佐遺跡
19.和田B遺跡
20.須玖遺跡
21.金隈遺跡

Fig. 1　　板付遺跡の位置と周辺の遺跡

Fig. 2　　報告調査地の位置および第56次調査地地形実測図

2．本報告周辺遺跡の概要（Fig.1・2）

板付遺跡は、昭和26年に日本考古学協会による発掘調査後67カ所が実施されており各時代・時期の様相がわかってきている。遺物でみていくと、ナイフ形石器や細石刃核が数カ所の調査地で出土しており、先土器時代のナイフ形石器文化期・細石刃文化期には人の生活があったと考えられるが、良好な状態での包含層は確認されていない。その後、縄文時代早期の押型文土器・無文土器の包含層が確認されているが１カ所のみで単発的である。

本格的に本遺跡で集落が形成されるのは、縄文時代終末期の突帯文土器期からで、中央台地の北西部の台地裾に竪穴住居跡・土坑などからなる集落が、中央台地に沿った西側の沖積地で水田が営まれている。以後、弥生時代に入ると、中央台地に環濠集落が築造され、この頃から袋状竪穴（貯蔵穴）が造り始められ、中央台地東側の沖積地でも水田が営まれるようになる。同時代前期後半に入ると、環濠東南外に首長墓が、環濠北西外に木棺墓・甕棺墓群からなる墓地が営まれ、袋状竪穴群の分布から北台地・南台地まで集落が拡大していることがうかがえる。以降、同時代中期後半には井戸も造り始められ、同時代後期初頭までに水田域も西側は諸岡川まで広がる。前期後半から後期初頭にかけては、北台地南東部・中央台地北西部・南台地南東部が墓域、その他の台地上が居住地、北・中央・南台地に沿った沖積地が水田域として空間利用され、福岡平野の中心的な拠点集落が形成されていたといえよう。

弥生時代後期前葉から中世にかけては、台地上が居住地、沖積地が水田域として土地利用されたと考えられるが、検出遺構は前時期と比較すると極端に少なく、細々と農村集落が営まれていたといえよう。

板付遺跡周辺では、本調査地の北１Kmには那珂君休遺跡が、南0.5Kmには高畑遺跡群が、西0.6Kmには諸岡遺跡群が、西北２Kmには那珂遺跡群が、西南西1.5Kmには井尻Ｂ遺跡群が、北東２Kmには雀居遺跡が、北北東1.2Kmには下月隈Ｃ遺跡が、東南東２Kmには国史跡金隈遺跡がある。

那珂君休遺跡では弥生時代後期から中世にかけての水田や古代の道路が検出されている。同遺跡では、弥生時代後期初頭と古墳時代初頭の木製農具の良好な組成がみられる。高畑遺跡群では、弥生時代から古墳時代にかけての集落のほか古代の寺跡や官道が検出されている。同遺跡では古代の木簡や古墳時代中期の良好な木製品などが出土している。諸岡遺跡群では先土器時代ナイフ形石器文化期の包含層、弥生時代の集落や甕棺墓からなる墓地、古墳、中世の地下式横穴などが検出されている。同遺跡では弥生時代前期の朝鮮無文土器の良好な一括資料が出土している。

那珂遺跡群では弥生時代前期と中期後半から終末期の環濠集落、弥生時代の甕棺墓からなる墓地、首長墓である那珂八幡古墳・東光寺剣塚古墳の前方後円墳、古墳時代から中世にかけての集落が検出されている。同遺跡は北に位置する比恵遺跡群とともに弥生時代中期後半以降古代にかけて福岡平野の中心的な拠点集落が形成されていたといえよう。井尻Ｂ遺跡群も那珂遺跡群と同様の遺構群が検出されており、那珂・比恵遺跡群と一連の拠点集落が形成されている。また、これらの遺跡群では、弥生時代に鏡・矛・戈・鏃などの鋳型が出土しており、青銅器生産が行われている。

雀居遺跡では弥生時代初頭から集落が、同時代後期後半には環濠集落が営まれ、拠点集落となり、古墳時代初頭前後まで集落が形成され、以降古代にかけては、水田となり、中世に入ると再び集落が営まれている。南接する下月隈Ｃ遺跡でも同様な傾向がみられる。史跡金隈遺跡は弥生時代前期末から同時代後期にかけての甕棺墓・木棺墓・石蓋土坑墓・石棺墓群からなる墓地と古墳時代後期の円墳がある。

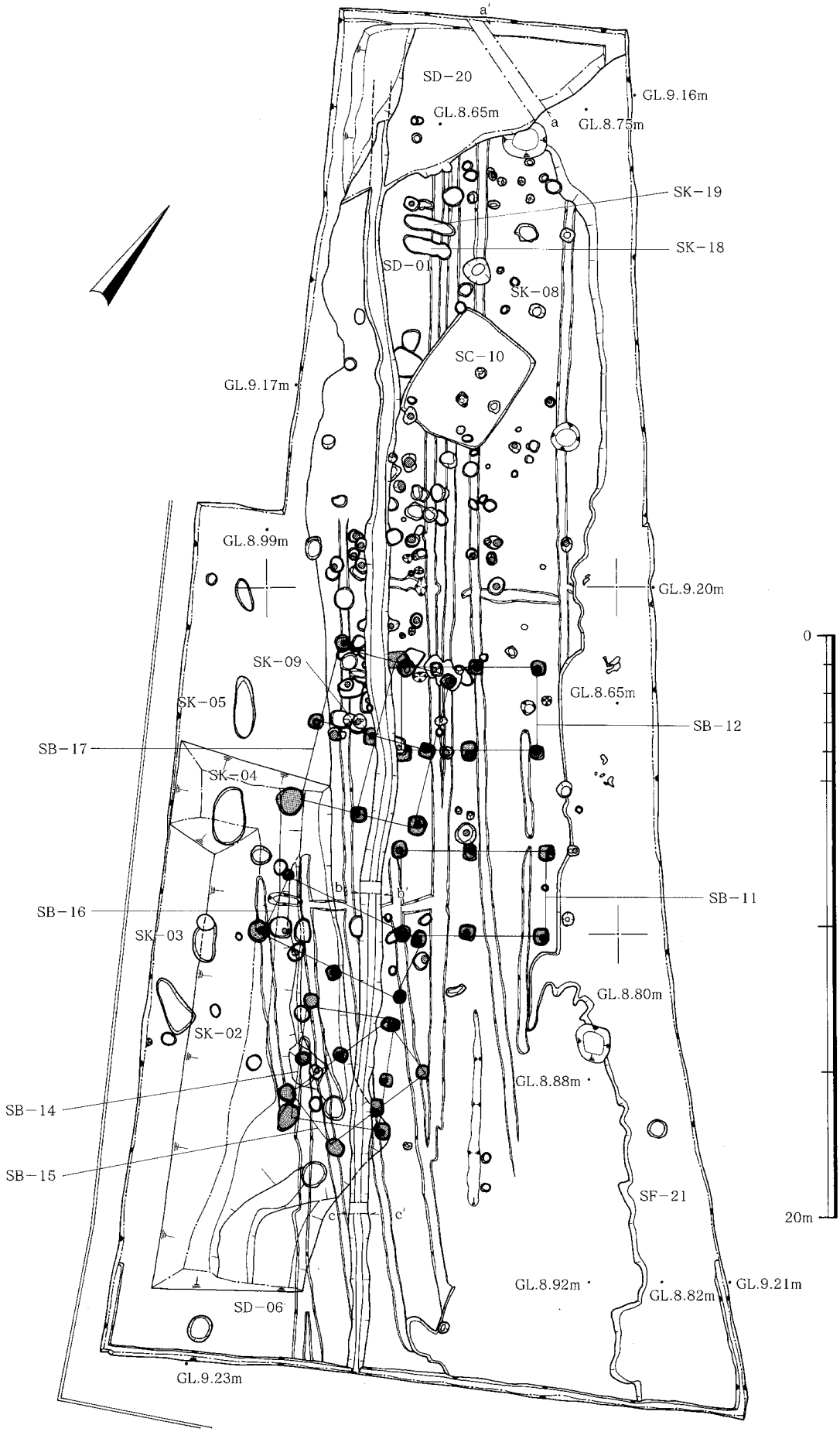


Fig. 3　　第56次調査地遺構配置実測図

第３章　調査の記録 ―第56次調査―

１．調査の概要（Fig.２・３，PL.１）

共同住宅建設予定地（以下、申請地とする）は、北東側が幅６ｍの道路に接し、他の３面は民有地と接しており、北西部を上辺とする台形を呈している。地形的にみていくと、本調査実施前は水田として使用されていたため標高9.2ｍ前後の平坦な地形となっていた。本調査は、委託者と埋文課との協議の過程で、申請地全域を調査対象とするとなっており、南西側隣接地の試掘調査で遺構が確認されていないため、申請地の北西隅に調査事務所を設置し、廃土は申請地敷地内で処理することとなっていた。

本調査は、申請地を可能な限り実施することとし、北東側は道路から１ｍ前後の引きをとり、南西側の南部は民有地から１ｍ、北部は調査事務所用のユニットハウス設置のため４×18.5ｍのスペースを作り、北西側は１ｍ・南東側は民有地から2.5ｍの引きをとり調査区を設定した。

本調査は、申請地内で廃土を処理するため南側の敷地の約２／３から実施することとし、まずバックホーを使用して20cm前後の耕作土を除去することから始めた。その結果、標高９ｍ弱前後の黄褐色ロームの面で柱穴などの遺構群を検出したため精査した。この面の精査終了後、西側が暗褐色から黒褐色粘質土を呈していたため台地際か溝かを確認するため精査し、溝であることを確認した。その後、バックホーを使用して廃土を移動し、北側の耕作土を除去し精査した。

検出遺構は、弥生時代から古代にかけてのものがある。古代の遺構としては、調査区東側に幅1.5～2.5ｍの道路（調査時は、砂・青灰色粘土・黄褐色ローム・暗褐色から黒褐色粘質土が混在した状態であったため攪乱として扱ったが、底は15cm前後の凸凹はあるもののほぼ平坦であり、出土遺物も古代の瓦類と土師器であり、祭祀と考えられる馬の下顎骨があること、高畑遺跡・板付遺跡・那珂君休遺跡で確認されている古代の官道の延長線上であることから報告書作成の段階で道路の一部とした）があり、道路に沿った形で掘立柱建物、土坑、道路に併走する溝、柱穴多数がある。弥生時代から古墳時代にかけての遺構としては、掘立柱建物、竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、柱穴多数がある。これらの検出遺構は、掘立柱建物をSB、竪穴住居跡をSC、土坑をSK、溝および溝状遺構をSD、道路状遺構をSF、柱穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に２桁の通し番号を付した｛例：SD－01（溝）・SK－02（土坑）・SK－03（土坑）・・SD－06（溝状遺構）・・SC－10（竪穴住居跡）・SB－11（掘立柱建物）｝。なお、柱穴については検出順に遺構記号SPの後に４桁の通し番号を付し、建物として確認したものは整理作業過程で、遺構番号の後に２桁の通し番号を付した（例：SP－1001）。本書のなかでは遺構名・遺構記号を併記して使用する。

出土遺物として、弥生時代の弥生土器・土製品・石器、古墳時代の土師器、古代の須恵器・土師器、瓦類・専、中世の輸入陶磁器などがある。出土遺物は、図化・写真撮影したものについては、頭に8907の調査登録番号を冠し、弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶磁器（土器類）と瓦類は00001から、土製品は01001から、石器および石製品は01011からそれぞれ通し番号を付し登録番号とした｛例：890700001～890700695（土器類）、890701001～890701009（土製品）、890701011～890701030（石器）｝。なお、本書のなかでは、挿図および図版は調査登録番号を外した５桁の番号で示し、本文中では土器類は２・４桁で、土製品・石器は４桁で述べていくことにする。また、未図化・未撮影の遺物は、各遺構ごとに、遺構検出時の出土遺物は遺構検出時出土遺物とし、出土遺構不明の出土遺物は表採遺物として、各器種に分け、コンテナごとに図化・撮影遺物の後の通し番号を付し登録番号とした。

2．竪穴住居跡・掘立柱建物と出土遺物

（1）第10号竪穴住居跡（SC－10）と出土遺物(Fig.4・5・57, PL.2・4)

本竪穴住居跡は、調査区の北側のほぼ中央部で検出し、柱穴数基と現代の水田排水溝3条に切られている。上からロームブロックを多く含む黒褐色粘質土・明黒褐色粘質土・黄褐色粘質土を覆土としている。平面形は隅丸方形を呈し、検出面では南北4.3m、東西3.4mで25cm前後遺存している。床は中央部および周縁を除いて10～20cm前後の深さでコの字状に掘り、黒褐色粘質土混じりの黄褐色粘質土を叩きしめて平坦な貼床の面を造り出している。その後、中央部に南北方向で70cm強あけて主柱穴2本（床からの深さ55cm、70cm）を掘っている。壁は床から緩やかに開きながら立ち上がっており、中央部の東寄りに炉が設けられている。本竪穴住居跡からは、弥生土器・土製投弾・土錘が出土した。

06～10・12は甕形土器で、06・10・12を除く3点の口縁部は逆L字をなし、07は口縁が内傾し、08・09は平坦な口縁となっている。06・10の口縁部はくの字状をなし、06は平坦な口縁となっている。口径27.4cm・28.4cm・30cm・23.2cm・30cmを測る。12は平底の底部で底径9cmを測る。11・13は壺形土器で、13は鋤先状をなす口縁部をもち、口唇に刻み目が施され、口径42cmを測る。11は丹塗りのやや上げ底の底部で底径7.2cmを測る。1002は器長3.2cm、最大径2.01cmの紡錘形に手捏ねで整形した投弾で、重さ10.51gを測る。胎土には石英粒を含み堅緻で、焼成も良く、淡褐色を呈する。1002は長軸4.7cm、短軸3.5cm、最大厚1.5cmの楕円形に手捏ねで整形した土錘で、重さ18.45gを測る。胎土は石英粒・微砂粒を含み堅緻で、焼成も良く、灰色～淡褐色を呈する。器面には、縄縛痕跡がみられる。

以上から本竪穴住居跡は、2本柱を主柱穴とする竪穴住居で、出土遺物から弥生時代後期初頭前後のものといえよう。

（2）掘立柱建物と出土遺物（Fig.6～13, PL.2～4）

本調査では、6棟（第11～17号）の掘立柱建物（SB－11～17）を調査区の中央部から南部にかけて検出した（以下、建物とする）。

第11号建物（SB－11）　本建物は調査区のほぼ中央にSB－12に梁行を揃え、並列する形で位置し、

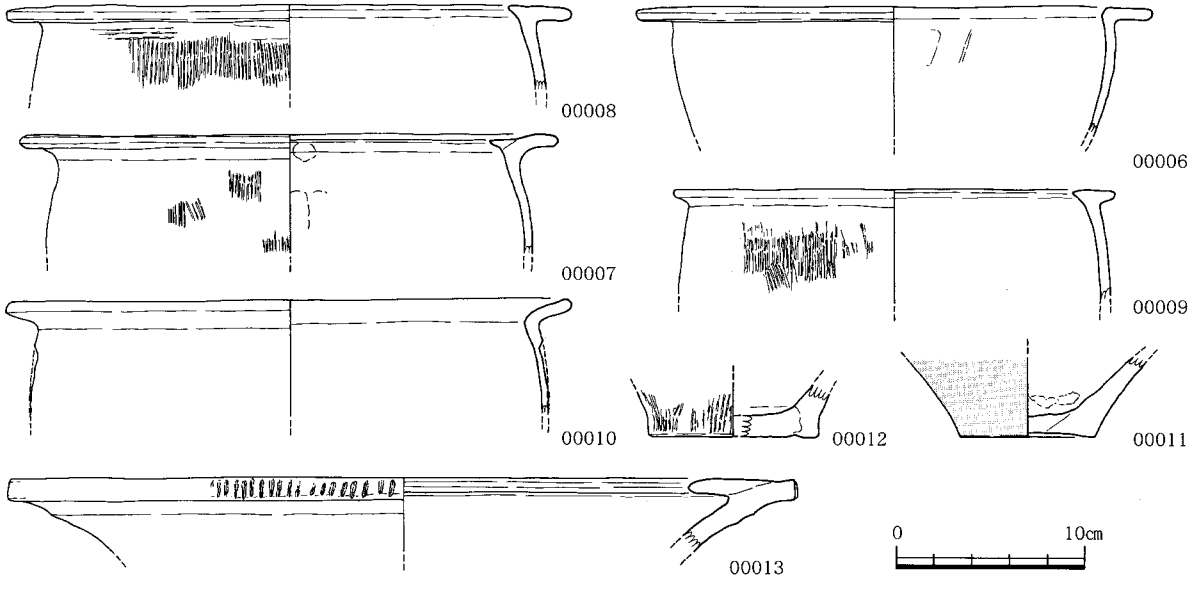
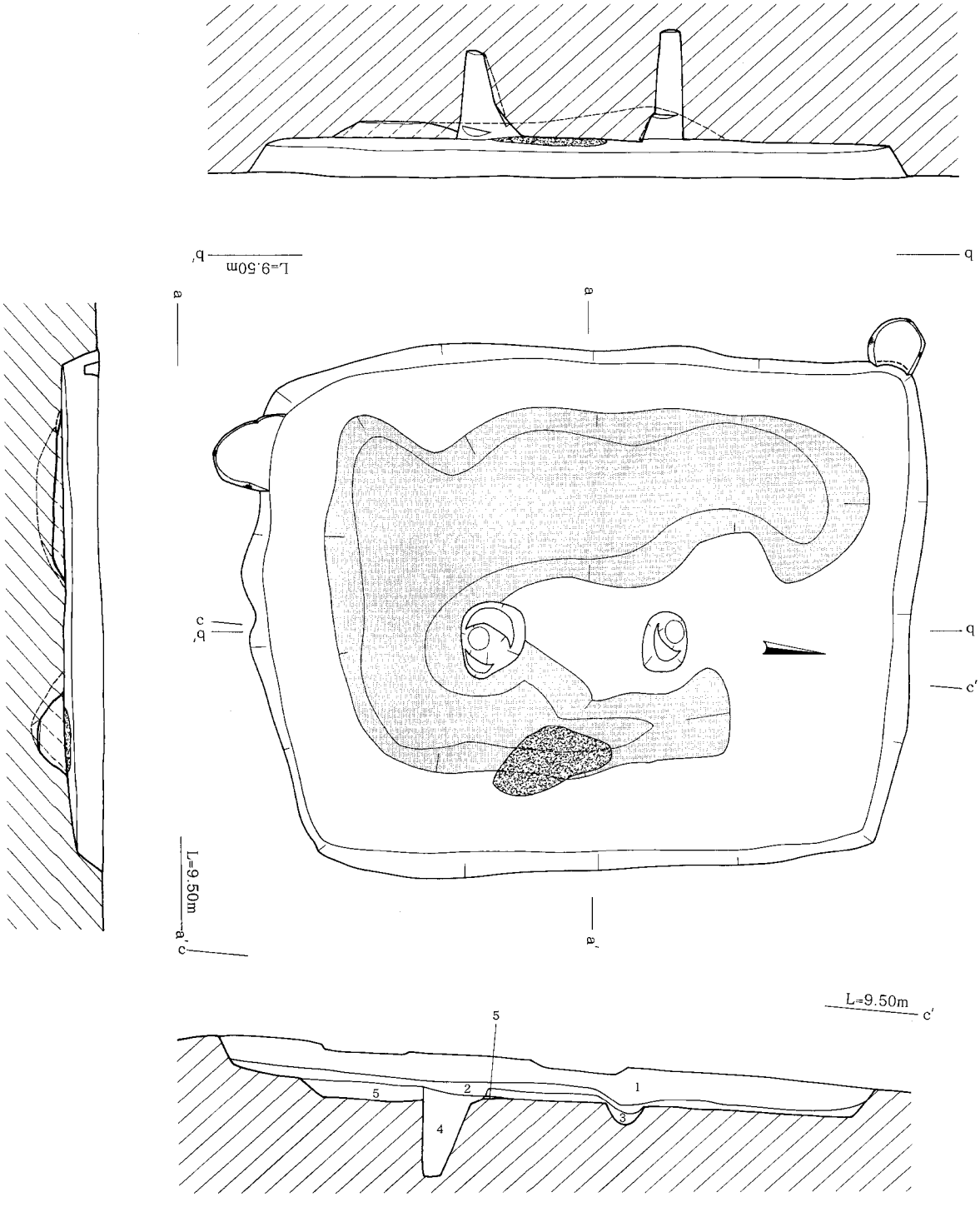


Fig.4　第10号竪穴住居跡出土土器実測図



1.黒褐色粘質土（ロームブロックを多く含む）
2.明黒褐色粘質土（1より粘性が強い）
3.黄褐色粘質土（貼床?）
4.暗黒褐灰色粘質土
5.黒褐色粘質土混じり黄褐色粘質土（貼床）

0　　2m

Fig. 5　　第10号竪穴住居跡（SC－10）実測図

現代の水田排水溝に切られている。SP－1101～1106の６本の柱穴から構成されている建物で、柱穴掘り方は一辺50cm前後を測る隅丸方形を呈し、15～25cm強遺存している。SP－1101・1102は礎板が痕跡程度に残り、各柱穴の柱痕跡から径20cm前後の円柱を用いたと考えられ、柱穴中心間は桁行が2.19～2.74mを測り、梁行柱穴間は2.94・2.98mを測る。

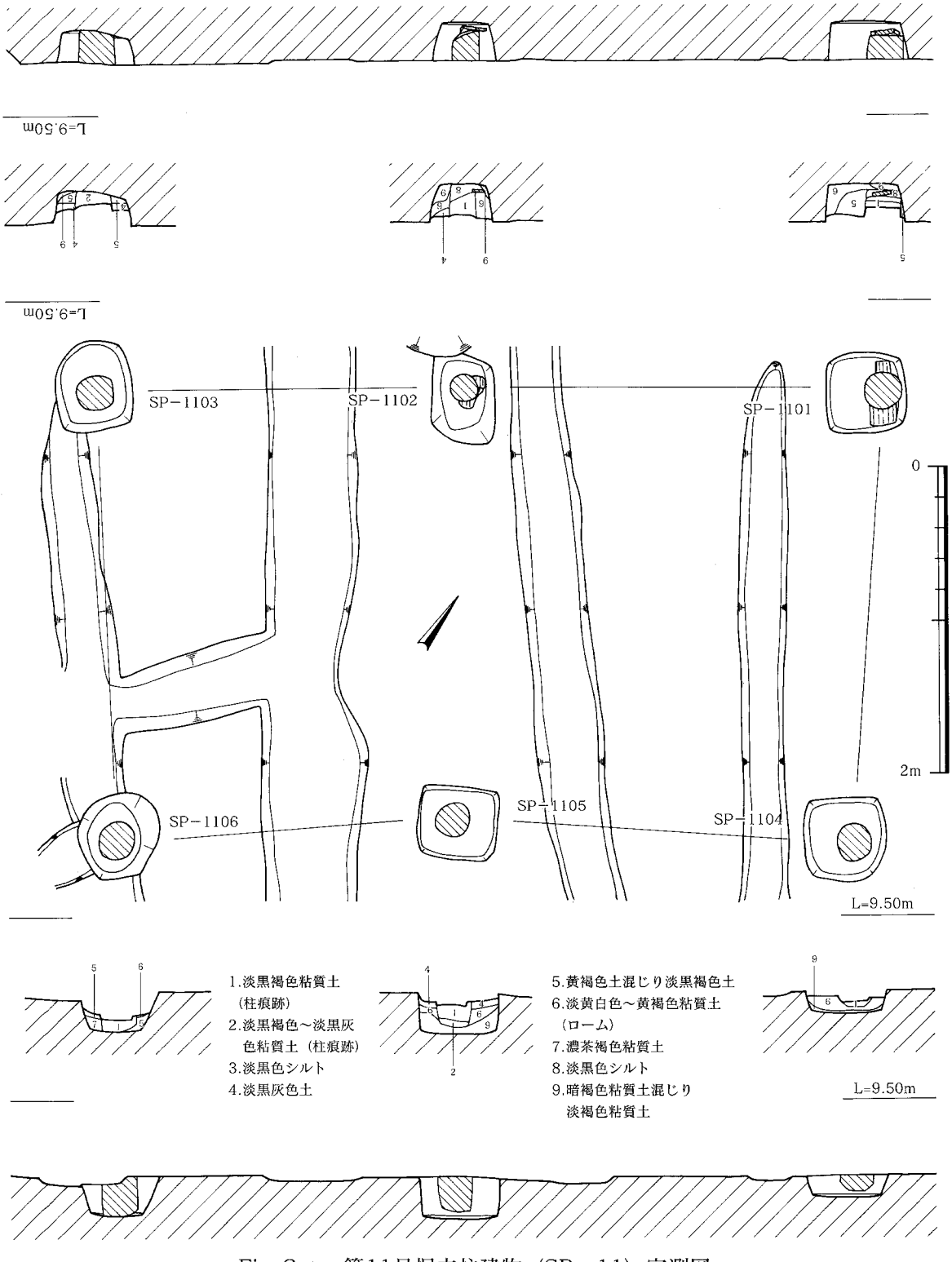


Fig.6　第11号掘立柱建物（SB－11）実測図

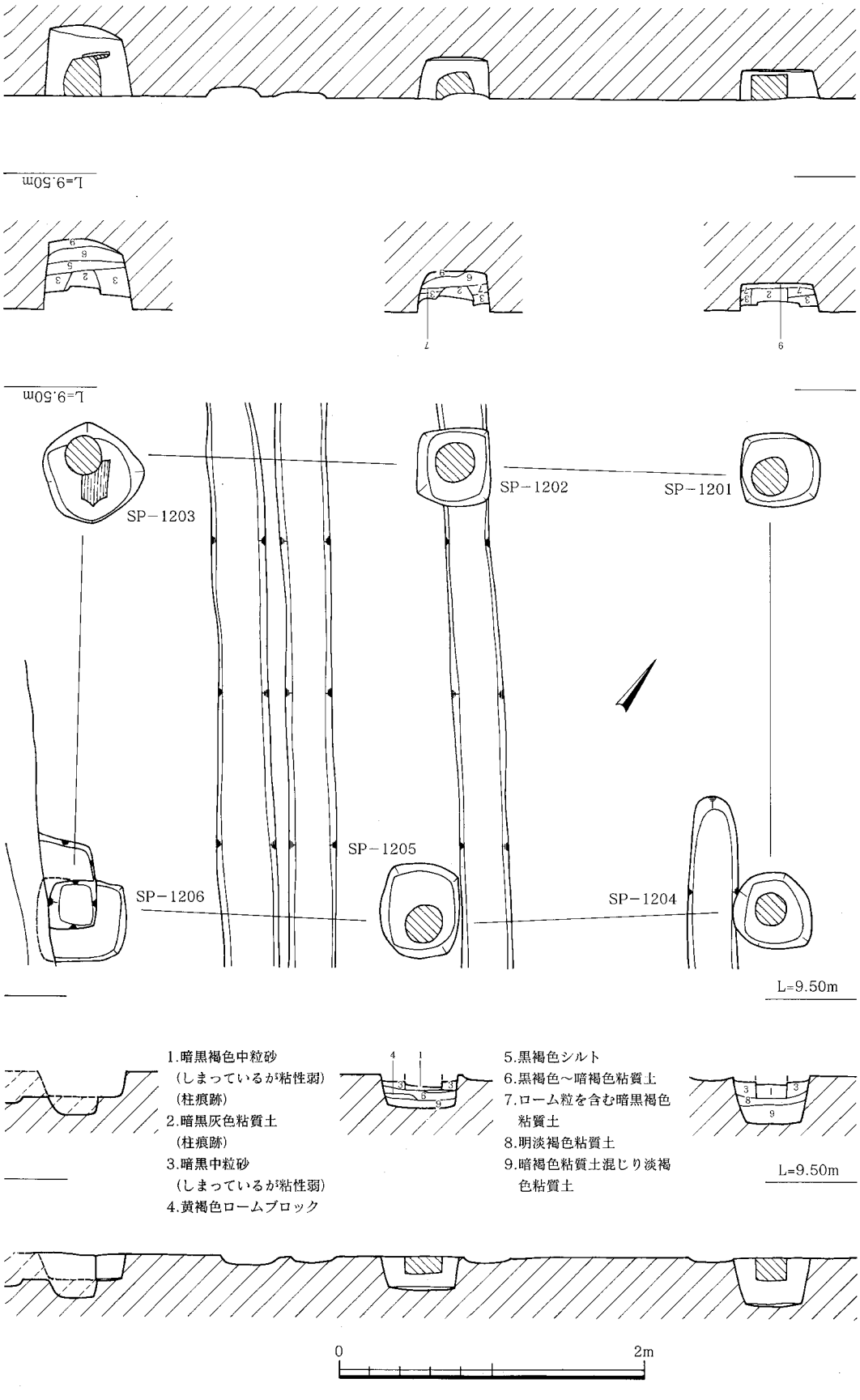


Fig. 7　　第12号掘立柱建物（SB−12）実測図

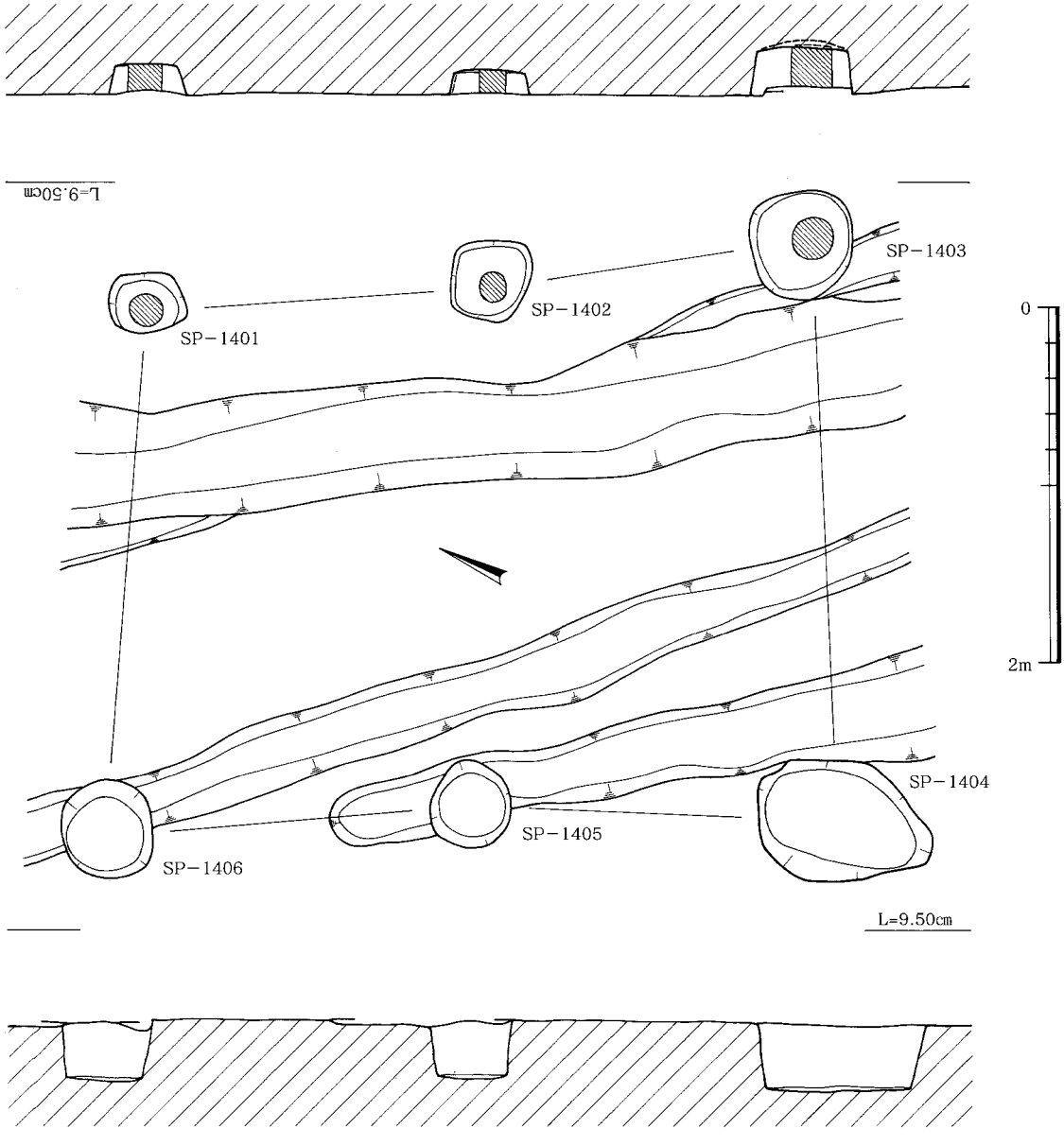


Fig.8　第14号掘立柱建物（SB−14）実測図

第12号建物（SB−12）　本建物はSB−12の北側に位置し、SB−17や数基の柱穴を切り、SD−01に切られ、さらに現代の水田配水溝に切られている。SP−1201〜1206の６本の柱穴から構成されている建物で、柱穴掘り方は一辺50cm前後を測る隅丸方形を呈し、18〜48cm遺存している。SP−1203は礎板が痕跡程度に残り、各柱穴の柱痕跡から径20cm前後の円柱を用いたと考えられ、柱穴中心間は桁行が2.06〜2.44mを測り、梁行柱穴間は2.84・2.98mを測る。

SB−11・12の建物柱穴からの遺物の出土はなかったが、２棟の建物は桁行２間、梁行１間で前者がN−53.5°−E、後者がN−55.5°−Eの近似する主軸方位をとる１×２間の建物で、両建物の東側に南北方向に走る官道（SF−21）と建物配置がほぼ直交しており、建物間が３m前後であることなどから官道と同時期の建物で、SD−01を切っていることから８世紀末前後のものといえよう。

SB−12の北約４mに西側梁行を揃える形で、SP−1301〜1303の柱穴を検出し、第13号建物と

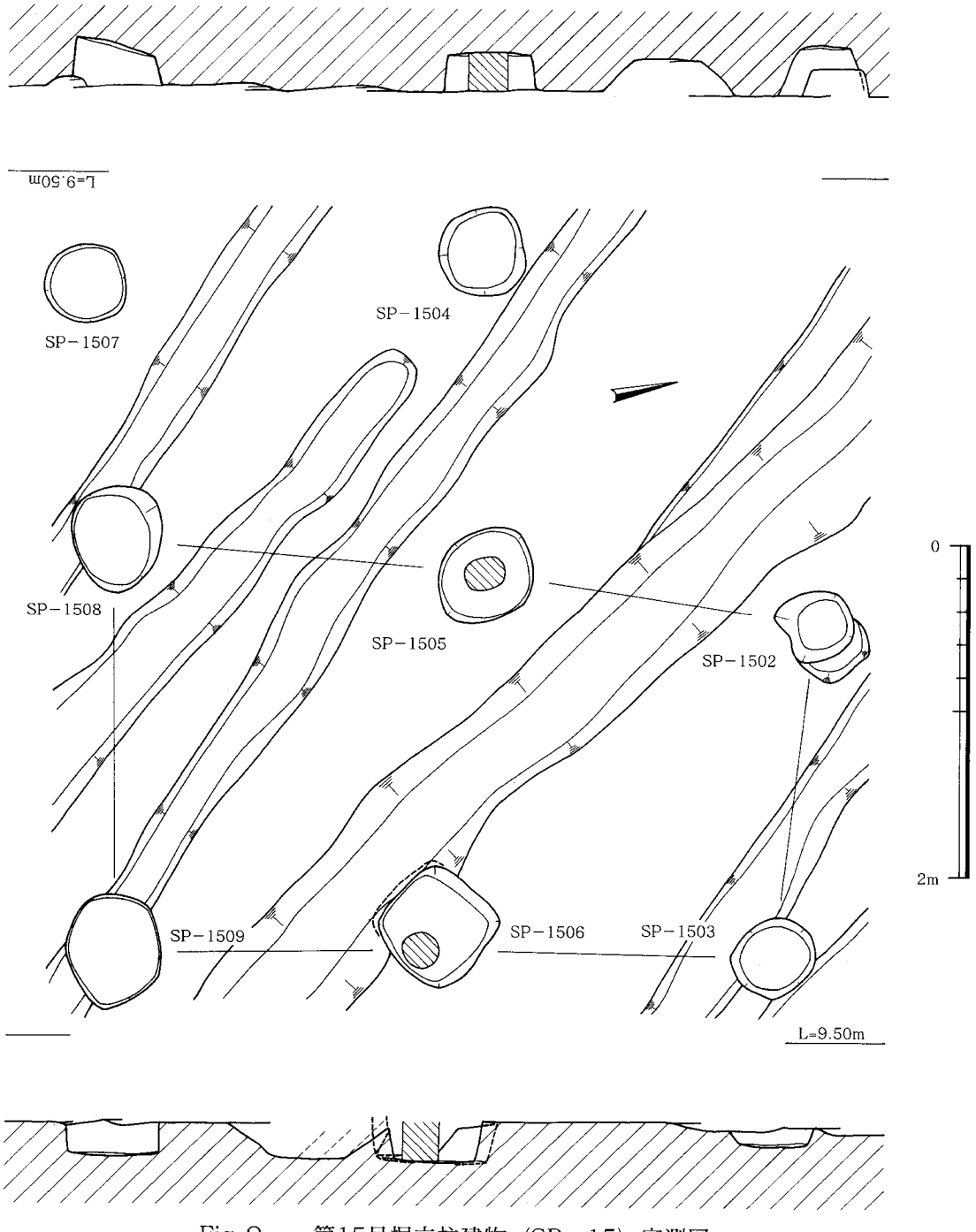


Fig. 9　第15号掘立柱建物（SB−15）実測図

したが、廃土移動し北側を精査した際、相対する桁行柱穴が確認できなかったため、建物として認定しなかった。

第14号建物（SB−14）　本建物は調査区南側の中央部から西寄りに位置し、SB−15やSD−06を切り、SD−01や現代の水田配水溝に切られている。SP−1401～1406の６本の柱穴から構成されている建物で、柱穴掘り方は一辺40～50cm前後を測る隅丸方形を呈し、12～40cm遺存している。各柱穴の柱痕跡から径20cm前後の円柱を用いたと考えられ、柱穴中心間は桁行が1.80～2.07ｍを測り、梁行柱穴間は2.96・3.26ｍを測る。本建物の各柱穴掘り方からは、弥生土器・土師器・須恵器

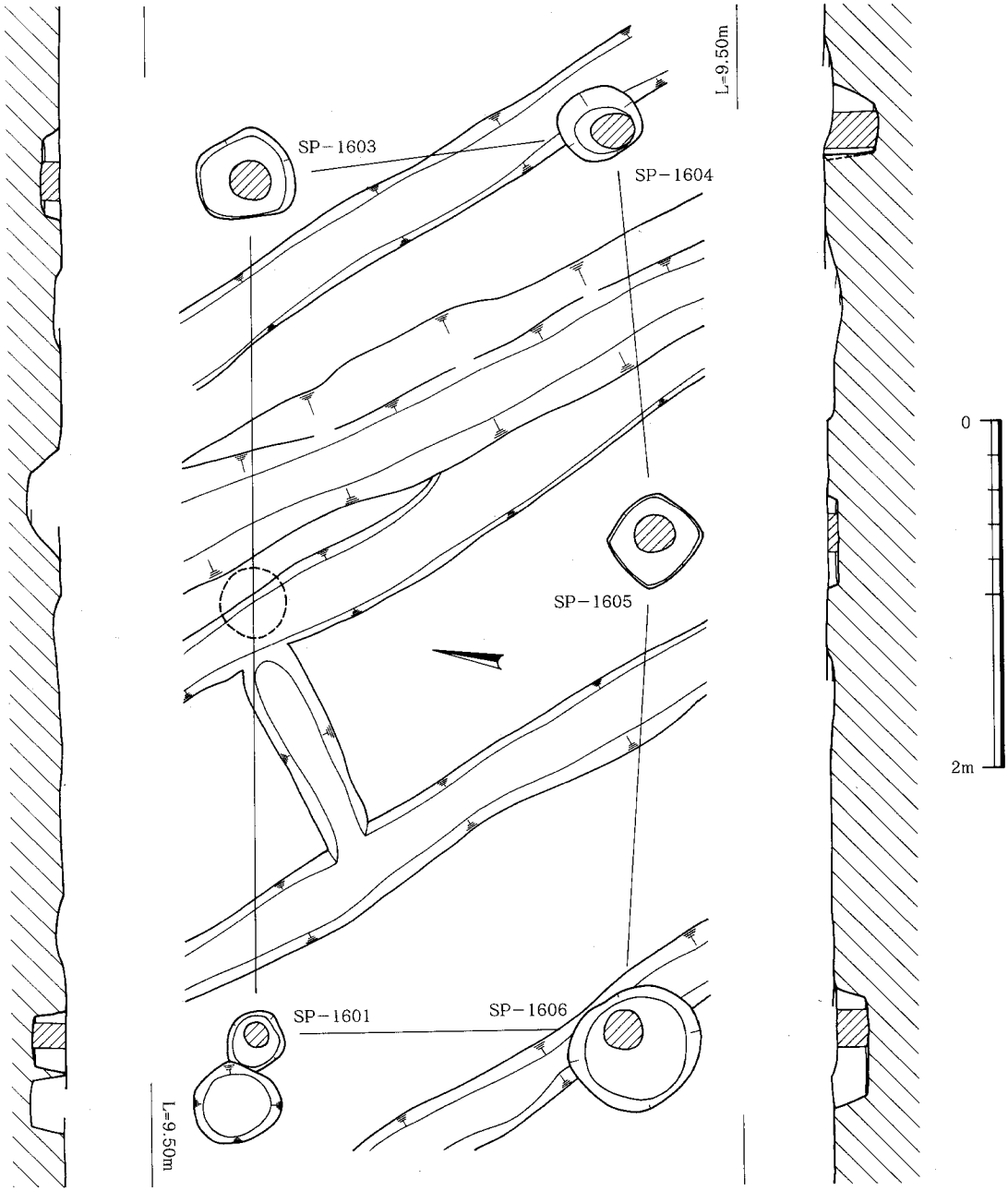


Fig.10　第16号掘立柱建物（SB－16）実測図

などが出土したが、いずれも細片で時期を決定できる遺物は出土しなかった。01・02はSP－1404から出土した須恵器の破片である。

以上から、本建物は、桁行２間、梁行１間の建物でN－26.5°－Wの主軸方位をとり、古墳時代後期以降から８世紀前後にかけての時期のものか。

第15号建物（SB－15）　本建物は調査区南側の中央部から西寄りに位置し、SD－06を切り、SB－14・SD－01や現代の水田配水溝に切られている。調査時にはSP－1502～1509の８本の柱穴から構成される総柱の建物として検出したが、整理の過程で精査した結果、SP－1502・1503・1505・1506・1508・1509の６本の柱穴からなる２×１間の建物として認定した。柱穴掘り方は径30cm前後を測る不正円形を呈し、10～30cm遺存している。柱穴中心間は桁行が1.85～2.24mを測り、梁行

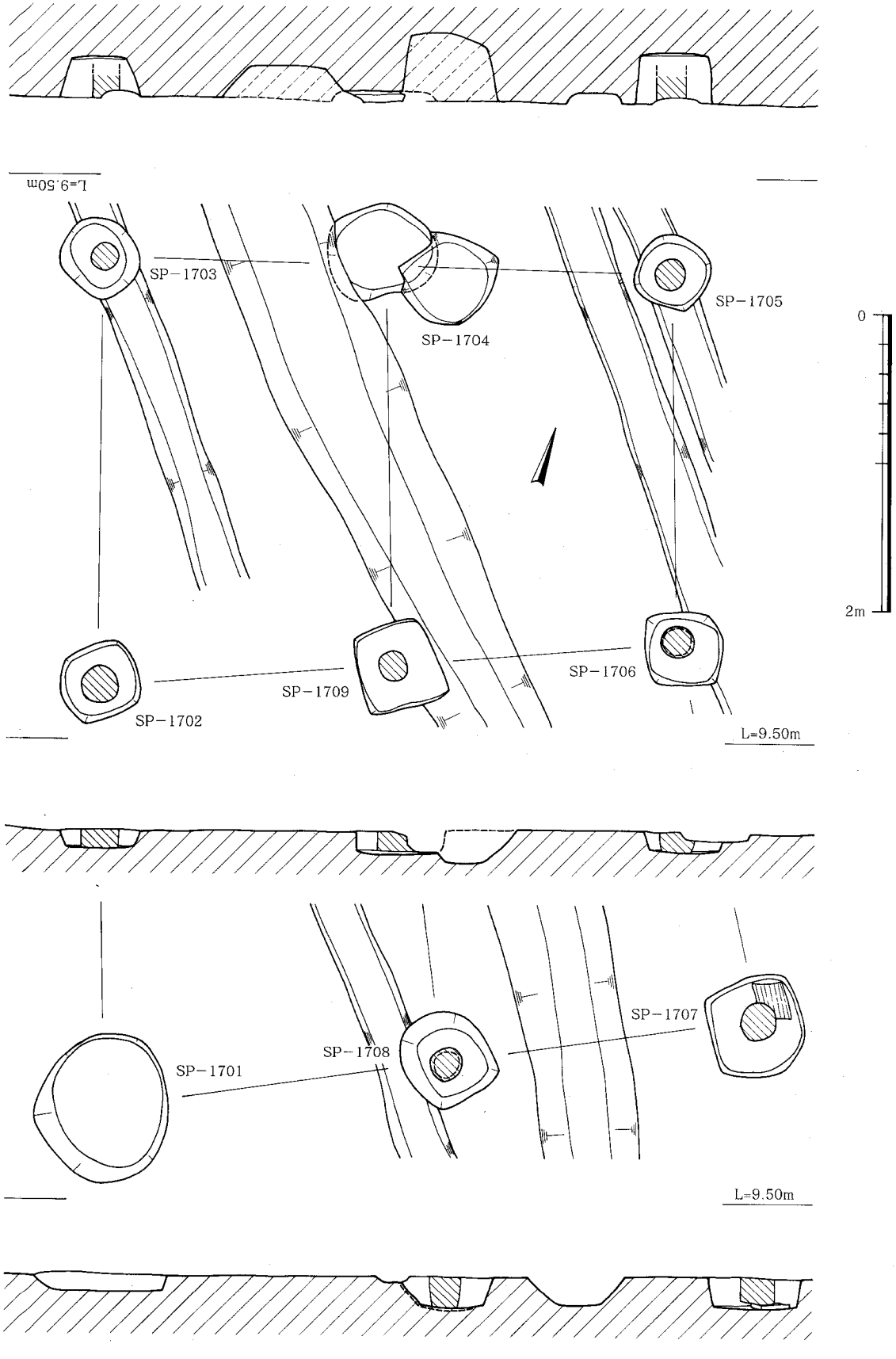


Fig.11　第17号掘立柱建物（SB−17）実測図

柱穴間は2.04・2.47mを測る。本建物の各柱穴掘り方からは、弥生土器が出土したが、いずれも細片で器台１点を図化した。03はSP－1509から出土した器台で、口径12.6cm、器高18.4cm、底径15.4cmを測る。

以上から、本建物は、桁行２間、梁行１間の建物でN－11°－Eの主軸方位をとり、弥生時代終末期から古墳時代にかけての時期のものか。

第16号建物（SB－16）　本建物は調査区南側のSB－14の北側に位置し、SD－06を切り、SD－01や現代の水田配水溝に切られている。本建物はSP－1601～1605の６本の柱穴から構成される建物で、柱穴掘り方は一辺45cm前後を測る隅丸方形を呈し、10～30cm遺存している。柱穴中心間は桁行が2.32～2.86mを測り、梁行柱穴間は2.10・2.12mを測る。本建物の各柱穴掘り方からは、弥生土器が出土したが、いずれも細片で２点を図化した。04・05はSP－1601から出土した無頸壺と支脚で、04は口径14.6cmを測る。

以上から、本建物は、桁行２間、梁行１間の建物でN－80.5°－Wの主軸方位をとり、弥生時代

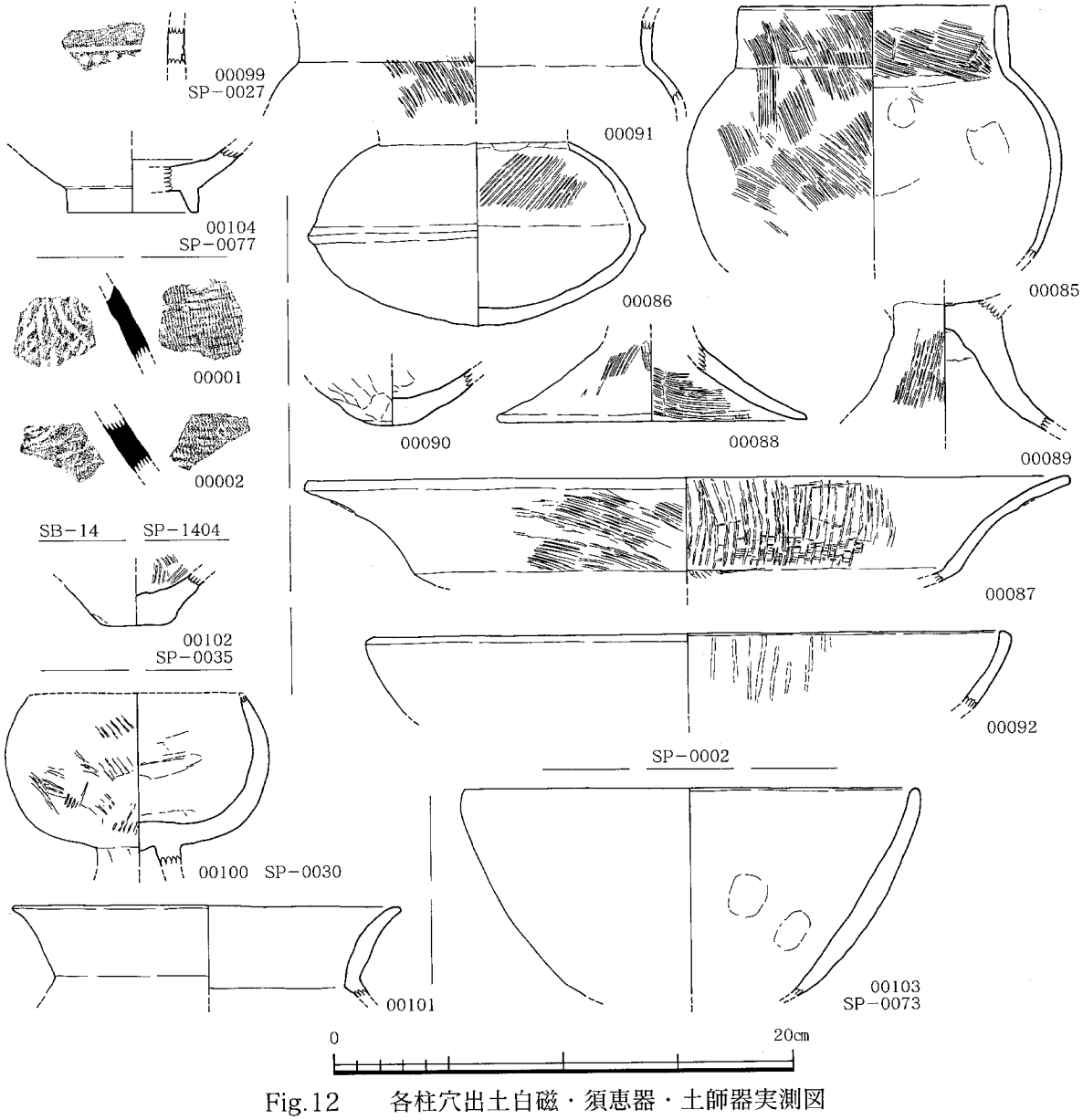


Fig.12　各柱穴出土白磁・須恵器・土師器実測図

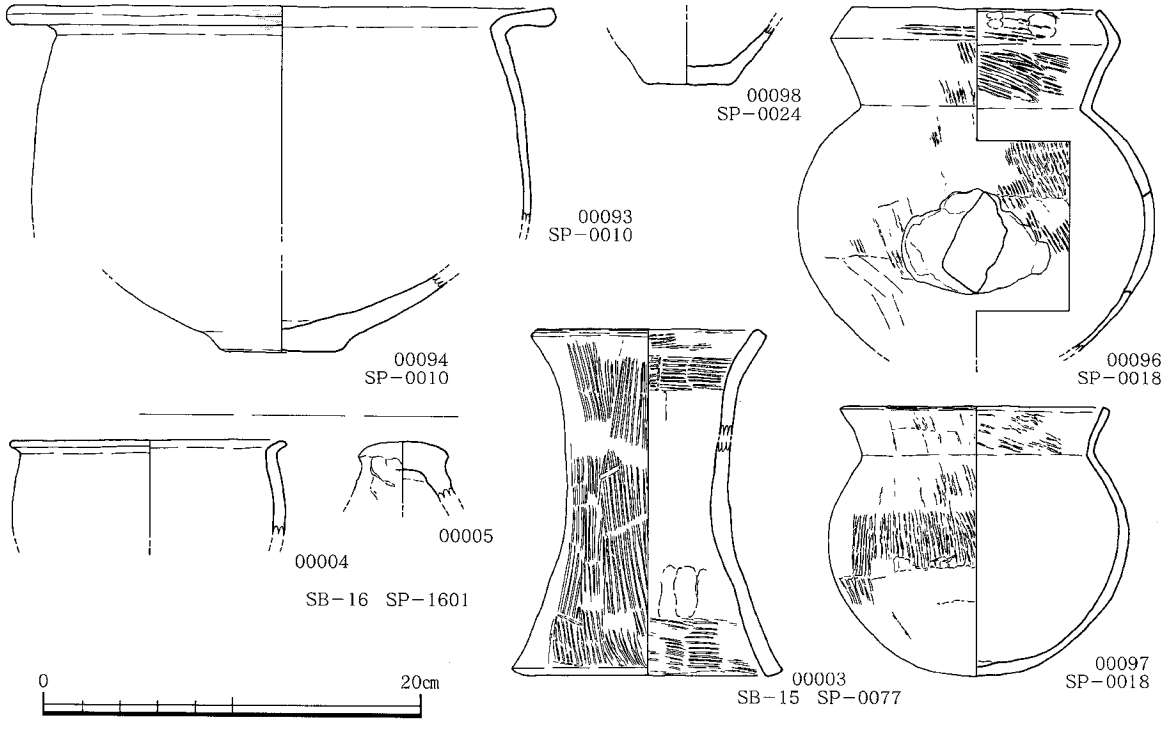


Fig.13　各柱穴出土弥生土器実測図

終末期から古墳時代にかけての時期のものか。

第17号建物（SB−17）　本建物は調査区中央部に位置し、SD−06や数基の柱穴を切り、SB−12・SD−01や現代の水田配水溝に切られている。SP−1701〜1709の９本の柱穴から構成されている総柱の建物で、柱穴掘り方は一辺40〜60cm前後を測る隅丸方形を呈し、12〜30cm前後遺存している。各柱穴の柱痕跡から径20cm前後の円柱を用いたと考えられ、柱穴中心間は桁行が2.48〜2.83ｍを測り、梁行柱穴間は1.89〜2.24ｍを測る。本建物の各柱穴掘り方からは、弥生土器・須恵器などが出土したが、いずれも細片で時期を決定できる遺物は出土しなかった。

以上から、本建物は、桁行２間、梁行２間の総柱の建物でN−18°−Wの主軸方位をとり、SB−14とほぼ同じ主軸方位をとることから古墳時代後期以降から８世紀前後にかけての時期のものか。

その他の柱穴出土遺物（Fig.12・13）　各柱穴からは、弥生土器・土師器・須恵器・白磁などの遺物が出土したが、いずれも細片であり、弥生土器５点、土師器13点、白磁１点を図化した。なお石器も出土しているが、建物の時期を決定できる遺物でないため一括して後で述べる。93・94・96〜98は弥生土器、85〜92・99〜0103は土師器、0104は白磁碗である。各柱穴から出土している遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期のもの、古墳時代後期から平安時代初期のもの、平安時代末から鎌倉時代初期のものであり、本調査地の建物の時期を反映しているといえよう。

３．土坑と出土遺物

本調査では、調査区北側の中央部で３基、調査区中央部から南側の西寄りで５基の土坑を検出した。

（１）第８号土坑（SK−08）と出土遺物（Fig.15・16，PL.３・６）

本土坑は調査区北側の中央部で、現代水田排水溝に切られたかたちで検出した。検出面では径90cm前後の不正円形を呈し、40cm強遺存し柱穴状をなしているが、本調査検出の柱穴よりも一回り大き

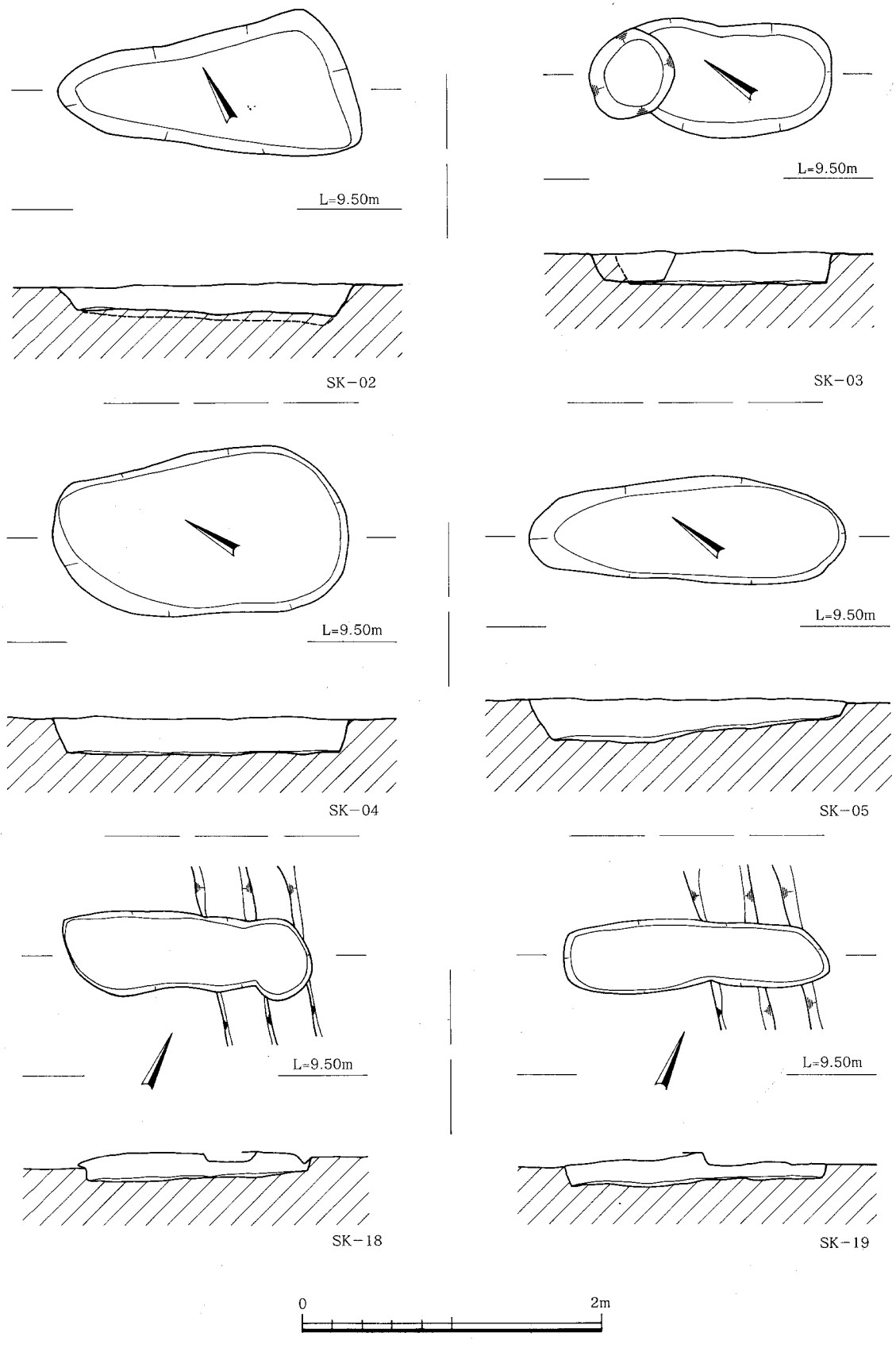


Fig.14　第2～5・18・19号土坑（SK−02～05・18・19）実測図

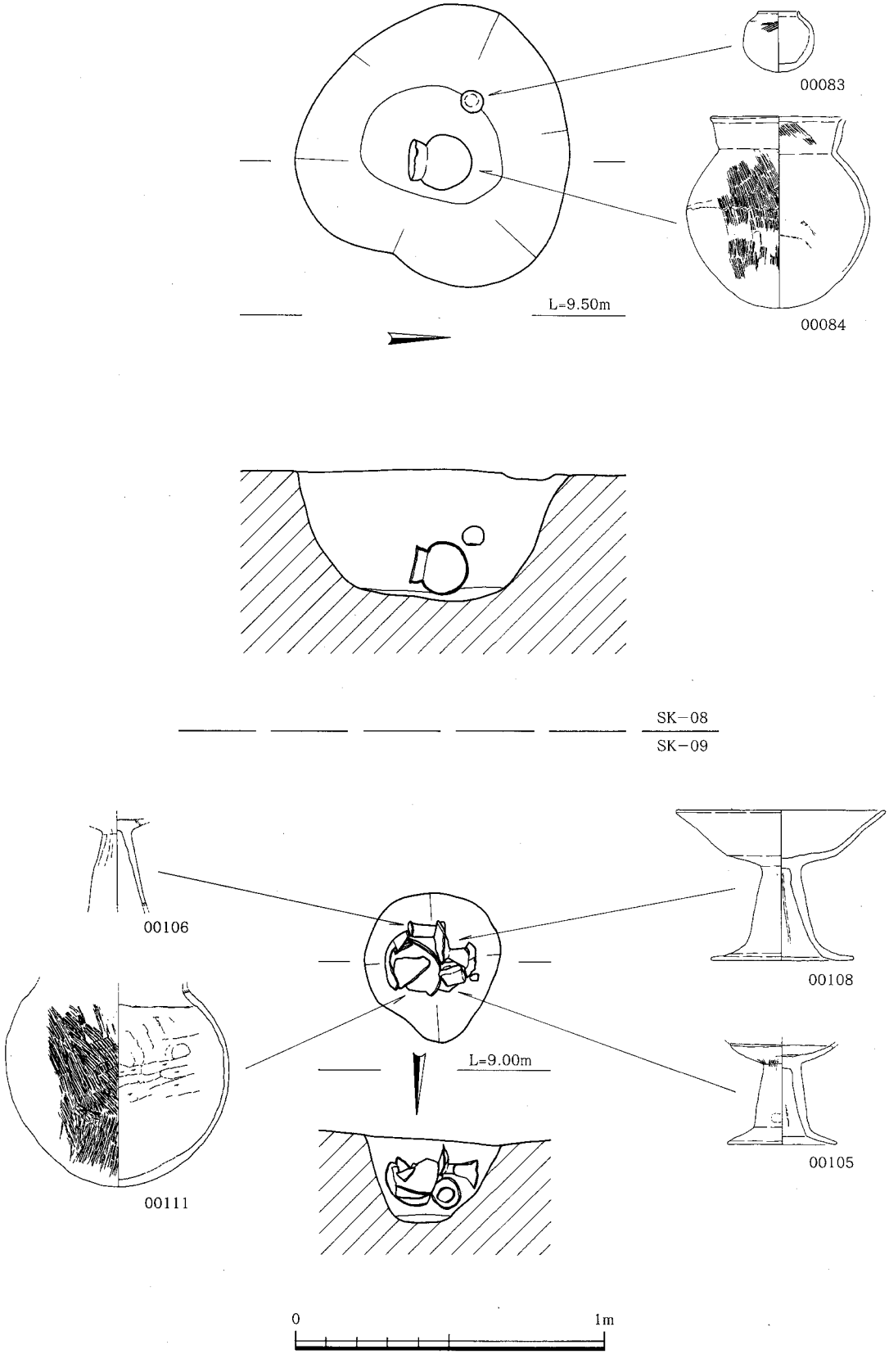


Fig.15　第８・９号土坑（SK−08・09）実測図

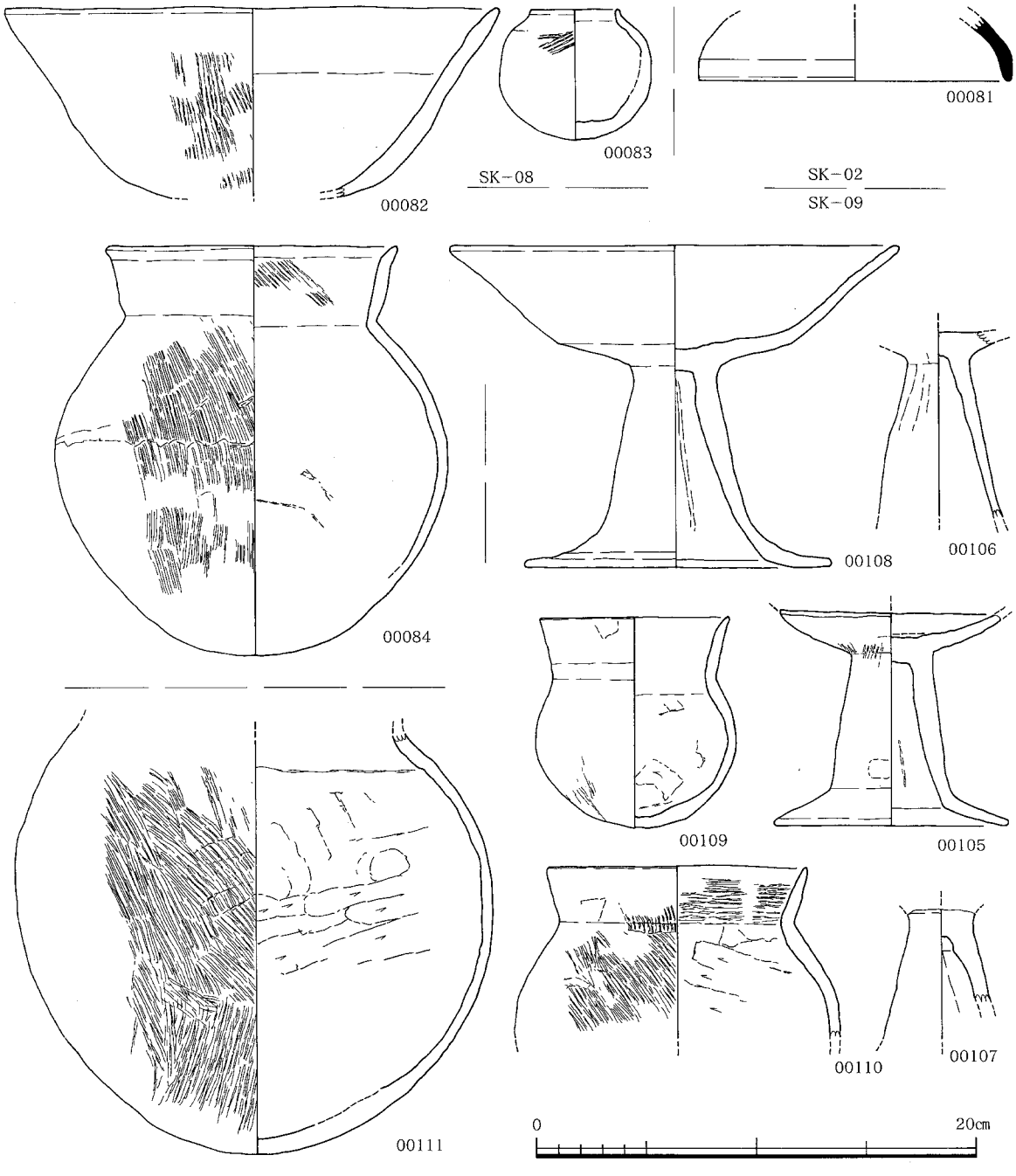


Fig.16　第２・８・９号土坑出土須恵器・土師器実測図

く、床面に２点の土師器完形品があるため屋内土坑の可能性が高いとして、SK−09とともに土坑とした。84は丸みを持つ胴から屈曲してやや開きながら立ち上がる口縁を持つ甕で、口径13.3cm、器高18.6cmを測る。83は小型の壺で、口径４cm強、器高６cm弱を測る。82は高坏の坏部で、口径22.4cmを測る。以上から、本土坑は５世紀の屋内土坑か。

（２）第９号土坑（SK−09）と出土遺物（Fig.15・16, PL.３・６）

本土坑は調査区のほぼ中央部に位置し、SB−17や３基の柱穴・現代の水田排水溝に切られている。検出面では径45cm前後の不正円形を呈し、27cm遺存しており、柱穴状をなして土師器がまとまって出土した。0110・0111は丸みを持つ胴から屈曲してやや開きながら立ち上がる口縁となる甕で、前者は口径11.8cmを測る。0109は小形丸底壺で口径8.6cm、器高9.5cm強を測る。0105〜0108は

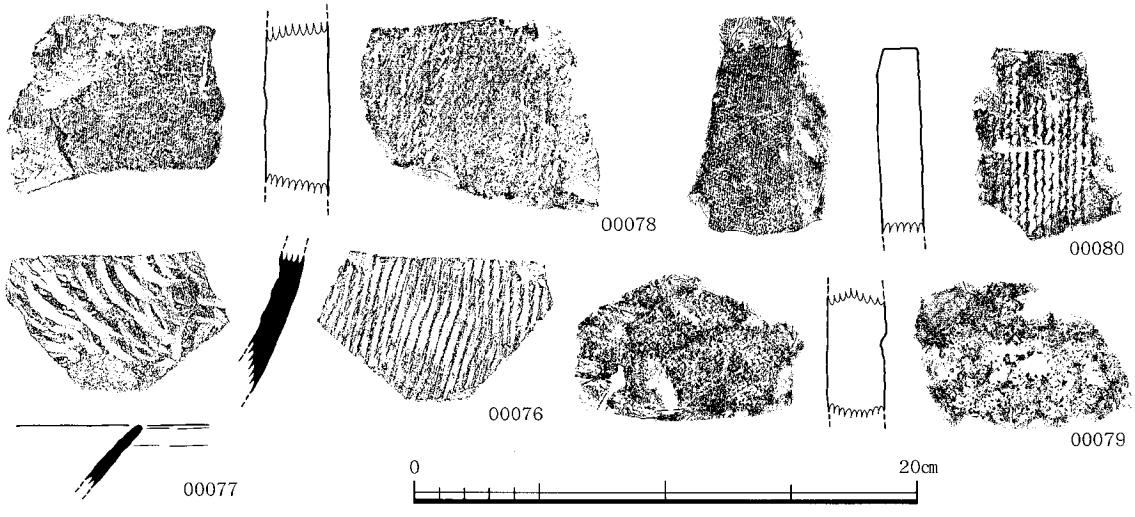


Fig.17　第１号溝出土須恵器・瓦類実測図

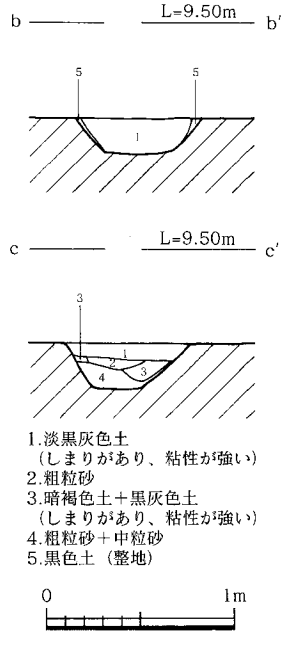


Fig.18　第1号溝（SD－01）土層断面実測図

高坏で、0108は口径20.4cm、器高14.7cm弱、底径13.7cmを測る。

以上から、本土坑は、屋内土坑（柱抜き後の祭祀の可能性もある）で５世紀前半頃のものといえよう。

（３）その他の土坑（SK）と出土遺物（Fig.14・16，PL.１）

調査区の中央部西端に南北方向に列ぶかたちで長軸1.5～2.1ｍ、短軸0.7～1.1ｍの平面形楕円形で25cm前後遺存するSK－02～05の４基の土坑を検出した。いずれもSD－06を切り、弥生土器・土師器・須恵器などの遺物を覆土中に含んでいるが、いずれも細片でありSK－02から出土した須恵器杯蓋１点（81）のみを図化した。調査区北側中央部では並列するSK－18・19の２基の布掘状をなす土坑を検出した。これらの土坑は、出土遺物から８世紀前後のものである。

４．溝と出土遺物

本調査では、調査区の中央から西側で、北西方向に流路をとる溝２条と調査区北側で北北西方向に流路をとる溝１条を検出した。

（１）第１号溝（SD－01）と出土遺物（Fig.17・18，PL.１・５）

本溝は、調査区中央部のやや西寄りで検出し、各建物やSD－06・20などを切り、一部の柱穴や現代水田排水溝に切られている。幅50～80cmで、横断面形は逆台形を呈し20～30cm遺存しており、淡黒灰色土・粗砂・暗褐色～黒灰色粘質土・黒色粘質土を覆土としている。本溝からは、弥生土器・土師器・須恵器・瓦類などが出土したが、いずれも細片であり、須恵器２点（76・77）と平瓦３点（78～80）を図化した。76は甕、77は杯である。本溝は、N－37°－Wの方位で流路をとる逆台形溝で、古代のものといえよう。

（２）第６号溝（SD－06）と出土遺物（Fig.19～25，PL.３・７～９）

本溝は、調査区の西側に位置し、SD－20を切り、他の遺構に切られている。検出時は、台地際と考え、西側段落ちとして遺物を取り上げた。溝か台地際かを確認するために、南側の一部を精査し

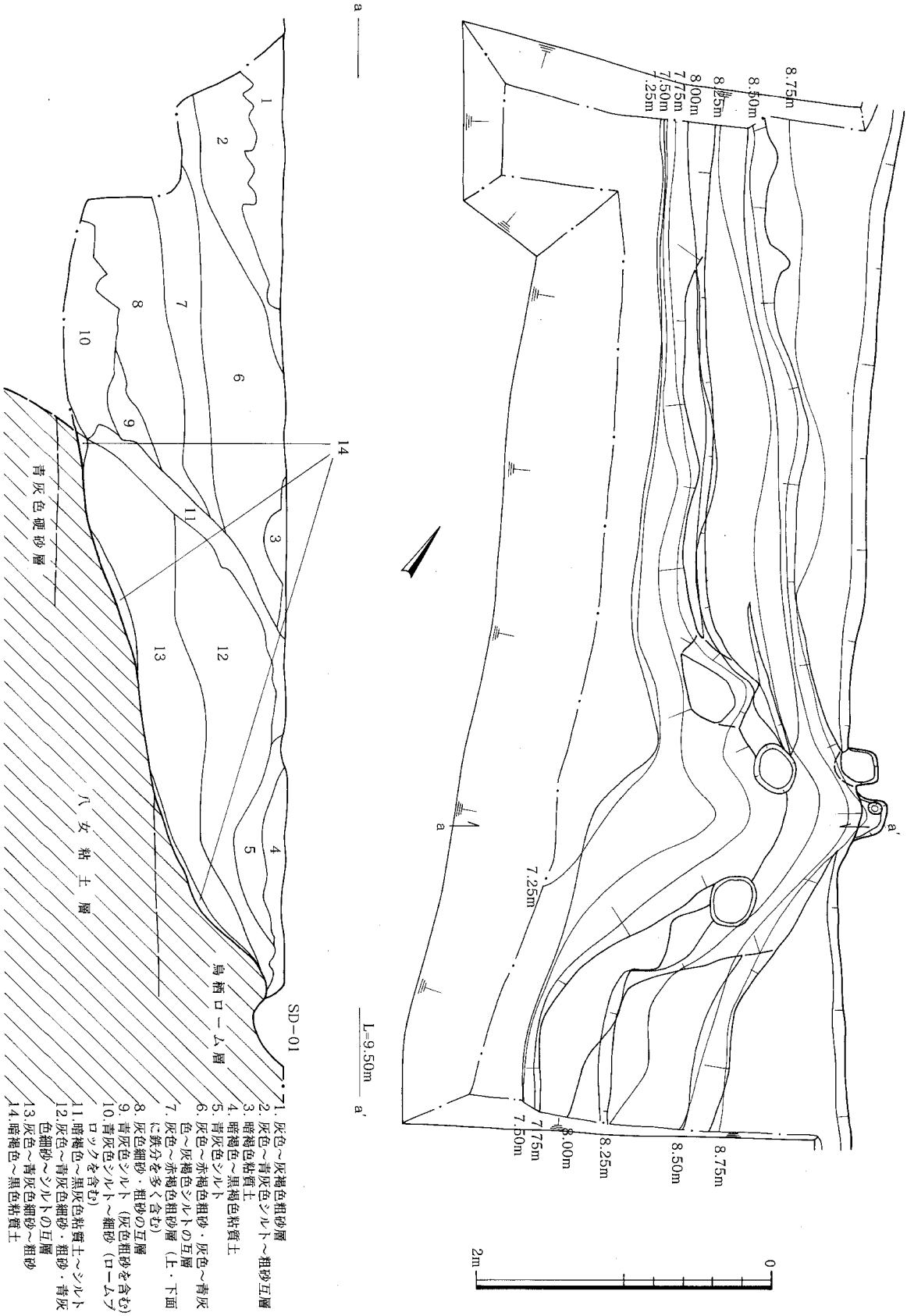


Fig.19　第６号溝（SD－06）実測図

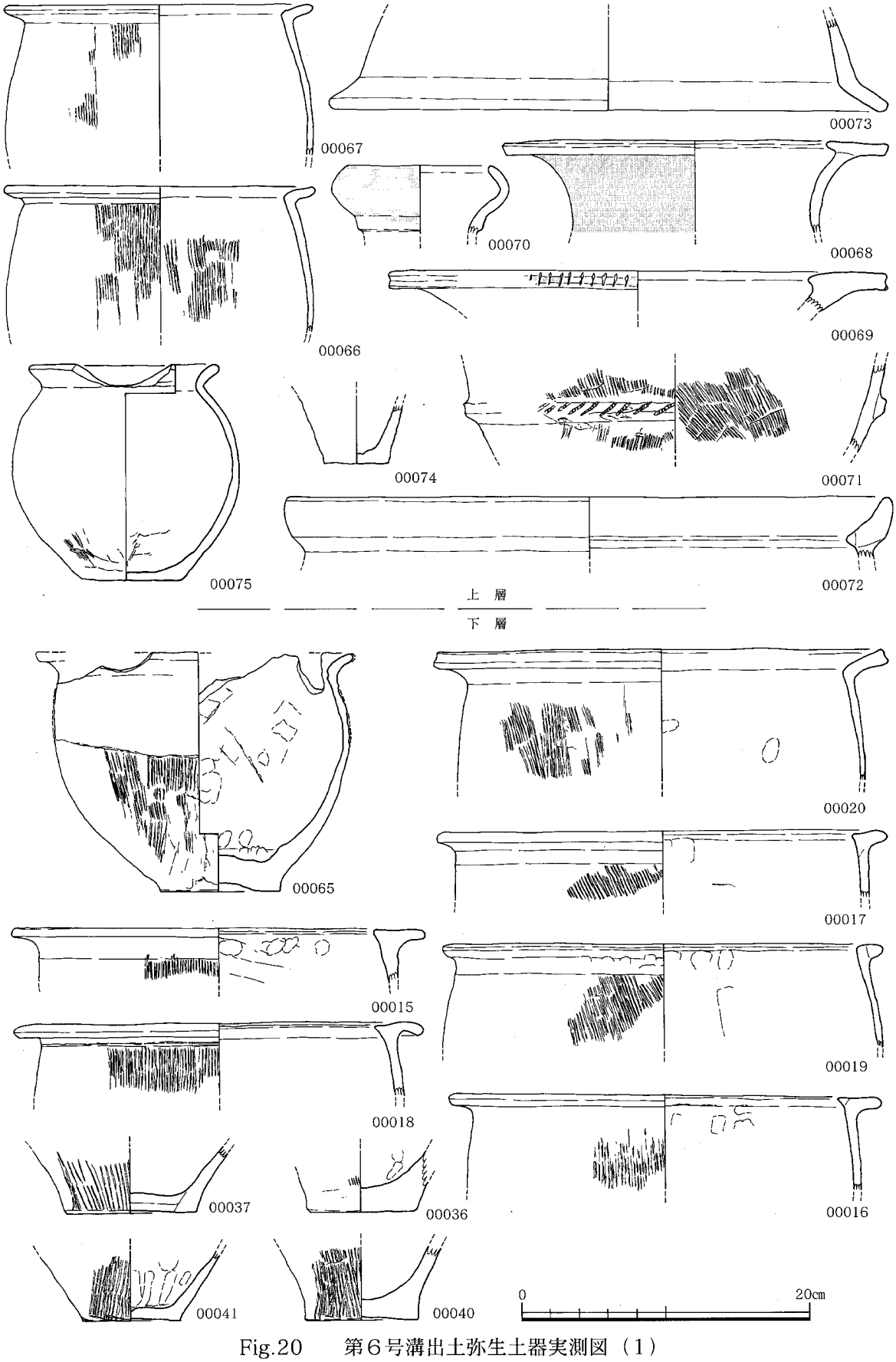


Fig.20　第６号溝出土弥生土器実測図（１）

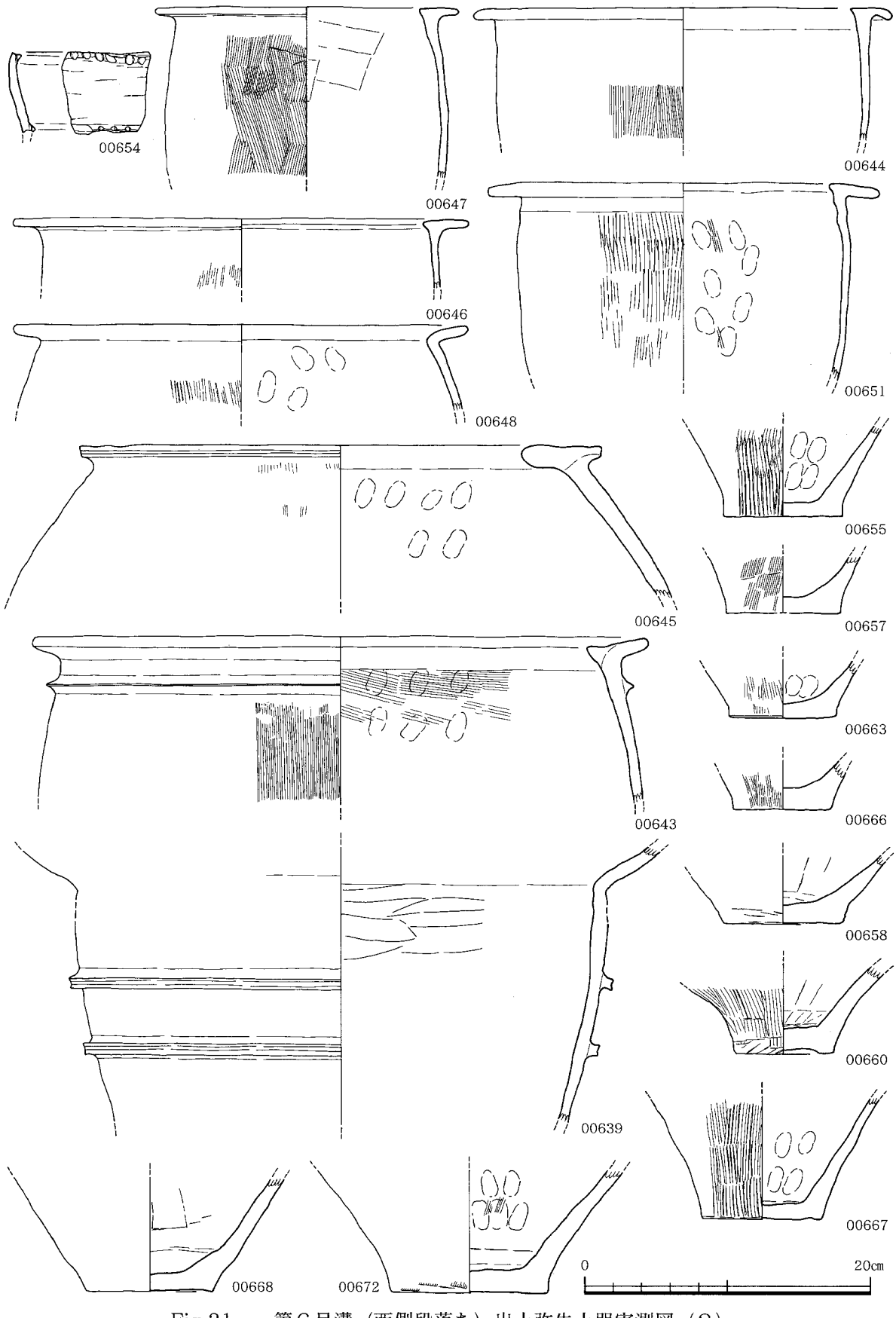


Fig.21　第６号溝（西側段落ち）出土弥生土器実測図（２）

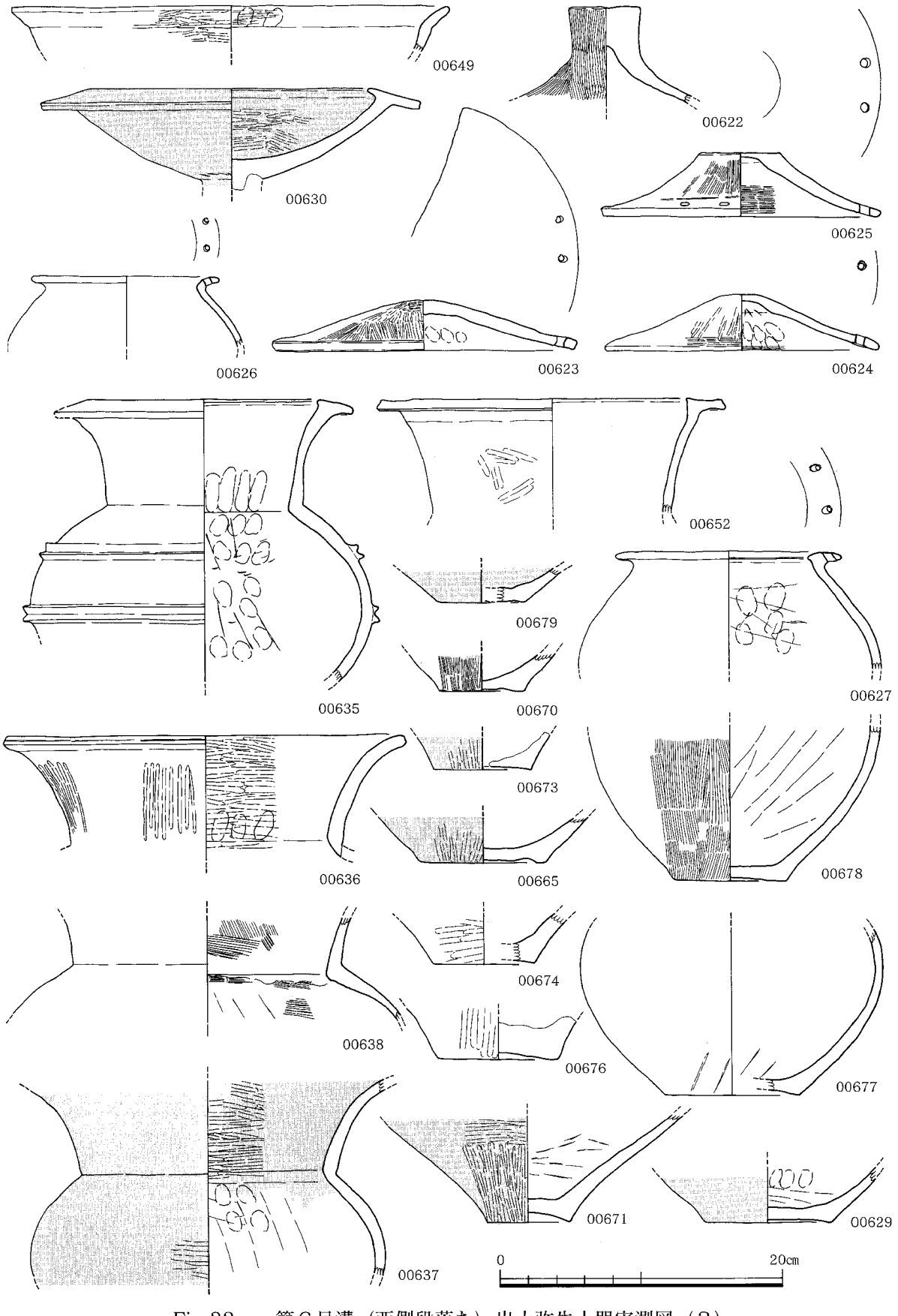


Fig.22　第６号溝（西側段落ち）出土弥生土器実測図（３）

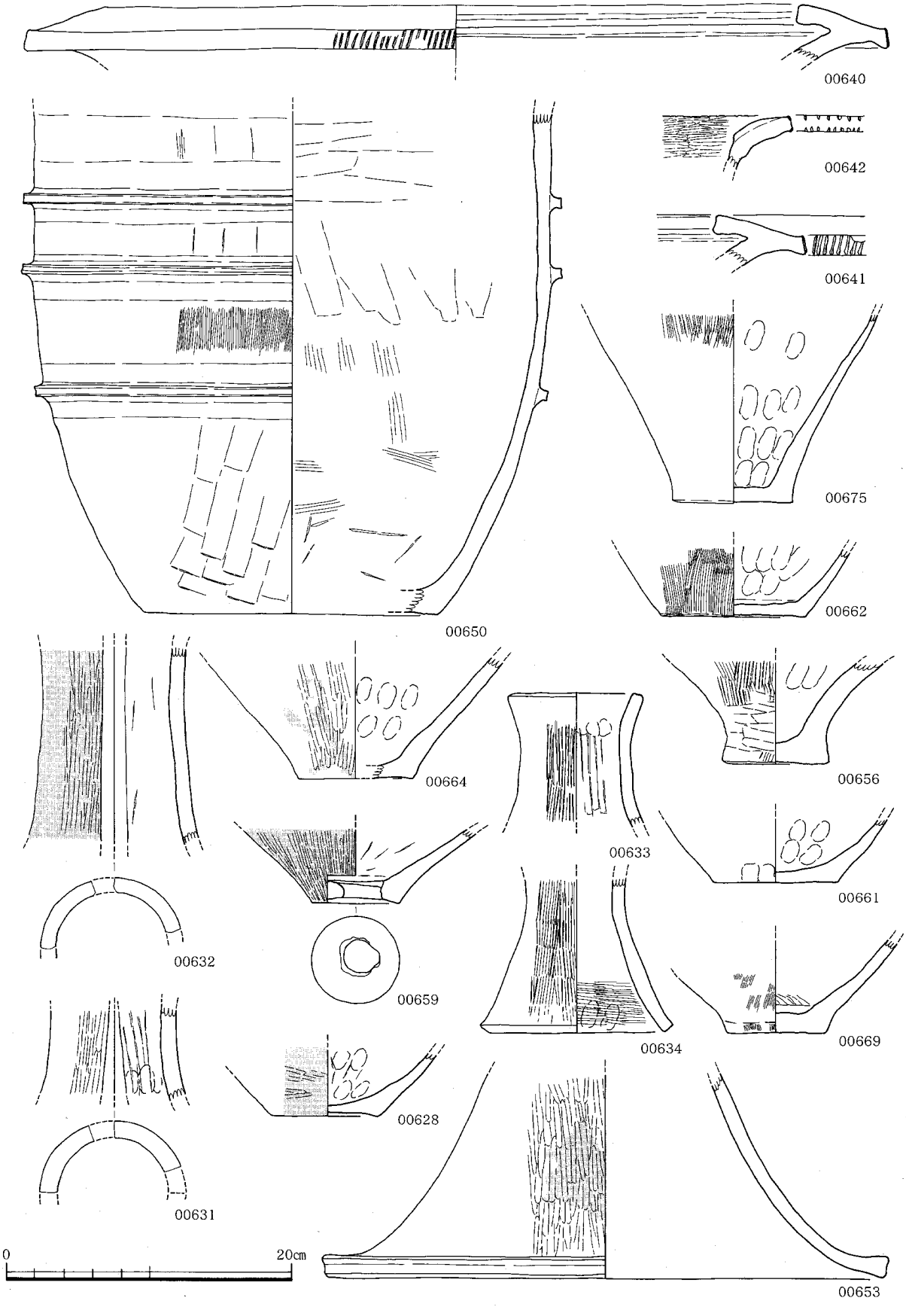


Fig.23　第６号溝（西側段落ち）出土弥生土器実測図（４）

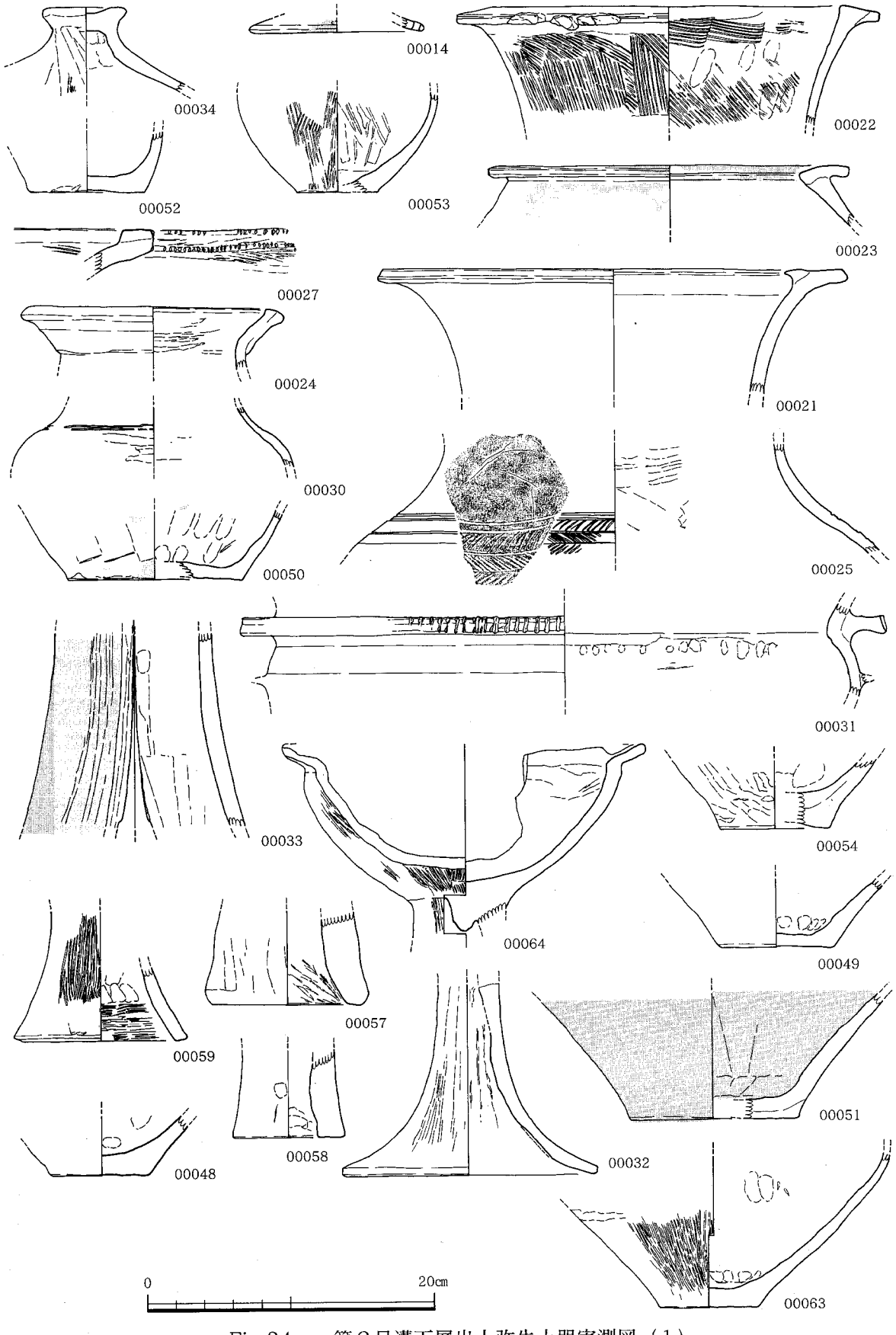


Fig.24　第６号溝下層出土弥生土器実測図（１）

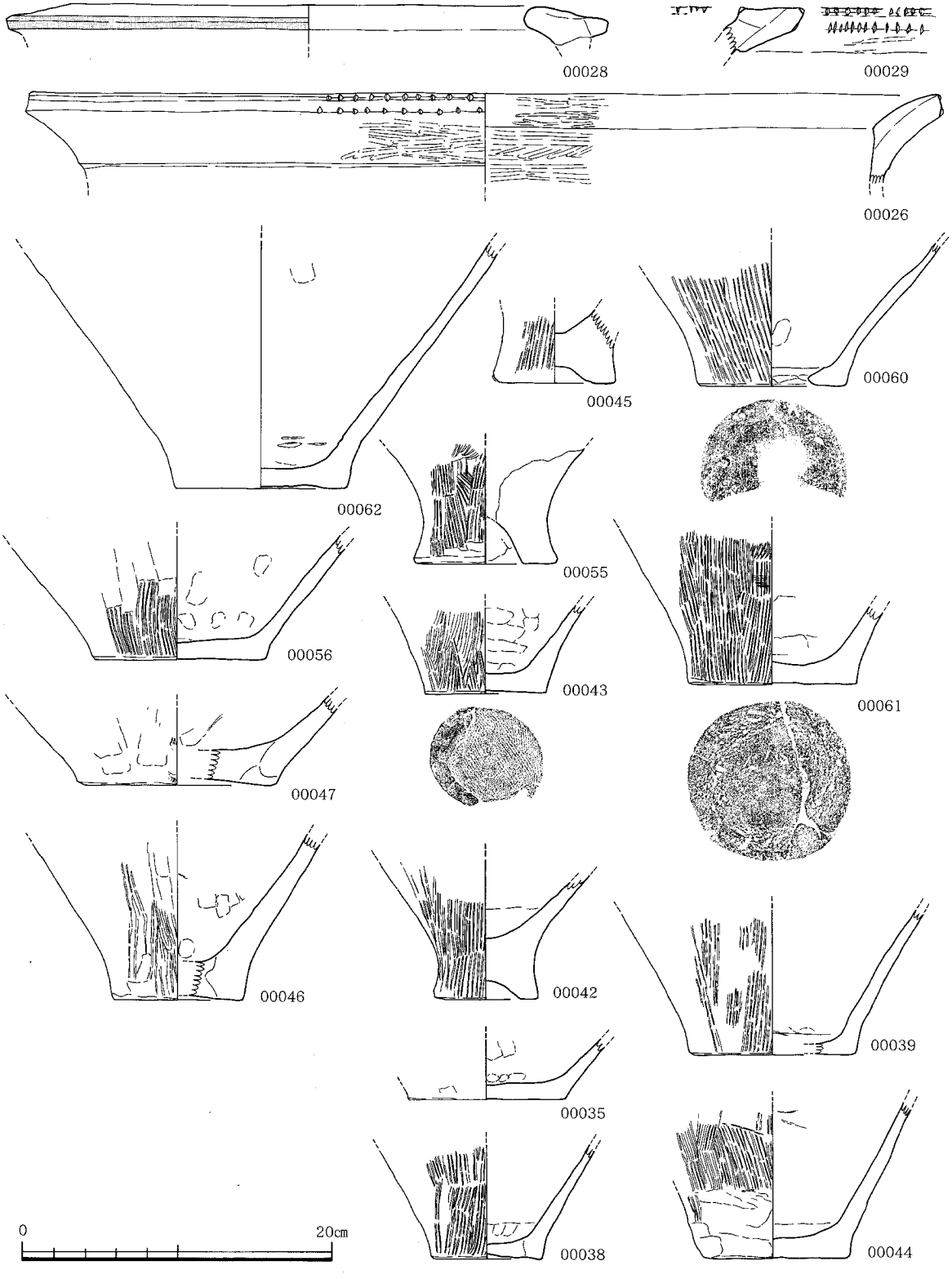


Fig.25　第６号溝下層出土弥生土器実測図（2）

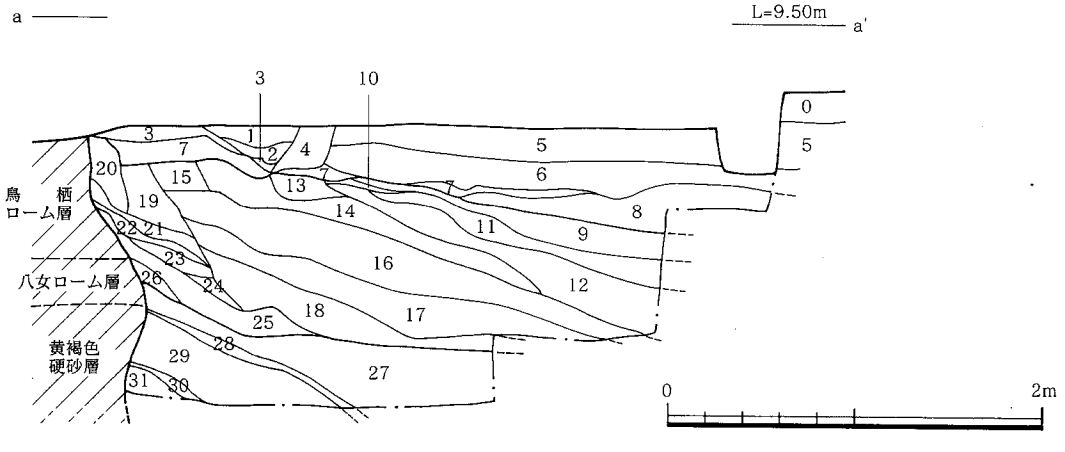
たが、調査区西側の民有地が1.5m前後の盛土を行い、境界にブロック塀を築いてあるため、調査対象地ぎりぎりまでの調査は断念した。ロームの堆積状況から、台地際を開析した自然流路か一部人手が加わった溝と判断した。埋土は図のとおりで、遺物は第１層の灰色～灰褐色の粗砂層から第11層の暗褐色～黒灰色粘質土～シルトを溝上層群とし、第12・１4層の灰色～青灰色細砂・粗砂・青灰

色細砂～シルトの互層、灰色～青灰色細砂～粗砂、暗褐色～黒色粘質土を溝下層群として取り上げた。ただし、溝上層群は底を確認できなかった。本溝からは、弥生土器・蛤刃石斧などの石器・土製品などのまとまった遺物が、第１～６層と第13層から出土した。以下、簡単に出土土器についてみていくことにする。なお、出土石器・土製品については、出土石器・土製品の項で述べる。

西側段落ち取り上げ分からみていくと、0654は縄文時代終末期の突帯文土器甕、0649は同時期の浅鉢、他は弥生土器で0638・0643・0644・0646～0648・0650・0655～0657・0660・0662～0664・0666～0668・0672・0675・0676は甕、0622は甕蓋、0626・0627～0629・0635～0638・0652・0658・0659・0661・0665・0669～0671・0673・0674・0677～0679は壺、0623～0625は無頸壺蓋、0630は高坏、0631・0632・0653は筒形器台、0633・0634は器台、0640～0642・0645は甕棺用大型土器である。甕は0648のようにくの字状口縁を持つものと逆Ｌ字状口縁をなすものがある。壺は無頸壺（0626・0627）、0636のように肩張りの胴から屈曲して開きながら立ち上がり口縁となる広口の壺、0635のように球状をなす胴から屈曲してやや開きぎみに立ち上がり鋤先状口縁を持つ壺などがある。

上層群出土の弥生土器は、66・67・71・72・75は甕、73は蓋、68～70は壺、74はコップ形土器である。71は胴下半にコの字状突帯を巡らし、コの字状突帯には工具木口による刻みを施し、器面には表裏ともハケ目調整を施している。75は胴中央部に最大径を持ち、口縁はくの字状をなし、底は平底に仕上げている。口径13.2cm、器高15cm、底径6.9cmを測る。壺は袋状口縁壺や鋤先状口縁を持つ広口壺などがある。本層群は、弥生時代後期初頭から終末期の弥生土器を包含している。

下層群出土の弥生土器は、15～20・35～46・55・60・61・65は甕、34は甕蓋、53は鉢、21～23・25・30・31・48～52・54・62・63は壺、14は壺蓋、32・64は高坏、33は筒形器台、57～59は器台、26～29・47・56は甕棺用大型土器である。甕は20のようにくの字状口縁を持つもの



0.現代水田耕土
1.暗褐色シルト～粘質土
2.暗灰色シルト
3.暗褐色粘質土
4.暗褐色粘質土（3より黒味が強い）
5.暗褐色～暗灰色シルト～粘質土
6.暗灰色～灰色シルト
7.黒色～黒灰色粘質土
8.灰色シルト～砂質土
} 上層

9.黒色粘質土
10.黒色～暗褐色粘質土
11.黒褐色粘質土～シルト
12.黒灰色シルト
13.暗褐色シルト
14.黒灰色シルト～砂質土
15.暗褐色～黒褐色粘質土
16.暗褐色～黒褐色シルト
17.黒褐色シルト～粘質土
18.暗褐色粘質土
19.黒色～黒褐色粘質土
20.褐色粘質土（ローム再堆積）
} 中層

21.黒褐色粘質土
22.淡褐色粘質土（ローム再堆積）
23.黒灰色粘質土
24.黒色シルト
25.黒灰色粘質土
26.褐色粘質土
} 中層
27.灰色シルト
28.黒色粘質土
29.灰色シルト
30.黄褐色硬砂層
31.黄褐色ローム混じり砂層
} 下層

Fig.26　第20号溝（SD－20）土層断面実測図

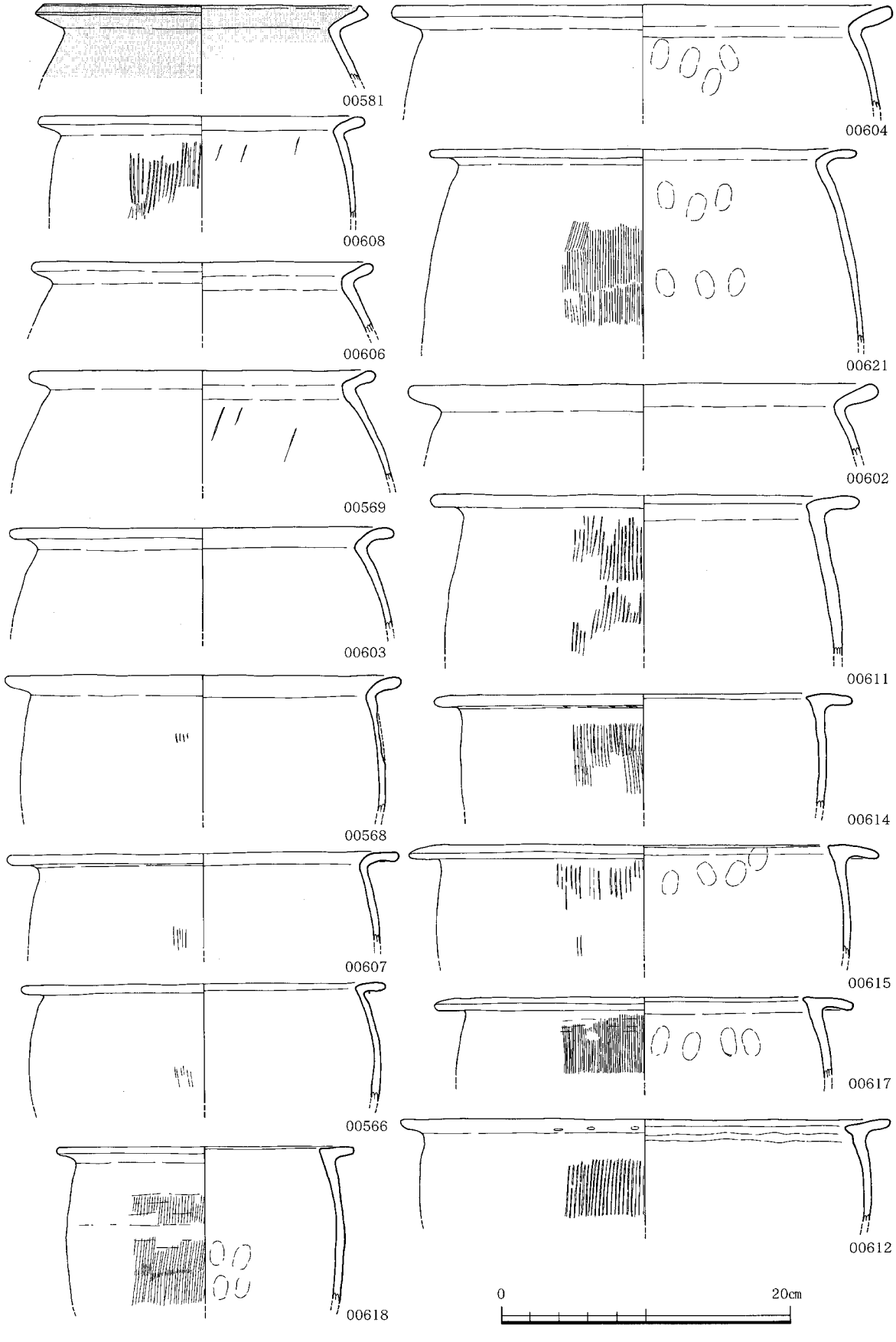


Fig.27　第20号溝上層出土弥生土器実測図（1）

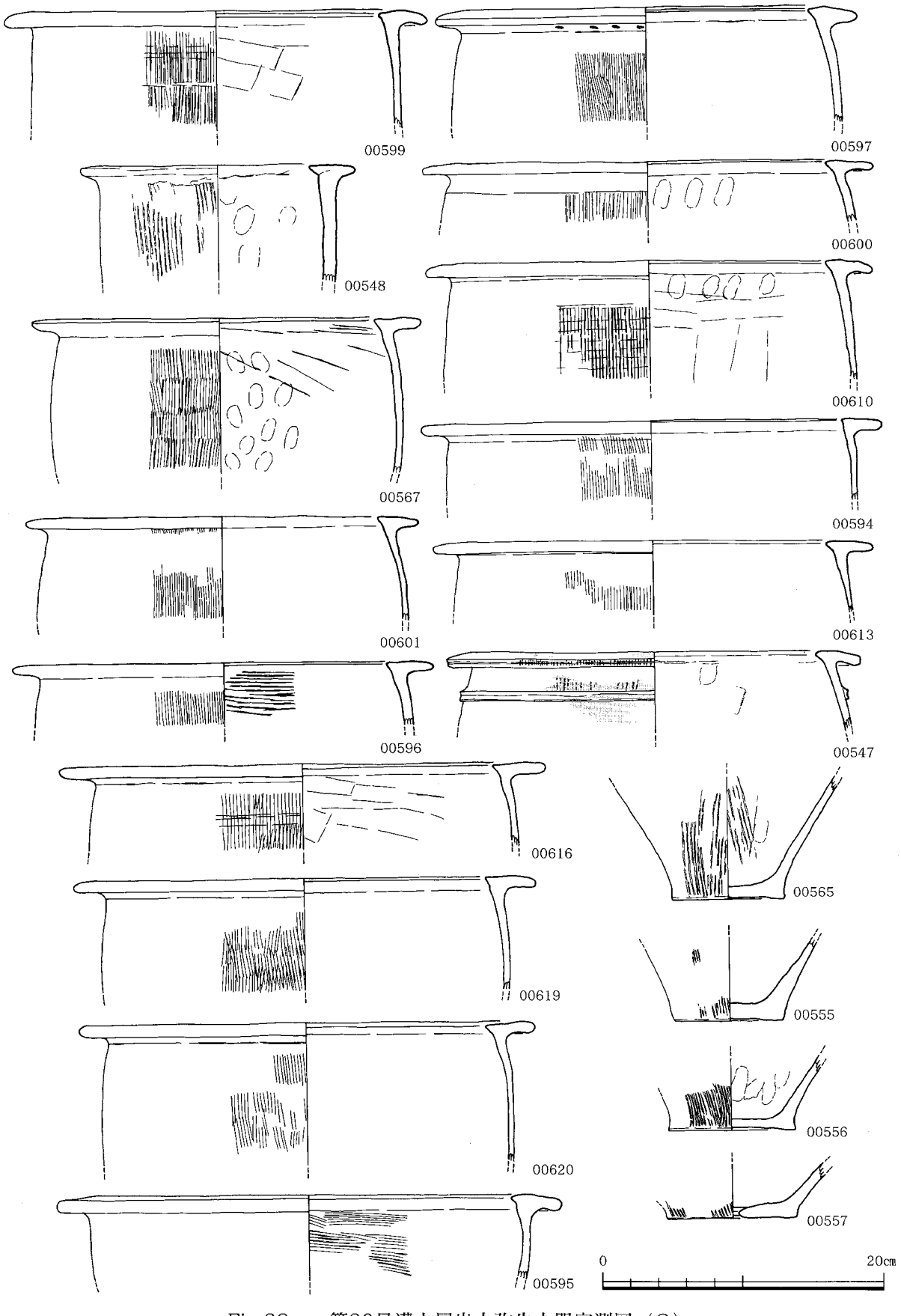


Fig.28　第20号溝上層出土弥生土器実測図（2）

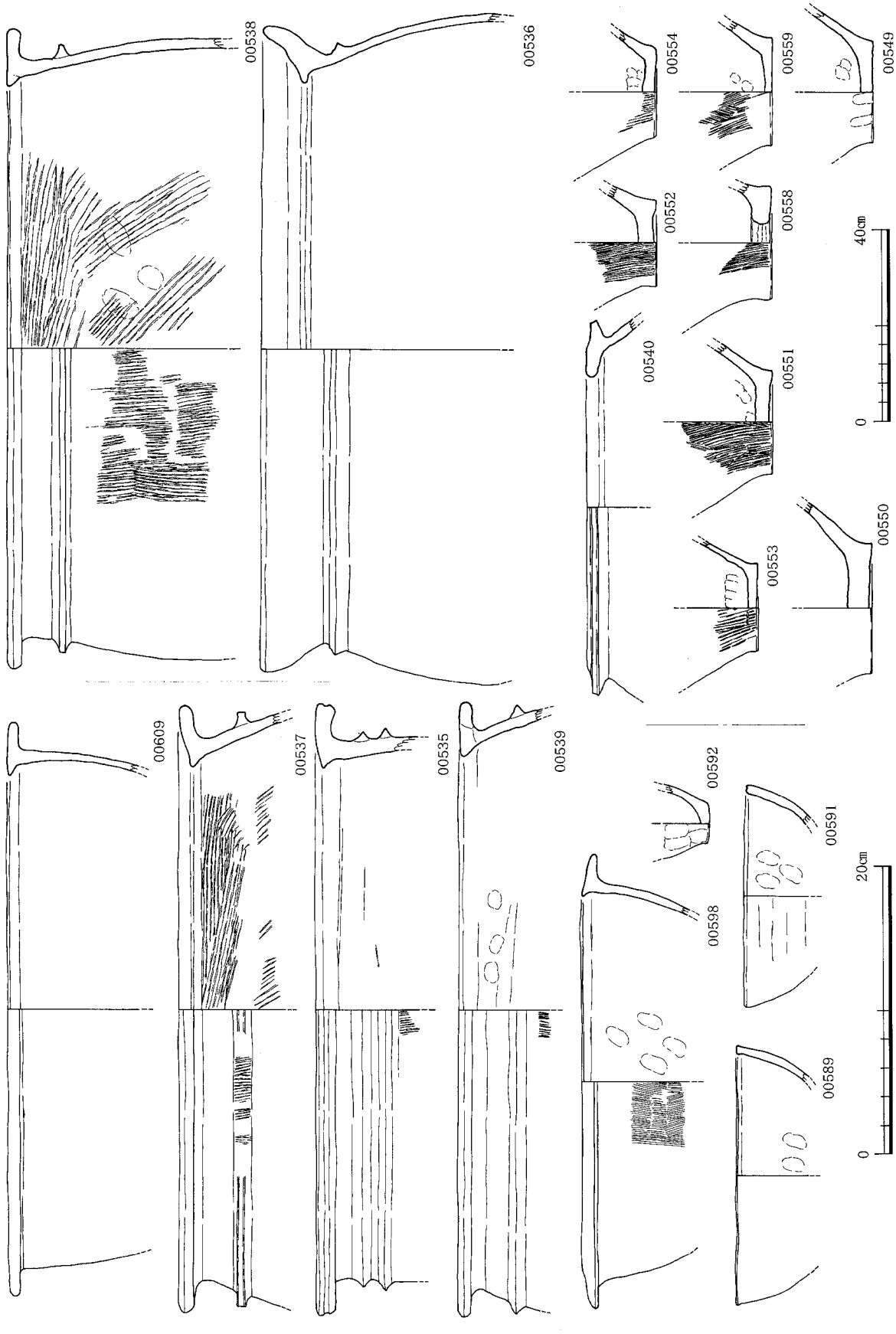


Fig.29　第20号溝上層出土弥生土器実測図（3）

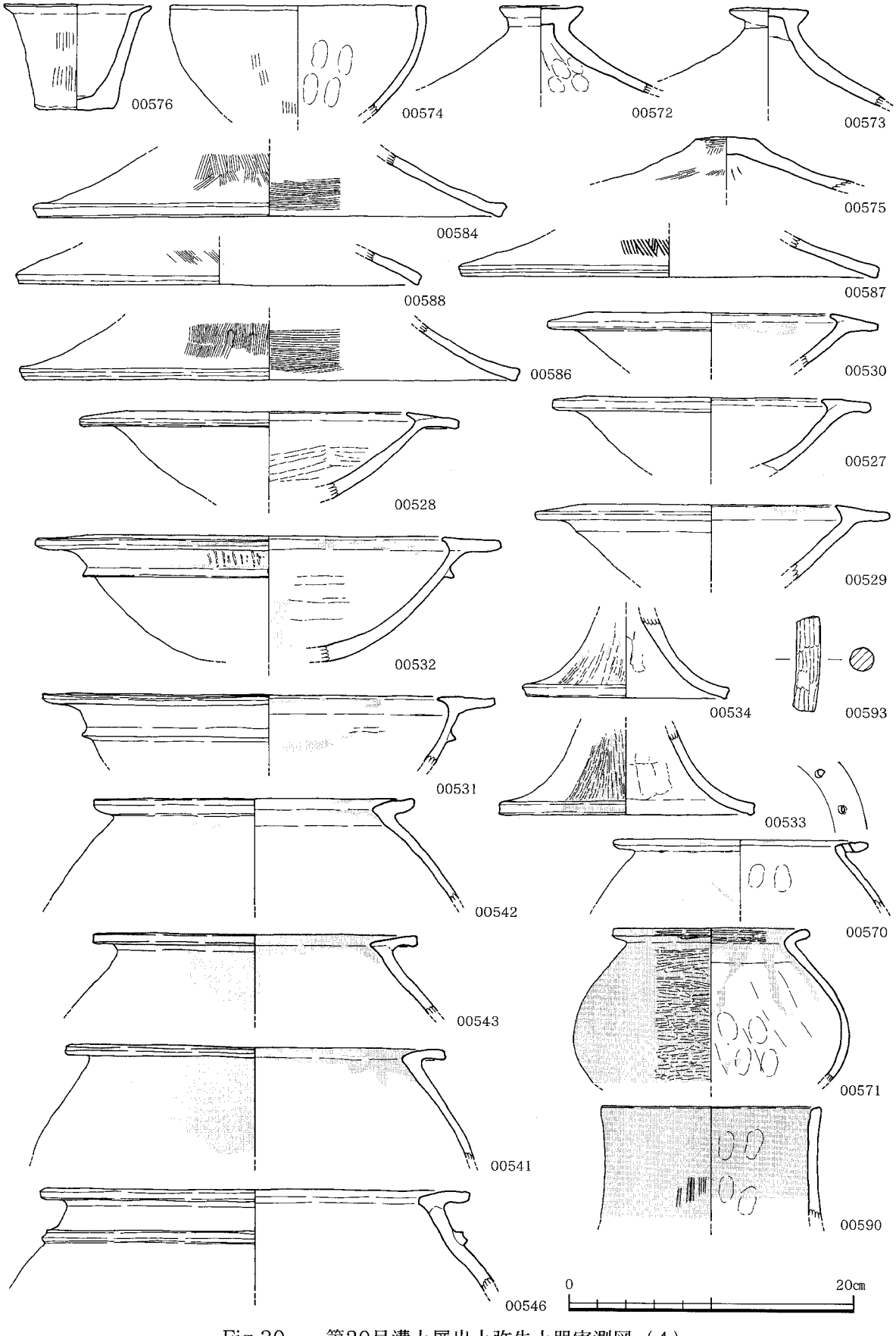


Fig.30　第20号溝上層出土弥生土器実測図（4）

と18のように逆L状口縁を持つものがあり、65は胴上半部が張り、口縁はくの字状をなし、底は上げ底で、胴外面はハケ目調整を施し、口縁から内面にかけてはナデ調整で仕上げている。口径21cm、器高21cm、底径8.4cmをはかる。壺は、24・25・30は前期の壺で、24は肥厚した口縁、25・30は胴肩部である。もっとも多いのは鋤先状口縁を持つ広口の壺で、無頸壺などがある。64はくの字状口縁を持つ坏部で、外面はハケ目調整が施され、口縁から内面はナデ調整で仕上げられているが、坏部の大半は、意図的に打ち欠かれている。口径25.4cmを測る。本層群は、弥生時代前期から後期初頭までの弥生土器が出土しているが、もっとも多いのは中期末から後期初頭のものである。

以上から本溝は、N－35°－W前後の方位をとり、台地の際近くを開析した自然流路に人手が一部加わった溝で、出土遺物から弥生時代中期末前後に溝として存在し、弥生時代終末期には埋没したと考えられる。

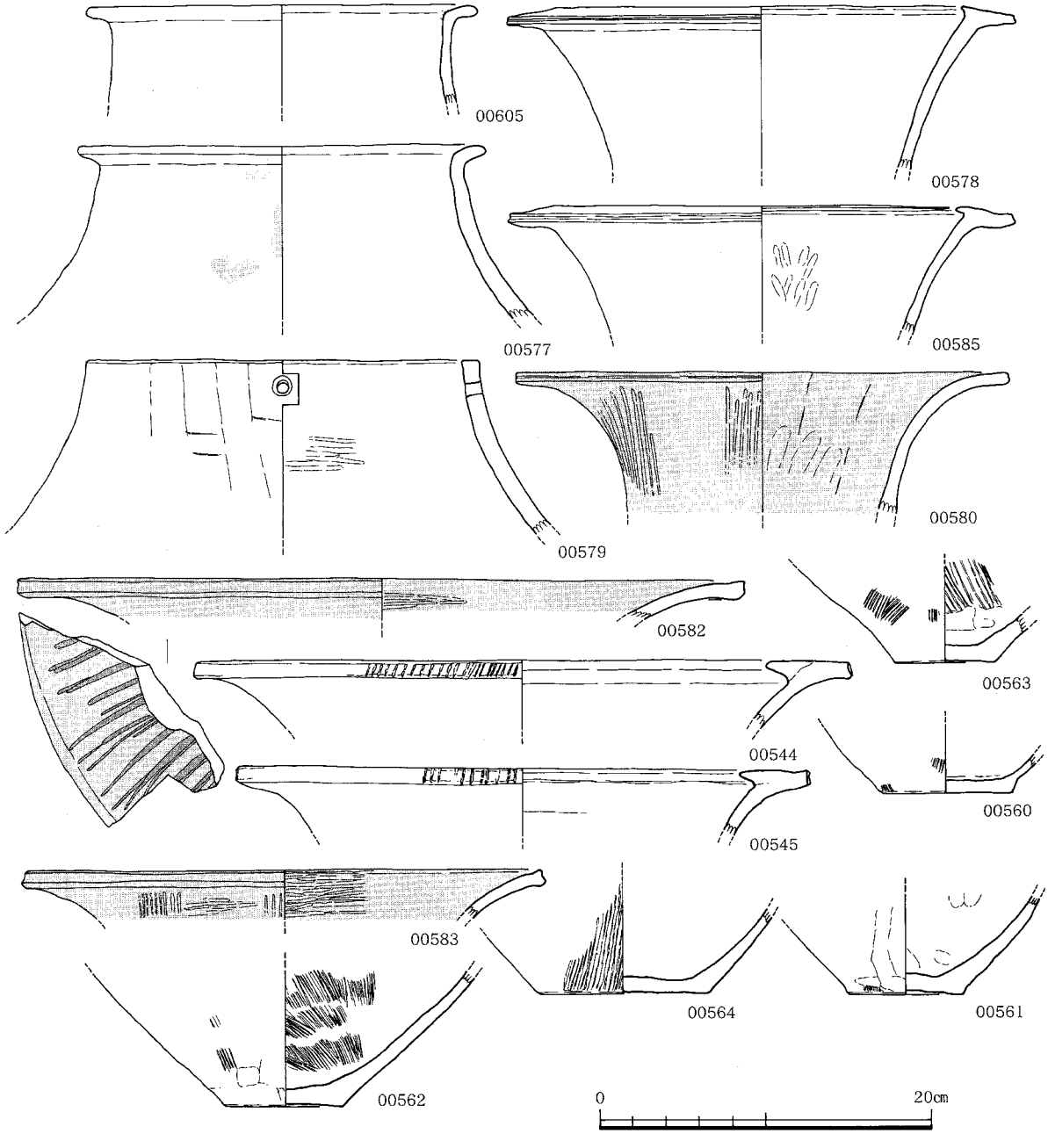


Fig.31　第20号溝上層出土弥生土器実測図（5）

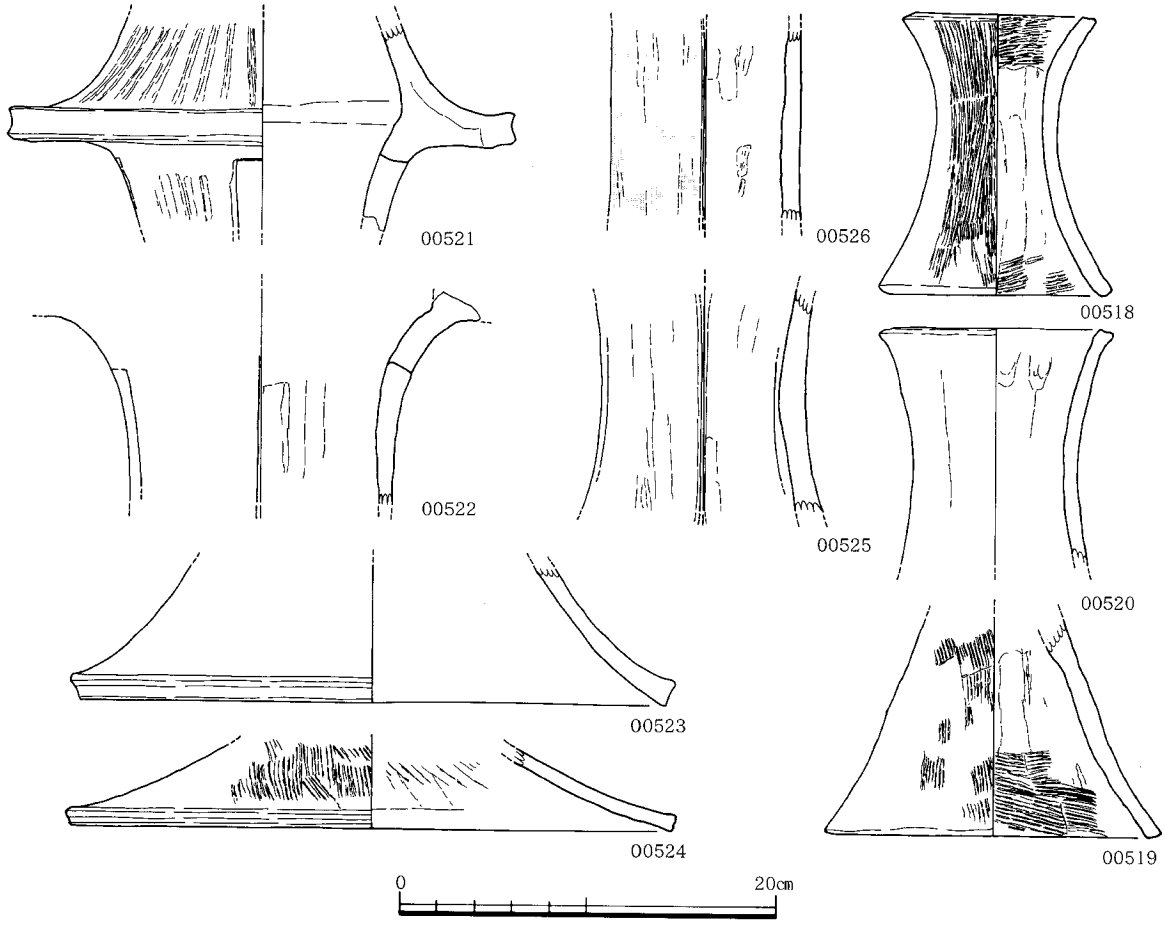


Fig.32　第20号溝上層出土弥生土器実測図（6）

（3）第20号溝（SD－20）と出土遺物（Fig.26～55, PL.3・10～18）

本溝は、調査区の北側で各遺構群に切られた状況で検出した。調査時は北側段落ちとして精査したが、鳥栖ローム・八女ローム・黄褐色硬砂層を切っており、調査区側の壁が直に近いことから、北側の立ち上がりは確認できなかったが、なんらかの人手が加わっているとして溝と認定した。遺物は、第５～８層を上層群出土遺物、第９～20層を中層群出土遺物、第21～31層を下層群出土遺物として取り上げた。下層群はまだ下へ続くが、調査区北側の民有地と接しているため精査を断念した。各層群では、弥生土器・石器など多量の遺物が出土したが、ここでは、出土土器について出土層群ごとに簡単にみていくことにする。

上層群出土土器は、数点の突帯文土器を含むが弥生土器を図化した。0547～0549・0551～0555・0565～0569・0581・0594・0596・0599～0604・0606～0621・0695・0697は甕、0558は甑、0572・0573は甕蓋、0574・0576・0589・0591・0592・0598は鉢、0584・0586～0588は蓋類、0575は壺蓋、0541～0546・0561～0564・0570・0571・0577～0580・0582・0583・0585・0590・0605は壺、0572～0534は高坏、0521～0526は筒形器台、0518～0520は器台、0535～0540・0550・0556・0557は甕棺用大型土器、0593はジョッキ型土器の把手か。甕は0566などくの字状をなす口縁を持つもの、0607のようにくの字をさらに折り曲げ平坦な口縁をなすもの、撥ね上げ口縁を持つもの、逆Ｌ字状口縁をなし、0615などのように口唇が垂れるもの・0611のように平坦な口縁となるもの・0612などのように口縁が内傾するものなどがある。0547・0581は丹塗りで、甕は口縁が22cm前後のもの、27cm前後のもの、32cm前後のものがあり、底はやや上底ぎみのものが多く、くの字状口縁を持つものが多い。鉢はボール状をなし、

Fig.33　第20号溝中層出土弥生土器実測図（1）

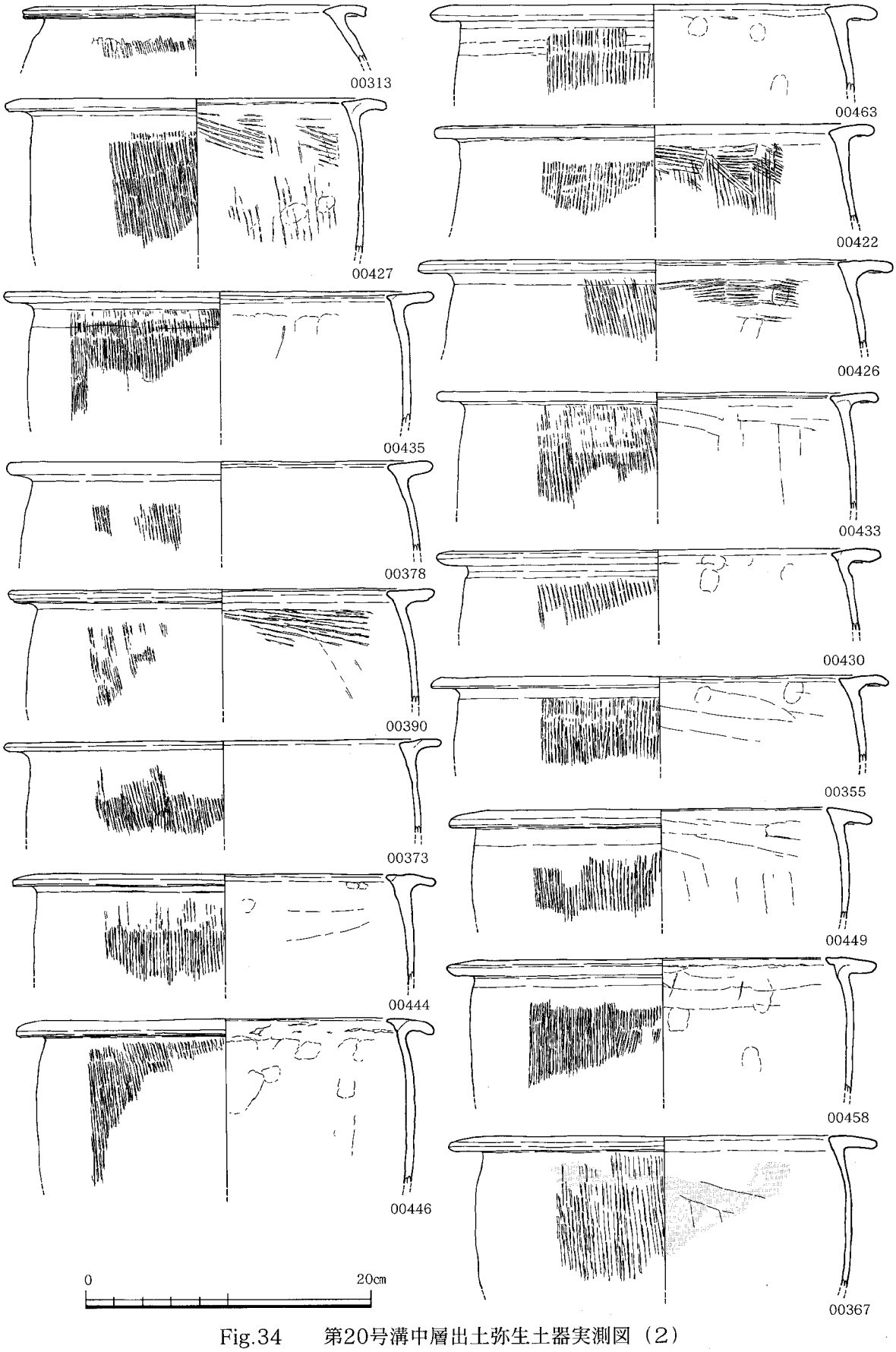


Fig.34　第20号溝中層出土弥生土器実測図（2）

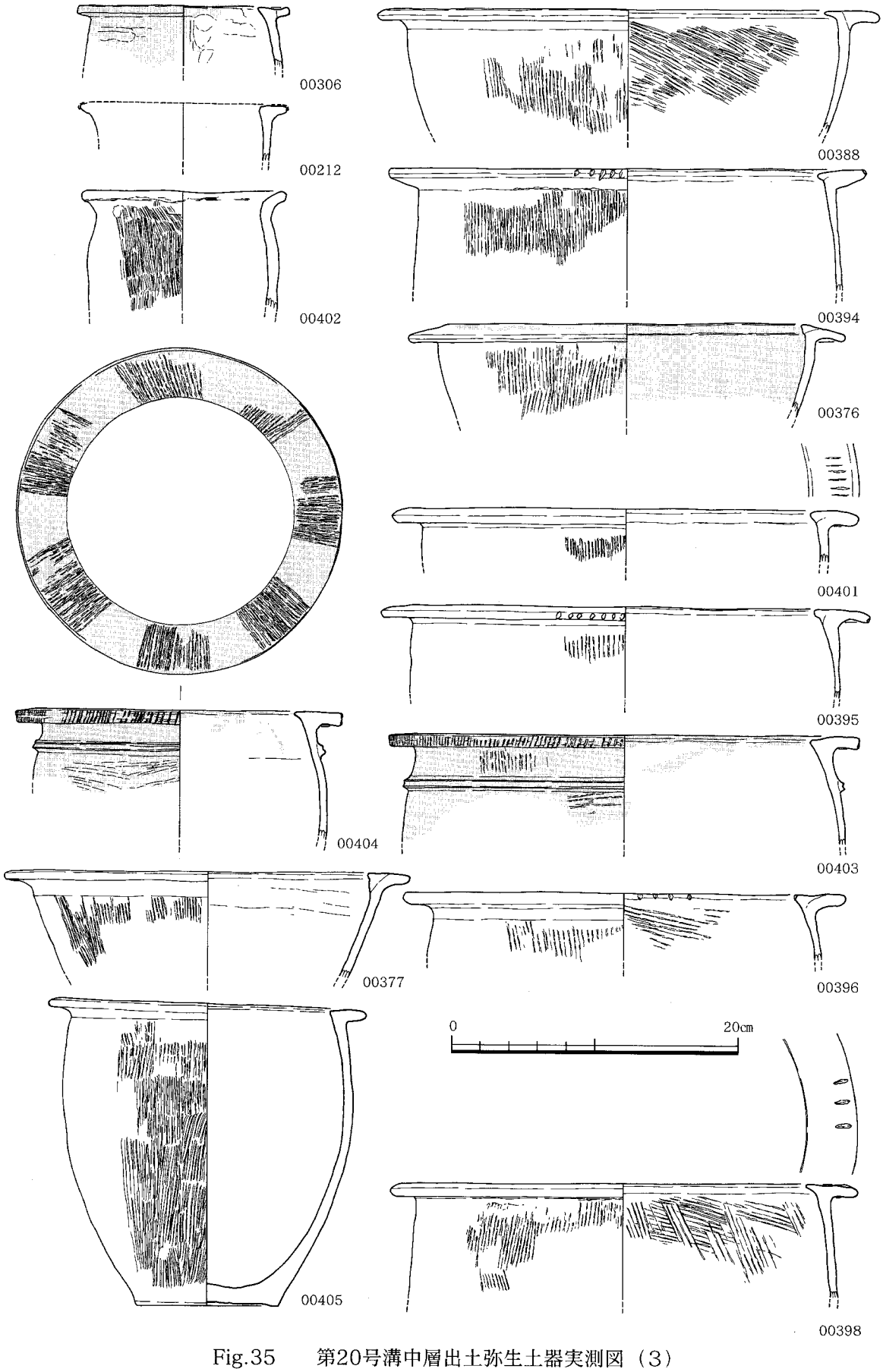


Fig.35　第20号溝中層出土弥生土器実測図（3）

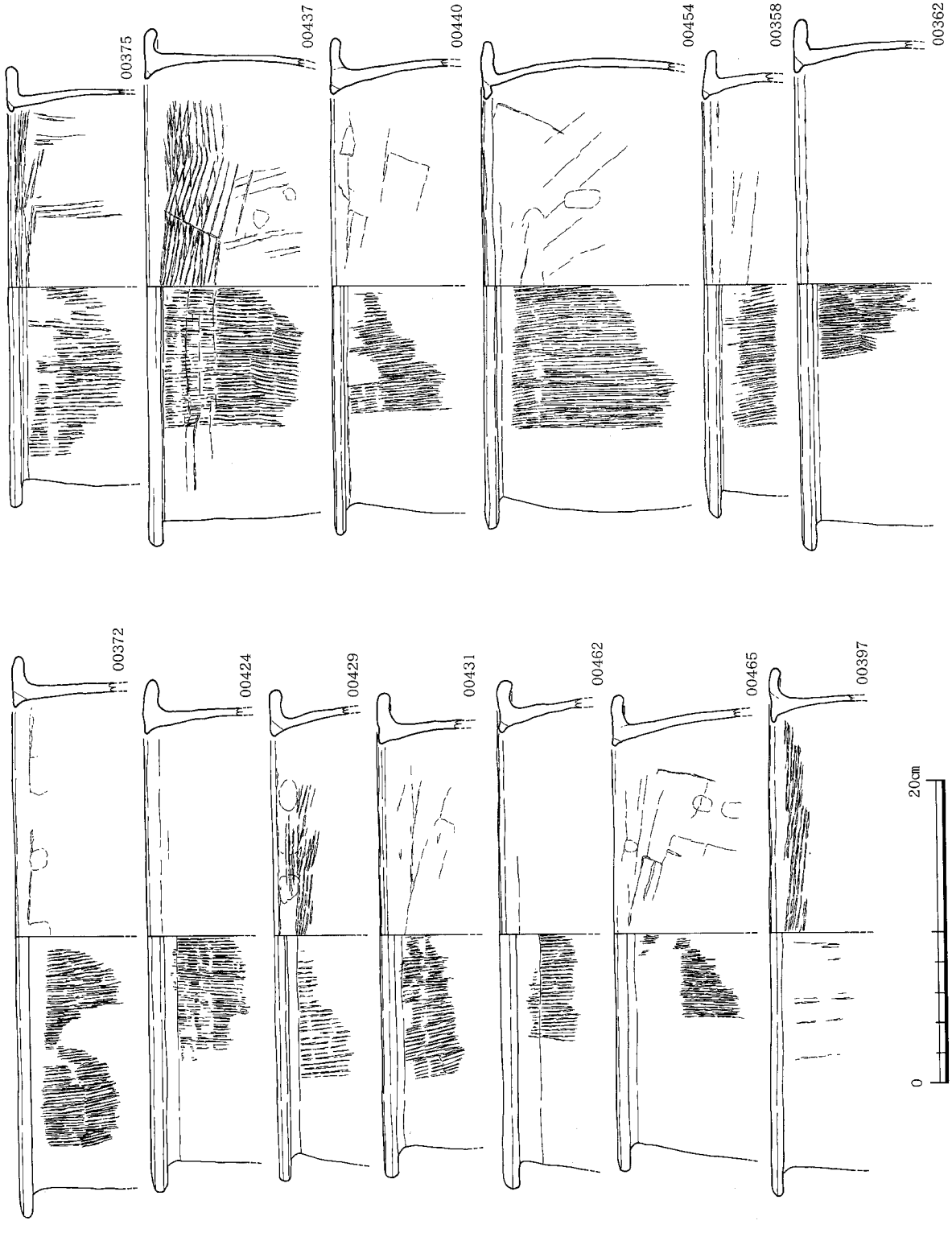


Fig.36　第20号溝中層出土弥生土器実測図（4）

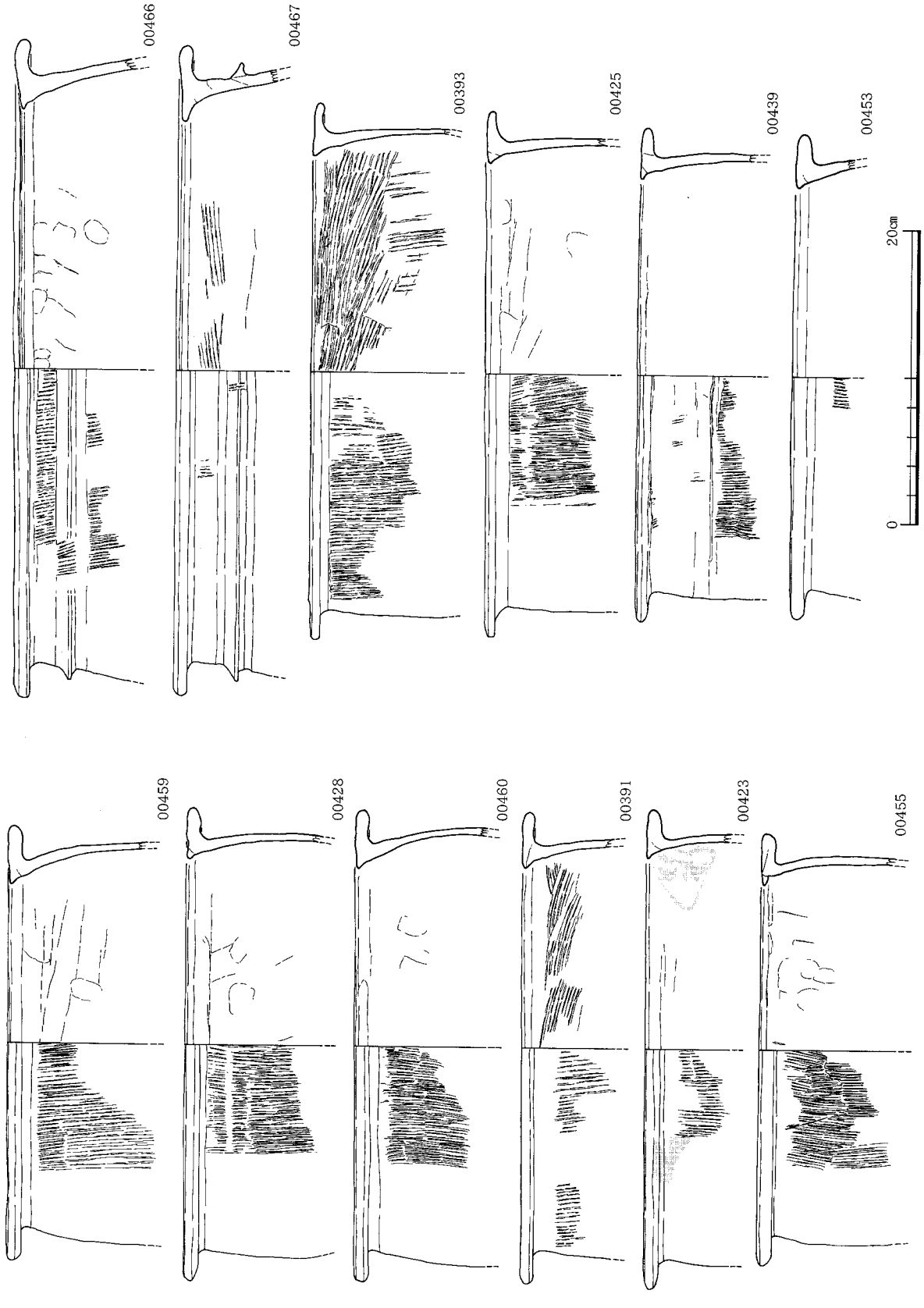


Fig.37　第20号溝中層出土弥生土器実測図（5）

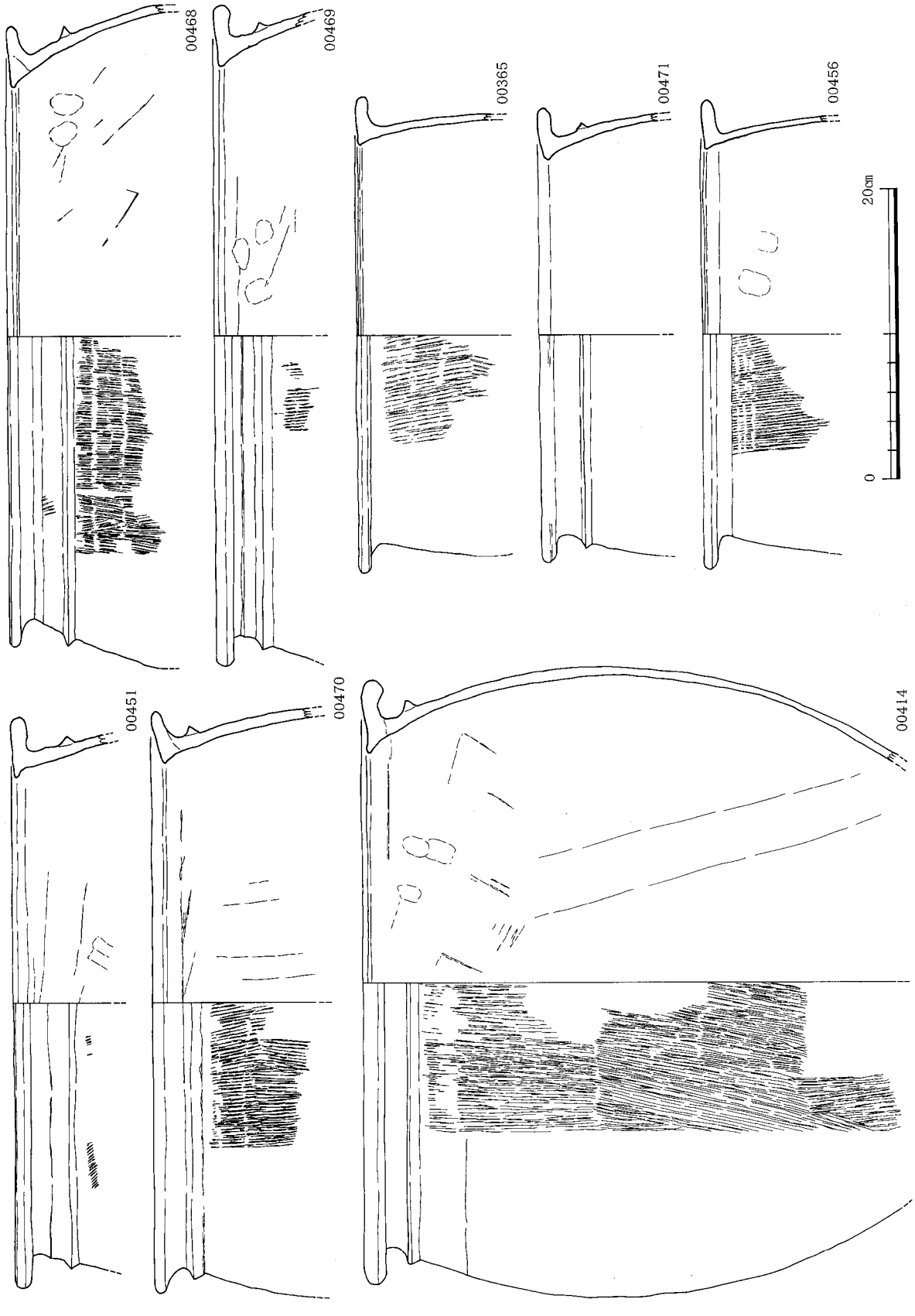


Fig.38　第20号溝中層出土弥生土器実測図（6）

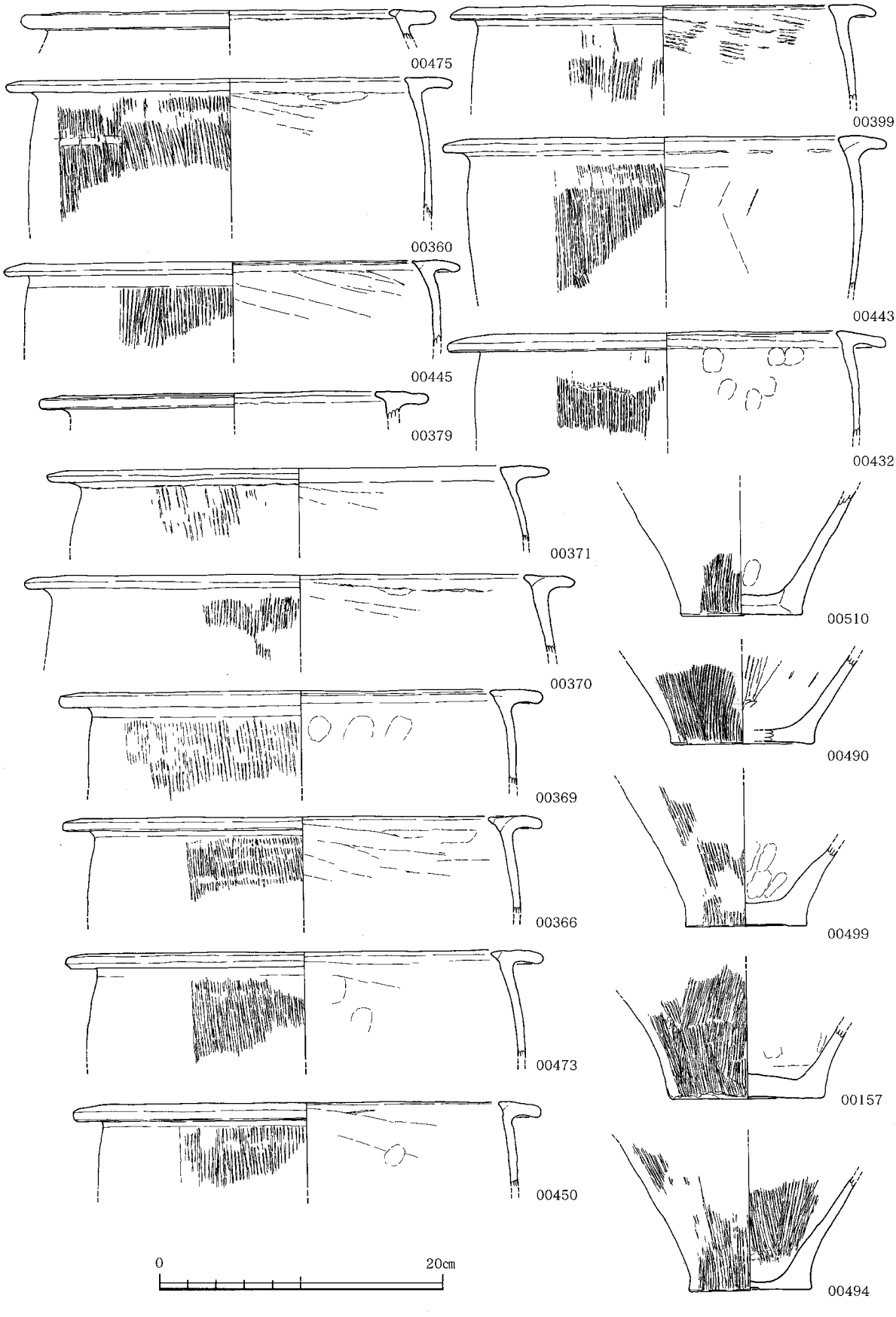


Fig.39　第20号溝中層出土弥生土器実測図（7）

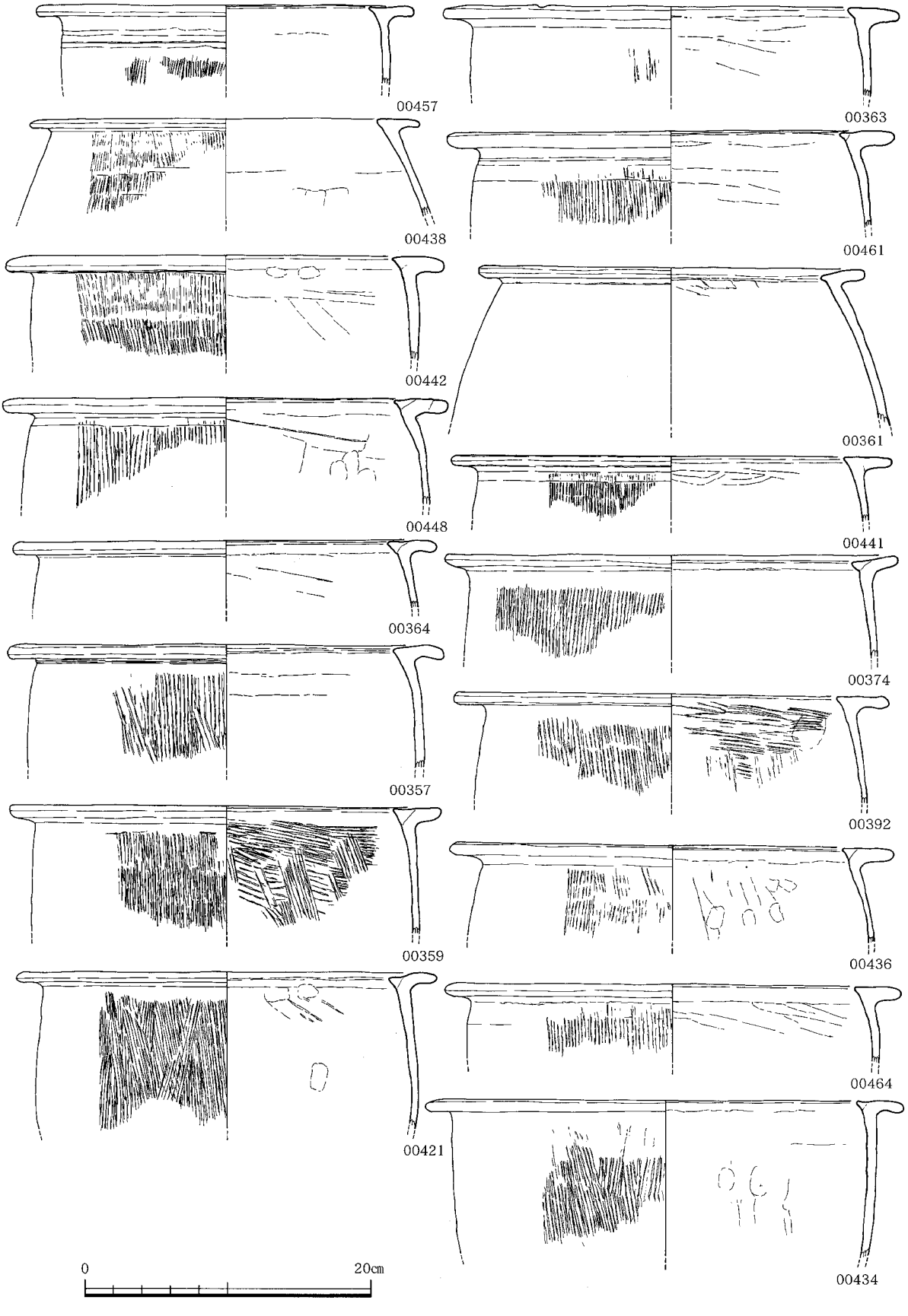


Fig.40　第20号溝中層出土弥生土器実測図（8）

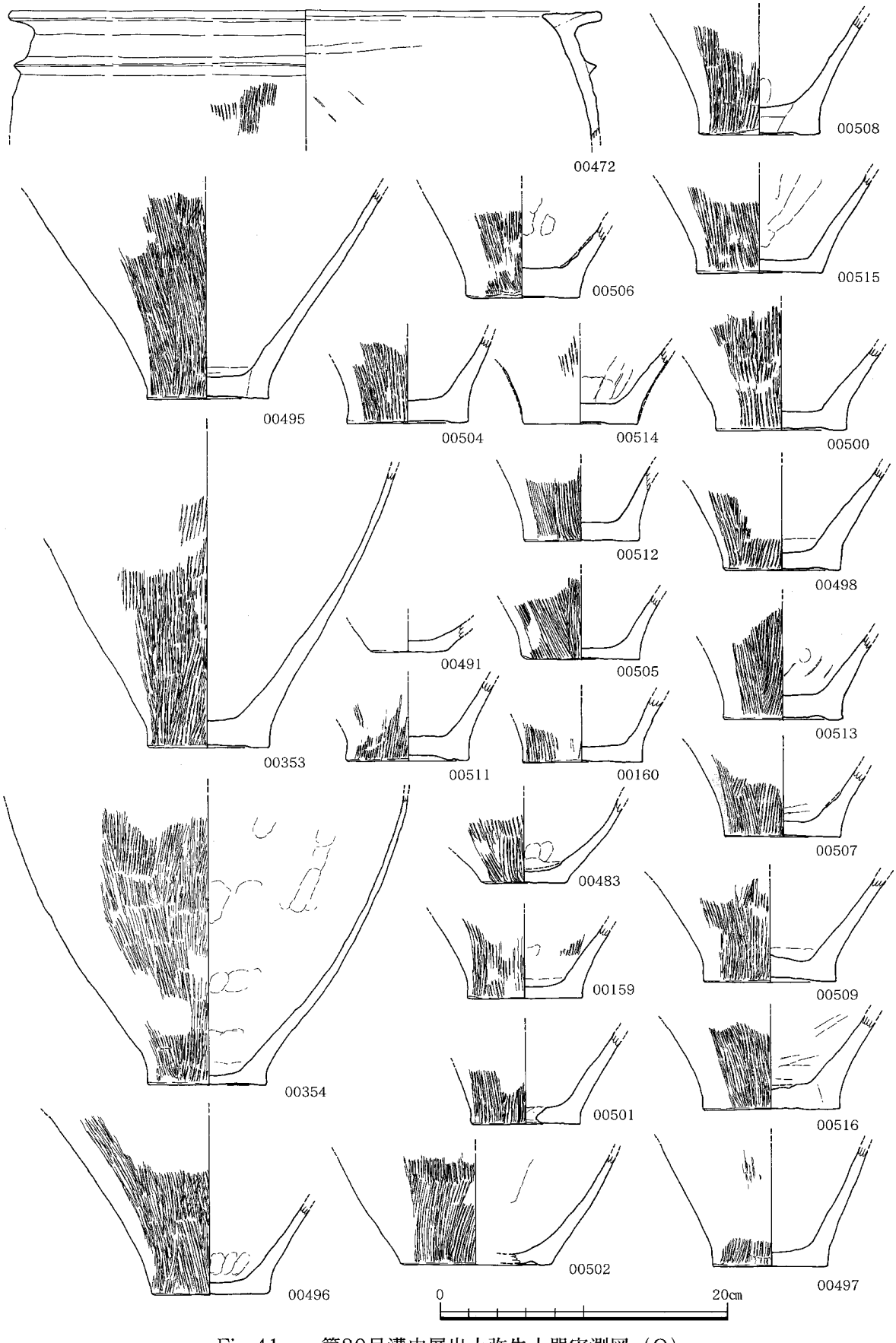


Fig.41　第20号溝中層出土弥生土器実測図（9）

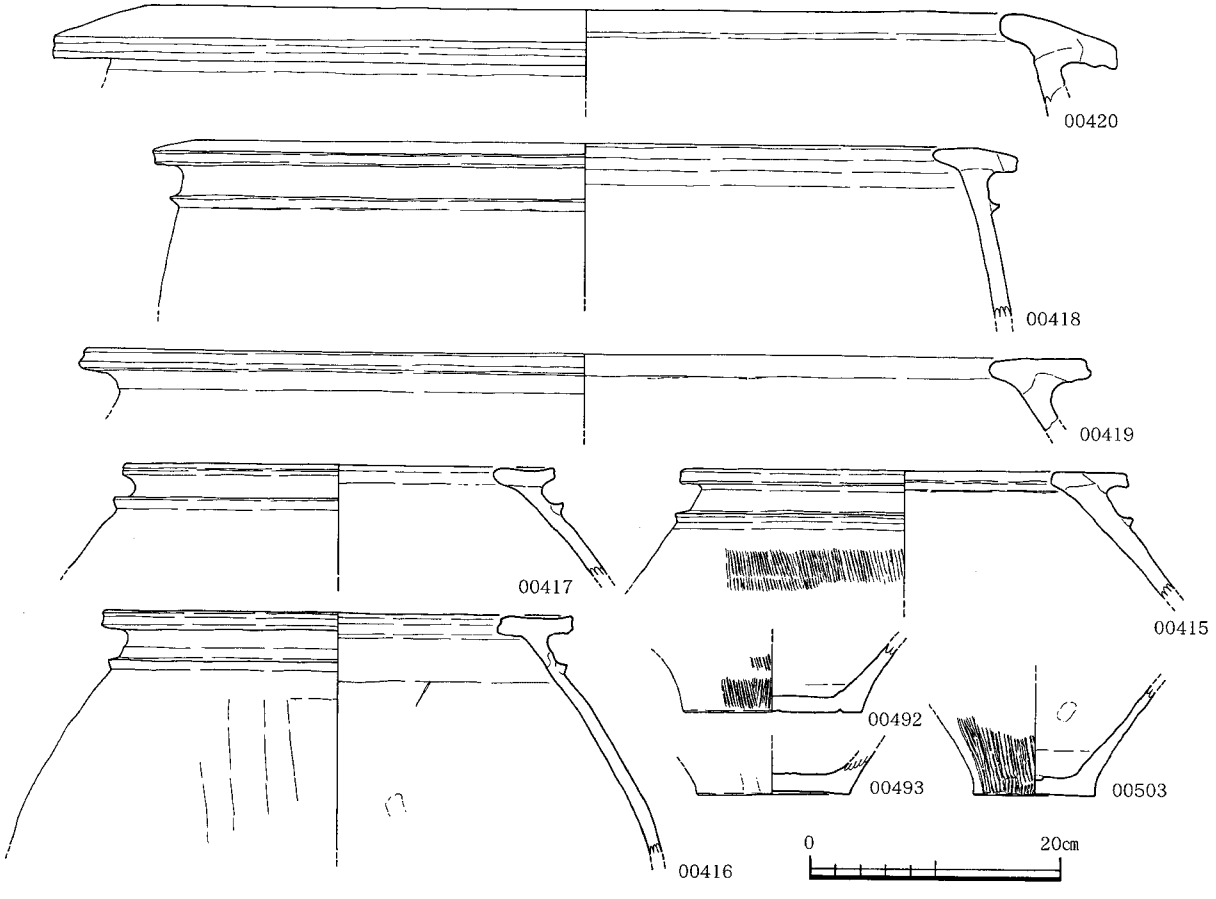


Fig.42　第20号溝中層出土弥生土器実測図（10）

コの字状をなす口縁を持つもの、鋤先状口縁を持つもの、丸底ぎみの底からほぼ直に立ち上がり、折れて口縁になるものなどがある。0576は口径10.3cm、器高7.4cm、底径5.4cmを測り、0589は丹塗り土器である。壺は、0541などのように頸がなく、逆L字状口縁を持ち、肩張りの胴となるもの、0570のような無頸壺、0580などのように肩張りの胴から屈曲して開きながら長く立ち上がり、やや折れて口唇となる広口壺、0549などのように鋤先状口縁を持つ広口壺、0590などのような直口壺、0605などのように肩張りの胴から内傾しながら立ち上がり、折れて口縁となるものなどがある。壺はほとんどが丹塗りである。高坏もほとんどが丹塗りで、鋤先状口縁を持っている。筒形器台は透かしを持つ比較的小型のものが出土している。0518は受け部径10.3cm、器高15cm、底径10.4cmを測る。

中層群出土土器は、数点の突帯文土器を含むが弥生土器を図化した。0157・0159・0160・0212・0306・0313・0352～0378・0381～0405・0414・0421～0475・0483・0488・0490・0491・0494・0497～0503・0505～0516は甕、0168・0169は甕蓋、0330～0345・0347～0349は蓋類、0164～0167・0329は壺蓋、0163・0170～0184・0328は鉢、0209・0215～0218・0238～0248・0250～0263・0314～0319・0476は高坏、0158・0161・0162・0194～0197・0199～0208・0210・0211・0213・0214・0222～0231・0233～0237・0249・0290～0301・0303～0305・0307～0312・0319・0351・0380・0406・0413・0477～0482・0484～0487・0489・0517は壺、0232・0264～0289・0320～0327・0346・0350は筒形器台、0185～0192は器台、0193は支脚、0407～0411は異形土器で甕か、0221は注口土器、0415～0420・0492・0493は甕棺用大型土器、0412はスプーンの把手か。甕はくの字状口縁を持つもの、くの字を折り曲げ平坦な口縁を持つもの、口縁が逆L字状をなし、内傾するもの・平坦な口縁

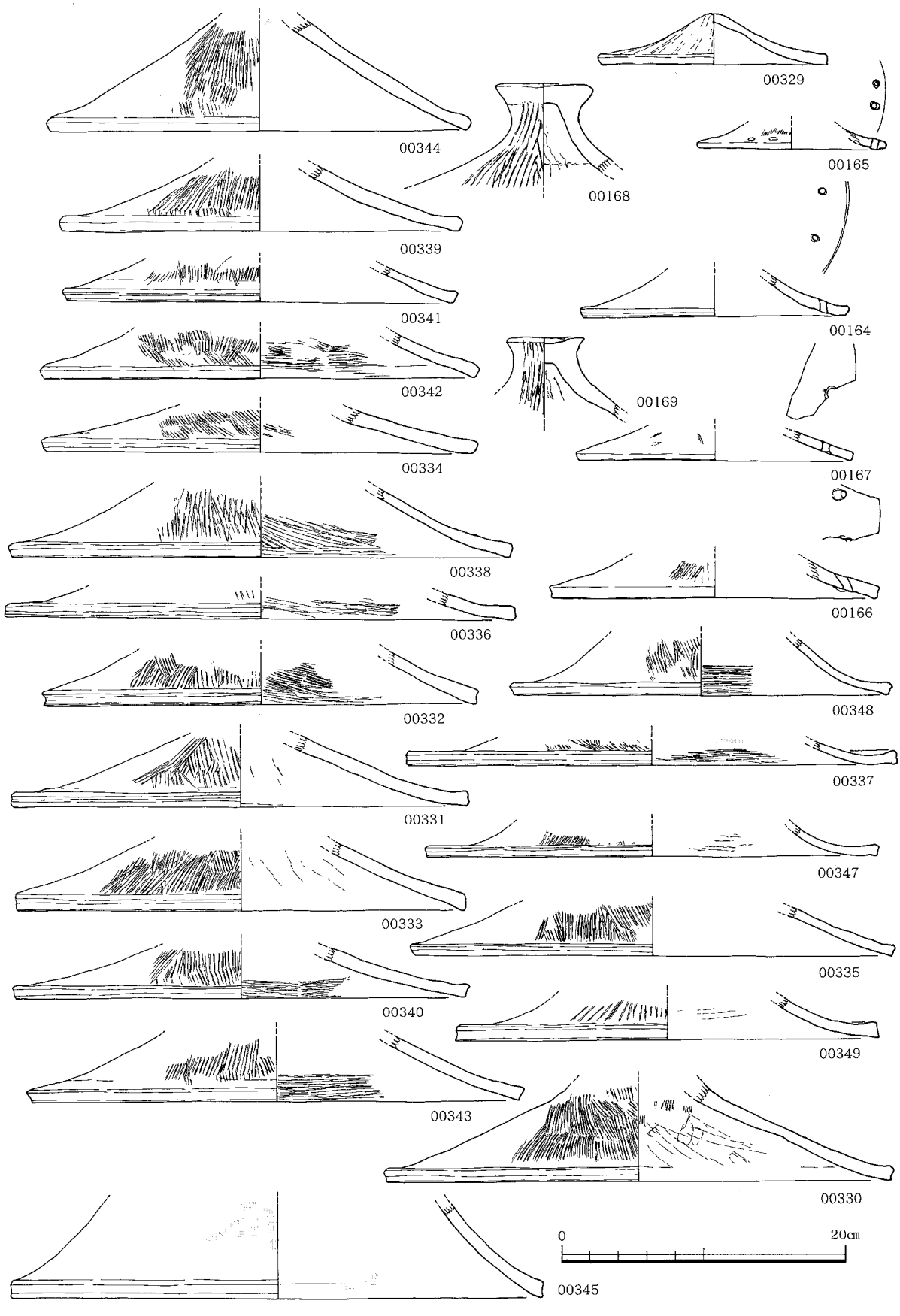


Fig.43　第20号溝中層出土弥生土器実測図（11）

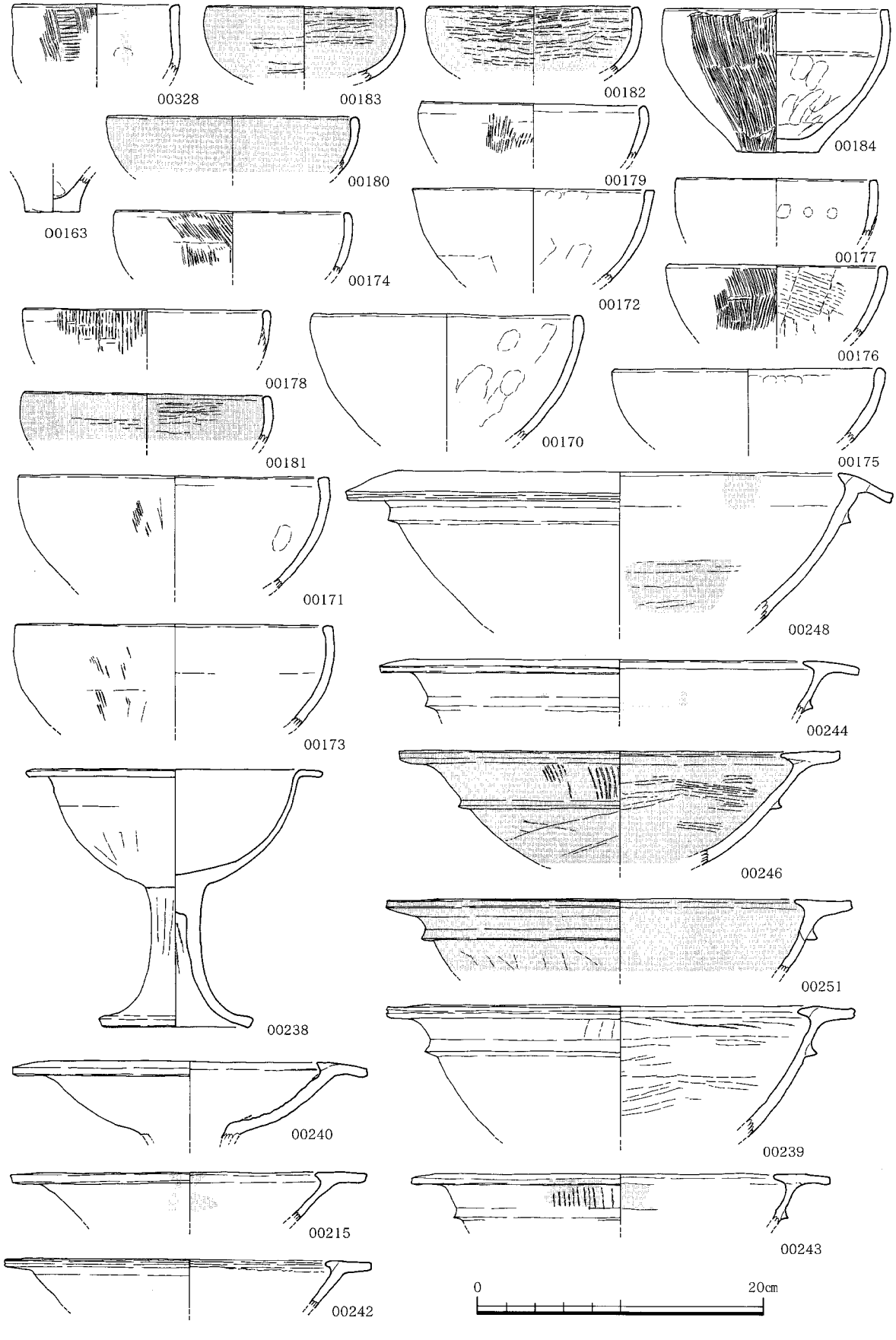


Fig.44　第20号溝中層出土弥生土器実測図（12）

となるもの・口縁が垂れるもの・口唇に刻みを持つもの・口縁直下にM字突帯を巡らすもの・同じく三角突帯を巡らすものなどがある。0382・0452などはくの字状口縁を持つ甕で、前者はやや胴が張り、口径26.2cmを測る。後者の胴外面はハケ目調整を施し、口縁は横ナデ調整、内面はナデで仕上げており、口径28cmを測る。くの字状口縁を持つものは、口径30cm前後を測るものが多い。

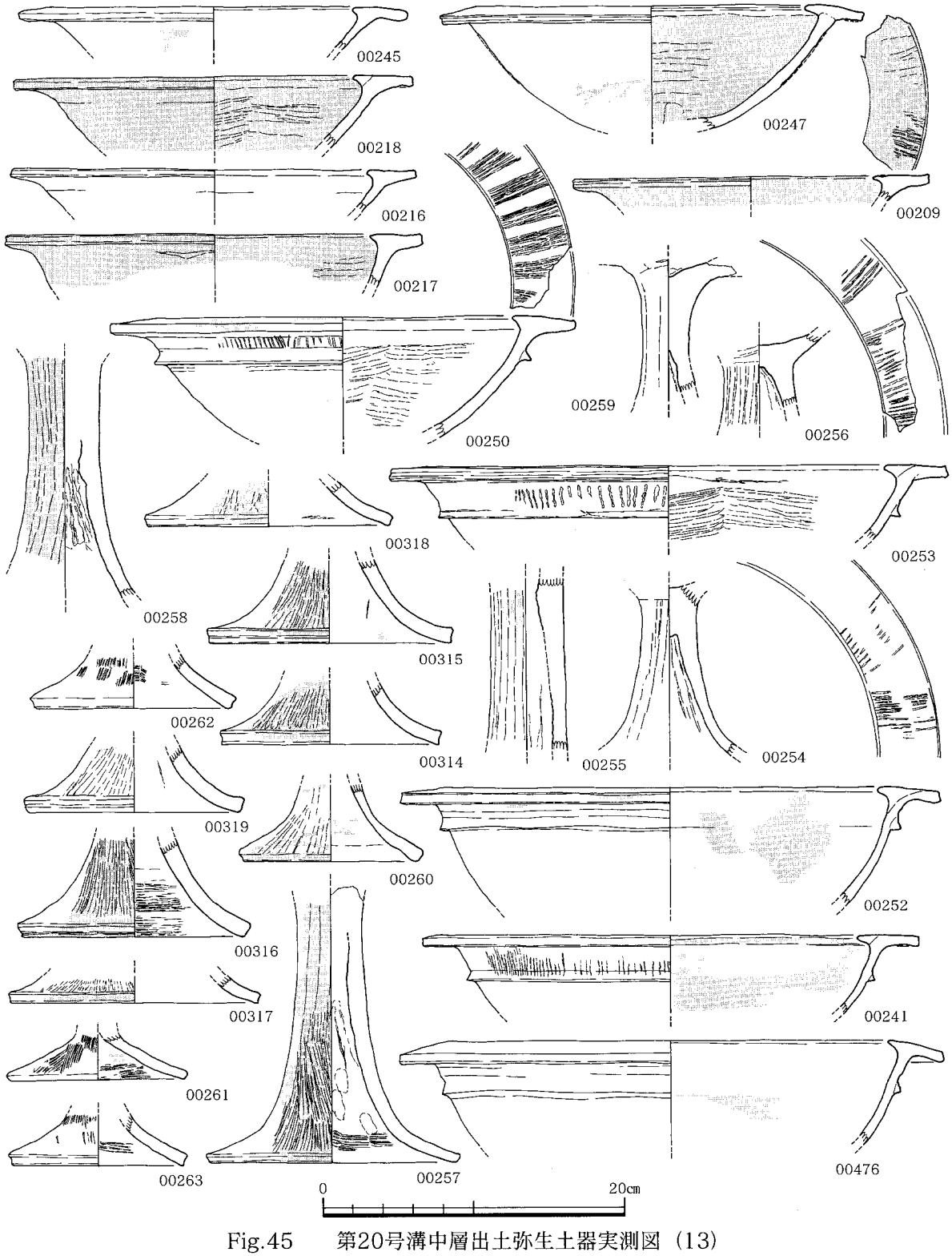


Fig.45　第20号溝中層出土弥生土器実測図（13）

0352・0386・0474などは、くの字を折り曲げ、平坦か平坦に近い口縁を持つ甕で、0352は胴外面にハケ目調整を施し、胴上部は横ナデでハケ目を消し、口縁は横ナデ調整、内面の口縁下は横方向のナデで仕上げ、胴中央内面には指押さえ痕を残している。口径31.2cmを測る。0386・0474は口径29.4cm・28.2cmを測る。0402は張りの少ない胴を軽く折り、口唇を丸くおさめる口縁を持ち、口縁は横方向のハケ目調整後横ナデを施し、胴はハケ目調整、内面はナデで仕上げ、口径12.4cmを測る。0313・0356・0367・0373などは逆L字状口縁を持つ甕で、0356は平坦な口縁を持ち、口唇は丸くおさめている。胴外面はハケ目調整を施し、口縁は横ナデ、口縁直下の内面は横方向のナデで仕上げ、口径32.8cmを測る。0404は平坦な口縁を持ち、口唇はコの字状をなし、刻み目を施し、口縁直下にM字突帯を巡らせている。胴外面はヘラミガキ、口縁は横ナデ、胴内面はナデで仕上げており、器外面から口縁にかけては丹塗りで、口縁平坦面には7等分の線描きの暗文が施され、口径20.8cmを測る。0403も0404とほぼ同じ型であるが、やや内傾し、口縁とM字突帯間にハケ目調整の痕跡が残り、口径32.8cmを測る。0405はやや内傾する口縁を持ち、底はやや上げ底で、胴の張りは少なく、胴外面はハケ目調整を施し、口縁直下は横ナデでハケ目を消し、口縁は横ナデで口唇を丸くおさめ、内面はナデで仕上げている。口径22.3cm、器高21.5cm、底径10cmを測る。0433は口縁がやや内傾し、口縁は横ナデ、胴外面はハケ目調整を施し、口縁直下は横ナデでハケ目を消し、内面の口縁直下は横方向、その下は縦方向のナデで仕上げており、口径31cmを測り、丹塗りの甕である。0376は口縁が垂れており、器面は丹塗りで、口縁は横ナデ、胴外面はハケ目調整が施され、口縁直下は横ナデでハケ目を消し、内面はナデで仕上げ、口径30.4cmを測る。0306は中央がやや凹む平坦な口縁を持つ丹塗り甕で、口縁は横ナデ、胴外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げており、口径15cmを測る。0414はやや内傾する口縁を持ち、胴上半に最大径を持つ胴張りの甕で、口縁直下に三角突帯を巡らせている。口径41.6cmで、器高37cm遺存している。逆L字状口縁を持つ甕は、口径20cm前後のもの、30cm前後のもの、35cm前後のもの、40cm前後のもの、45cm前後のものがあり、28～36cmを測るものが多い。甕の底は、平底とやや上げ底のものがほとんどで、底径は8cm前後を測るものが多い。

鉢は鉢形になるものと、ボール状をなし口唇がコの字状をなすものと、口唇を丸くおさめるものがある。ボール状をなす鉢は、0172・0177などが前者、0175・0178・0180などが後者にあたり、0173など両者の中間型がある。0163は底径3.8cmと小さくコップ形となるか。0170は、口縁はやや肥厚させ、口唇は角丸となり、口縁は横ナデ、その他の器面はナデで仕上げており、口径19.8cmを測る。0171・0172は口唇を横ナデによりコの字状をなし、前者はやや内傾ぎみであり、外面の口縁直下はハケ目調整後、横ナデで消し、内面は横ナデで仕上げている。口径21.8cm、0172は17cmを測る。0173・0174は口唇を横ナデにより角丸とし、口縁はやや内傾ぎみに仕上げており、外面はハケ目調整後、横ナデで消しているがハケ目が残っている。口径22.2cm・16.4cmを測る。0175・0178・0179は口唇を横ナデにより丸くおさめ、0178・0179の外面はハケ目調整後、横ナデで消しているがハケ目が残っている。口径19.2cm・17.4cm・15.8cmを測る。0176は口唇を横ナデにより角丸とし、外面・内面口縁直下はハケ目調整を施し、内面下部はヘラナデで仕上げ、口径15.6cmを測る。0177はコの字状をなす口縁を持ち、口径14.2cmを測る。0180は口唇が丸くおさまる丹塗りの鉢で、器面は横ナデで仕上げ、口径17.8cmを測る。0181は角丸の口唇を持つ丹塗りの鉢で、器面はヘラミガキで仕上げ、口径17.4cmを測る。0182・0183は口唇が丸くおさまる丹塗りの鉢で、口縁は内傾ぎみで、器面はヘラミガキで仕上げている。口径14.8cm・13.8cmを測る。0184は平底の底から開きながら立ち上がり、やや内傾ぎみのコの字状をなす口縁を持つ鉢で、口縁は横ナデ、外面はハケ目調整が施され、内面下部はナデで仕上げており、指押さえ痕が残る。口径15.8cm、器高10cm、底径5.8cmを測る。0328は

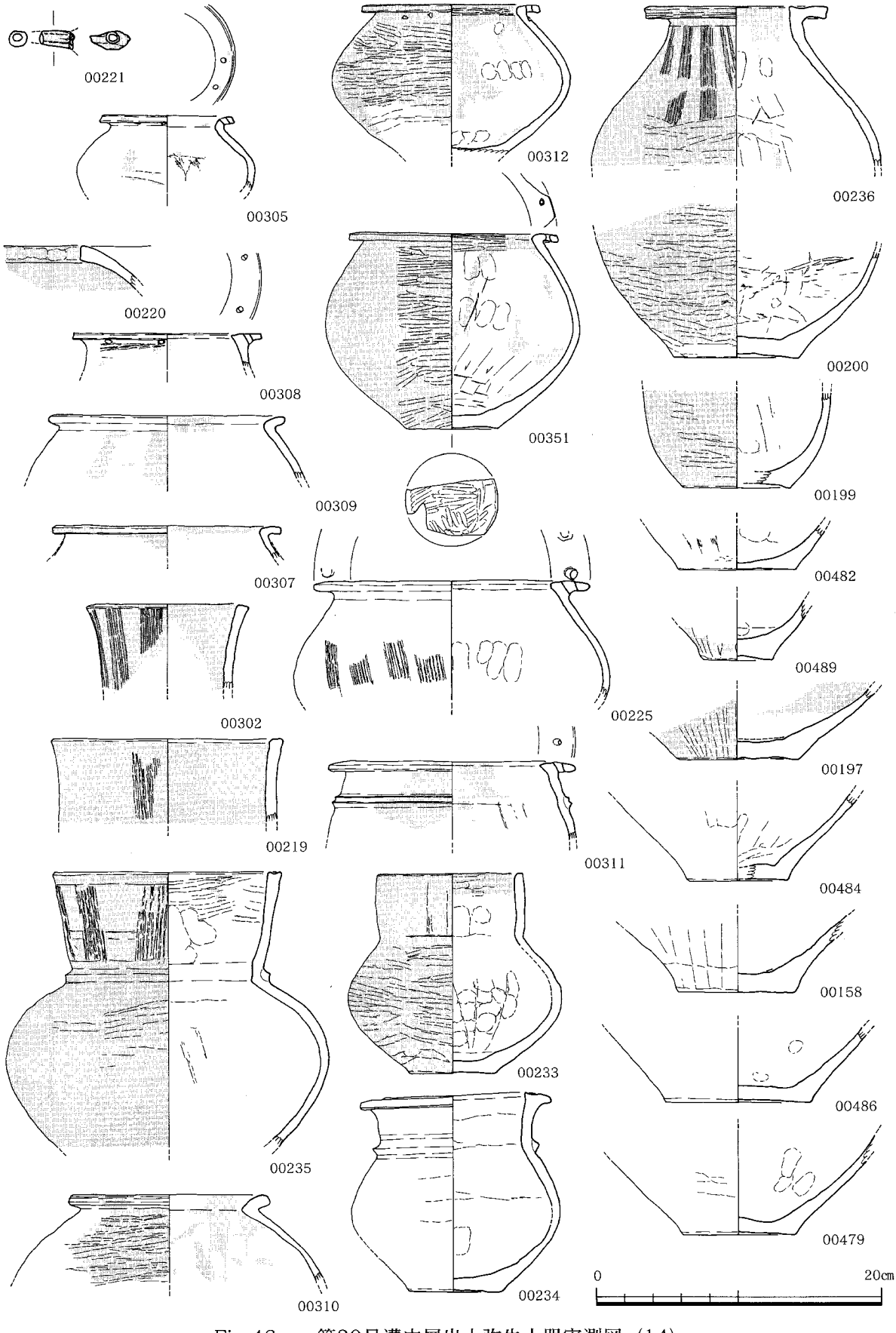


Fig.46　第20号溝中層出土弥生土器実測図（14）

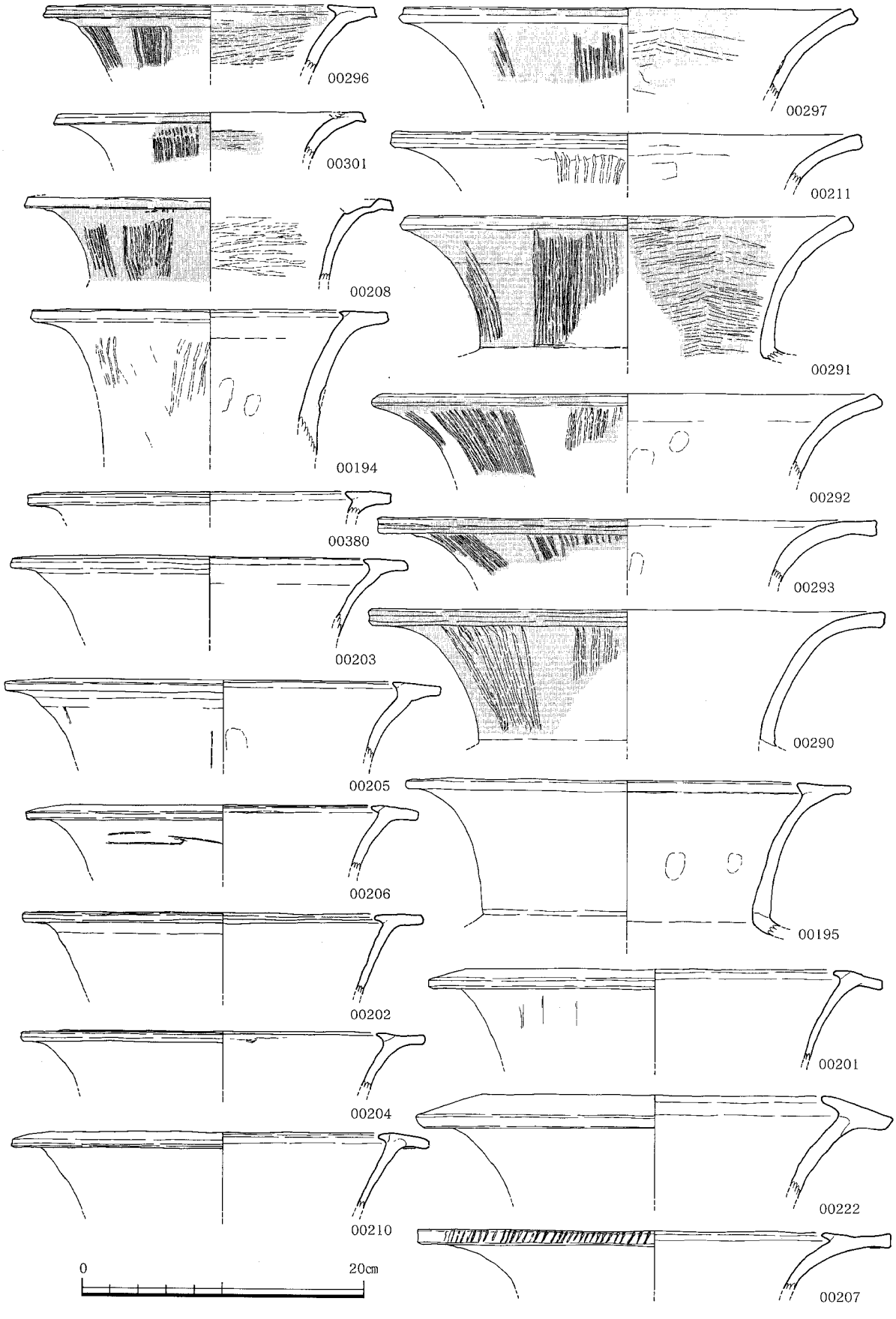


Fig.47　第20号溝中層出土弥生土器実測図（15）

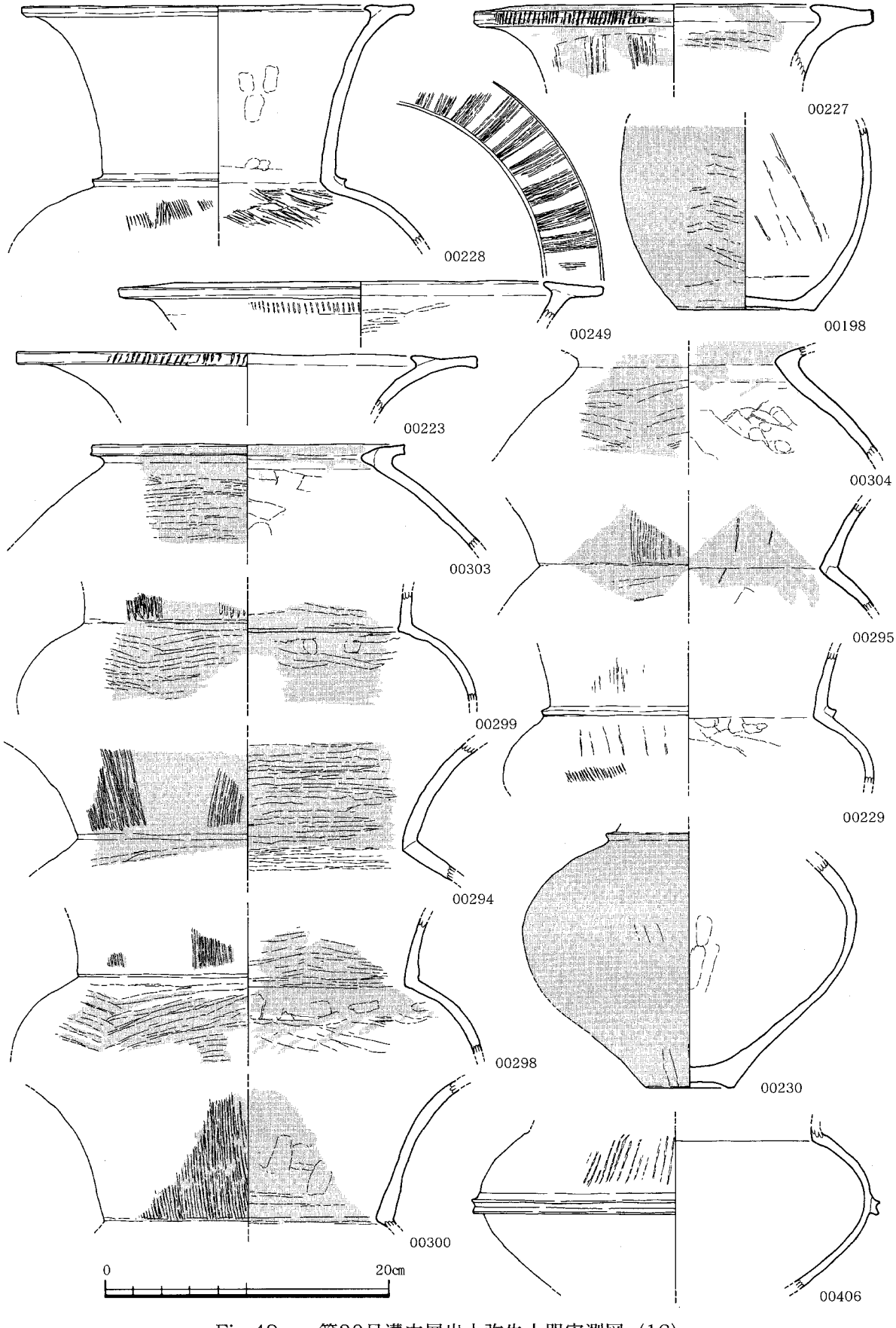


Fig.48　第20号溝中層出土弥生土器実測図（16）

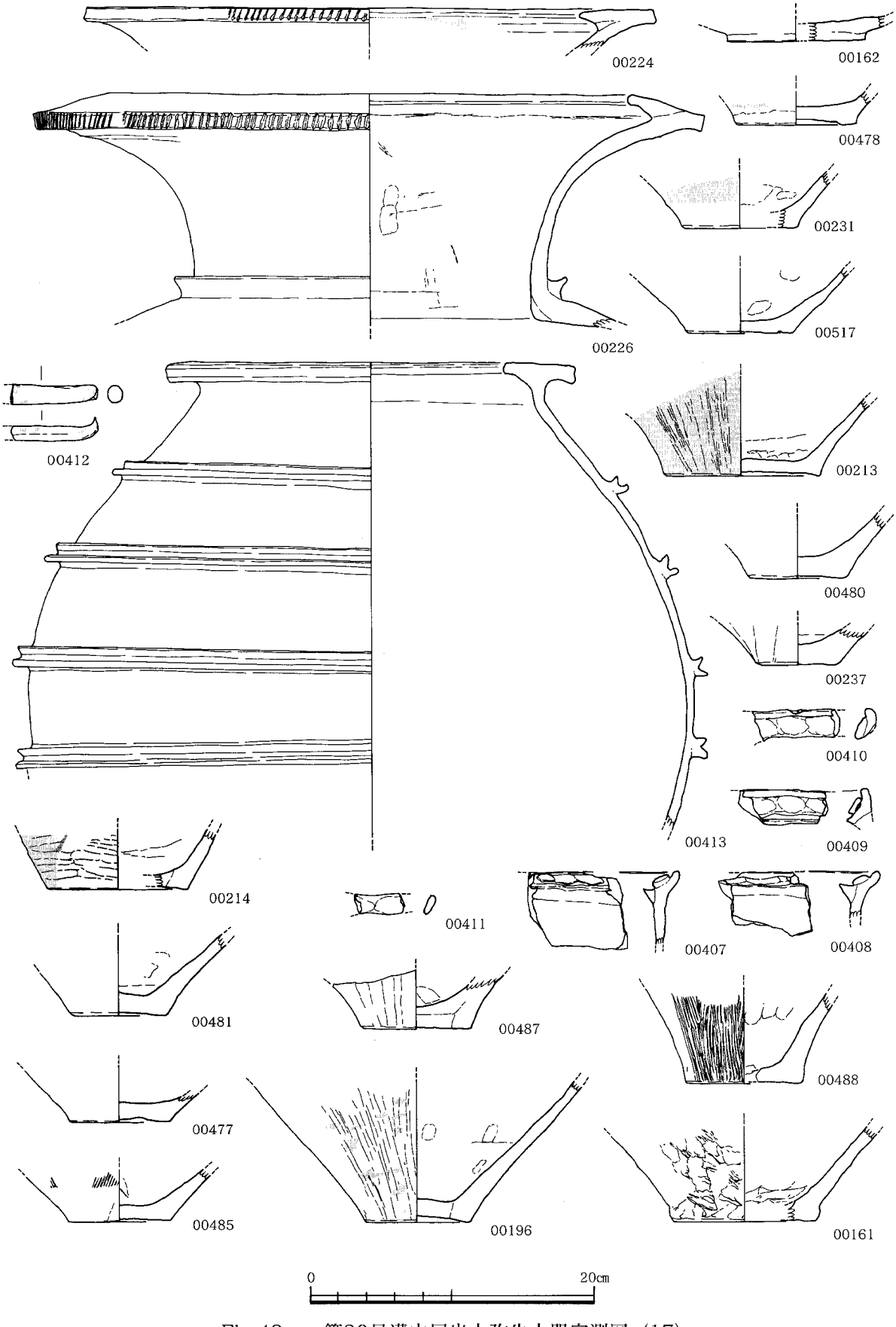


Fig.49　第20号溝中層出土弥生土器実測図（17）

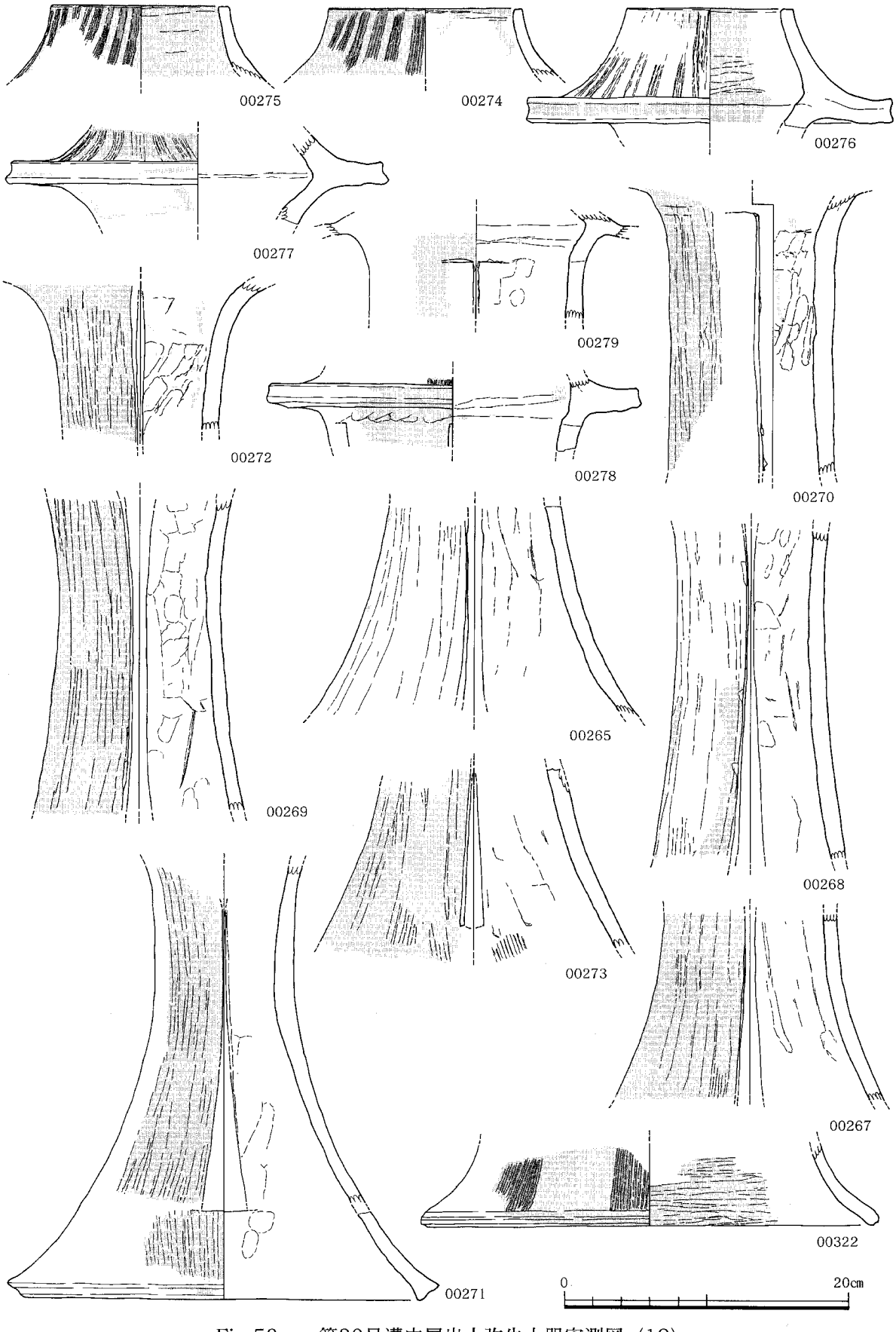


Fig.50　第20号溝中層出土弥生土器実測図（18）

丸くおさめる口唇を持ち、口径11.6cmを測る。

高坏はくの字状口縁を折り曲げ平坦な口縁を持つものと鋤先状口縁を持つものがあり、鋤先状口縁をなすものは平坦な口縁となるものと口縁が垂れるものがある。0238はくの字状口縁を折り曲げ平坦な口縁を持ち坏部と脚部がほぼ半々となるように仕上げている。口縁・底は横ナデ、坏部外面はナデ、内面と脚部外面はヘラナデで仕上げ、口径20.7cm、器高18cm、底径10.7cmを測る。本来は丹塗りか。0246は平坦な鋤先状口縁を持つ丹塗りの高坏で、口唇はコの字状をなし、口縁直下に三角突帯を巡らせている。口縁は一部ヘラミガキがみられるが横ナデ、口縁直下と突帯間は一部縦方向のヘラミガキ、その下はヘラナデ、内面はヘラミガキで仕上げており、口径30.8cmを測る。0248は口縁が外に垂れる鋤先状口縁を持つ丹塗り高坏で、口縁直下に三角突帯を巡らせている。口径38.4cmを測る。0250はほぼ平坦な鋤先状口縁を持つ丹塗りの高坏で、口縁直下に三角突帯を巡らせている。器面はヘラミガキで仕上げ、口縁平坦面は暗文状をなす。口径30.8cmを測る。高坏は、口径30cm前後を測るものが多く、25cm前後を測るものもある。0164～0167・0329は無頸壺蓋で、0329は口径16.4cm、器高3.6cmを測る。甕蓋の他の蓋類はほとんが壺蓋と考えられるが、一部のものは筒形器台の底の可能性がある。

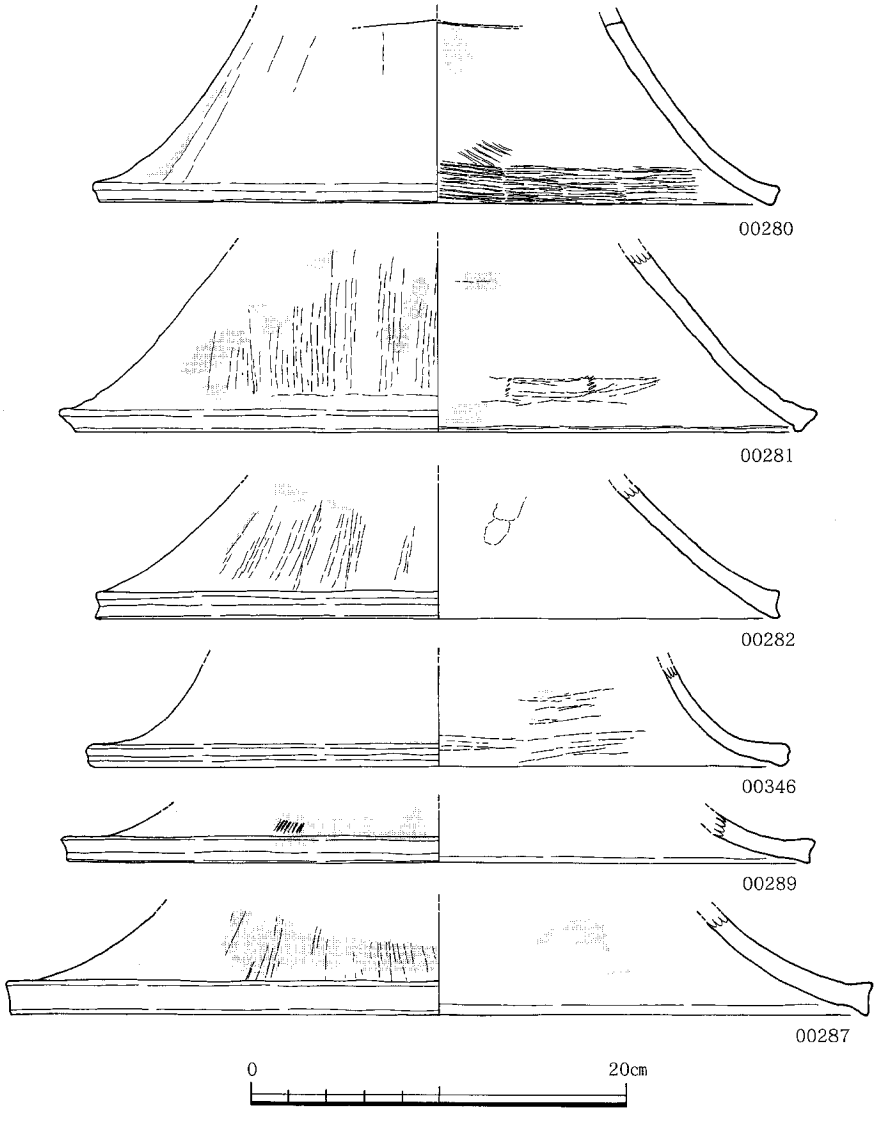


Fig.51　第20号溝中層出土弥生土器実測図（19）

壺は無頸壺、直口壺、肩張りの胴から屈曲して開きながら立ち上がり口縁となる広口壺、鋤先状口縁を持つ広口壺などがある。0225・0303・0305・0307～0312・0351は蓋固定用の焼成前の穿孔を持つ無頸壺である。0225は張る胴からすぼまり逆L字状口縁となり、胴外面には、ハケ目調整痕がみられ、口径19.4cmを測る。0311は逆L字状口縁を持ち、口縁直下にM字突帯を巡らせている。丹塗りで、口縁は横ナデ、器面はナデで仕上げ、口径17.4cmを測る。他の無頸壺は、いずれもやや上げ底ぎみの底を持ち、最大径を胴中央か中央よりやや上に持ち、逆L字状口縁を持つ丹塗りの無頸壺で

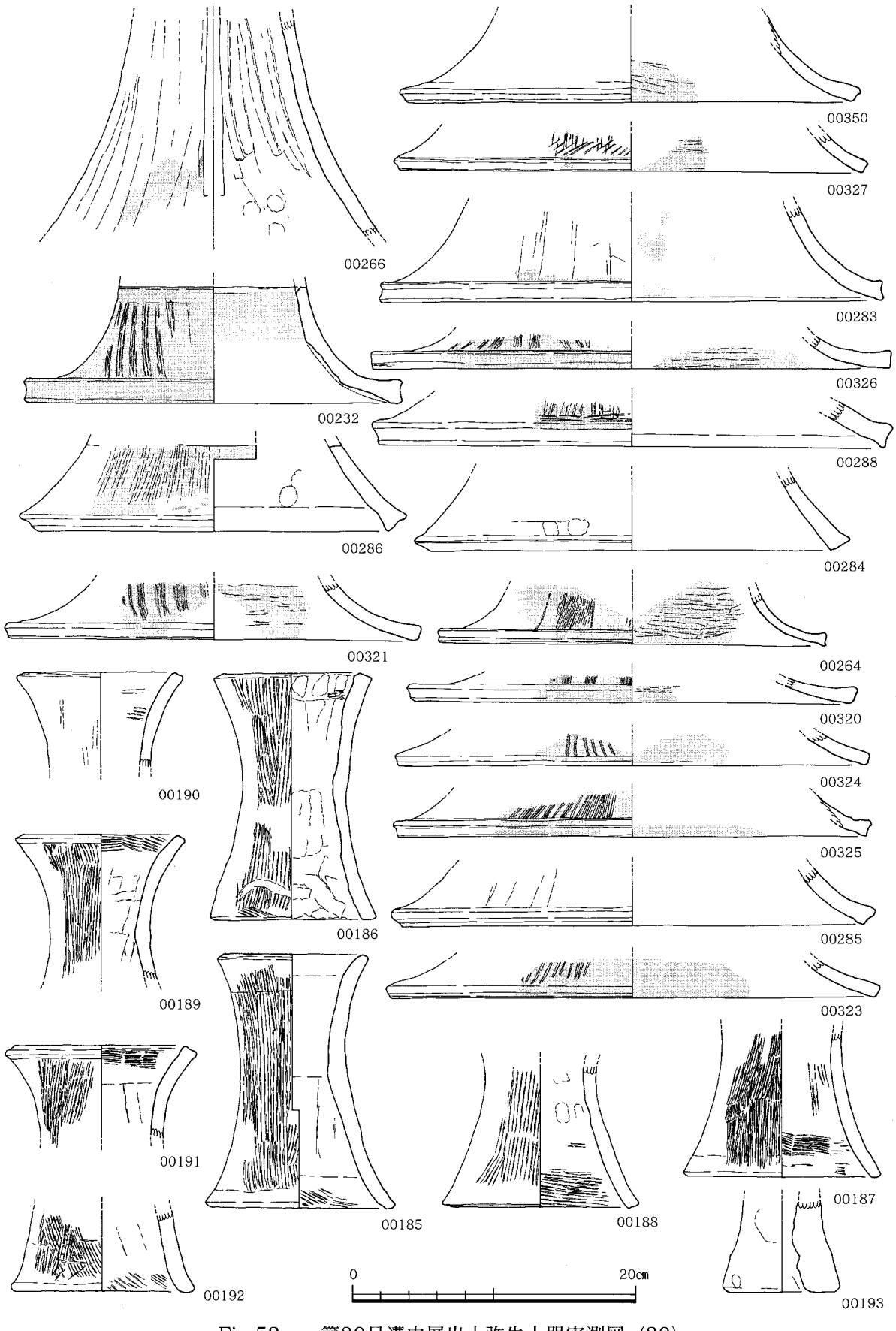


Fig.52　第20号溝中層出土弥生土器実測図（20）

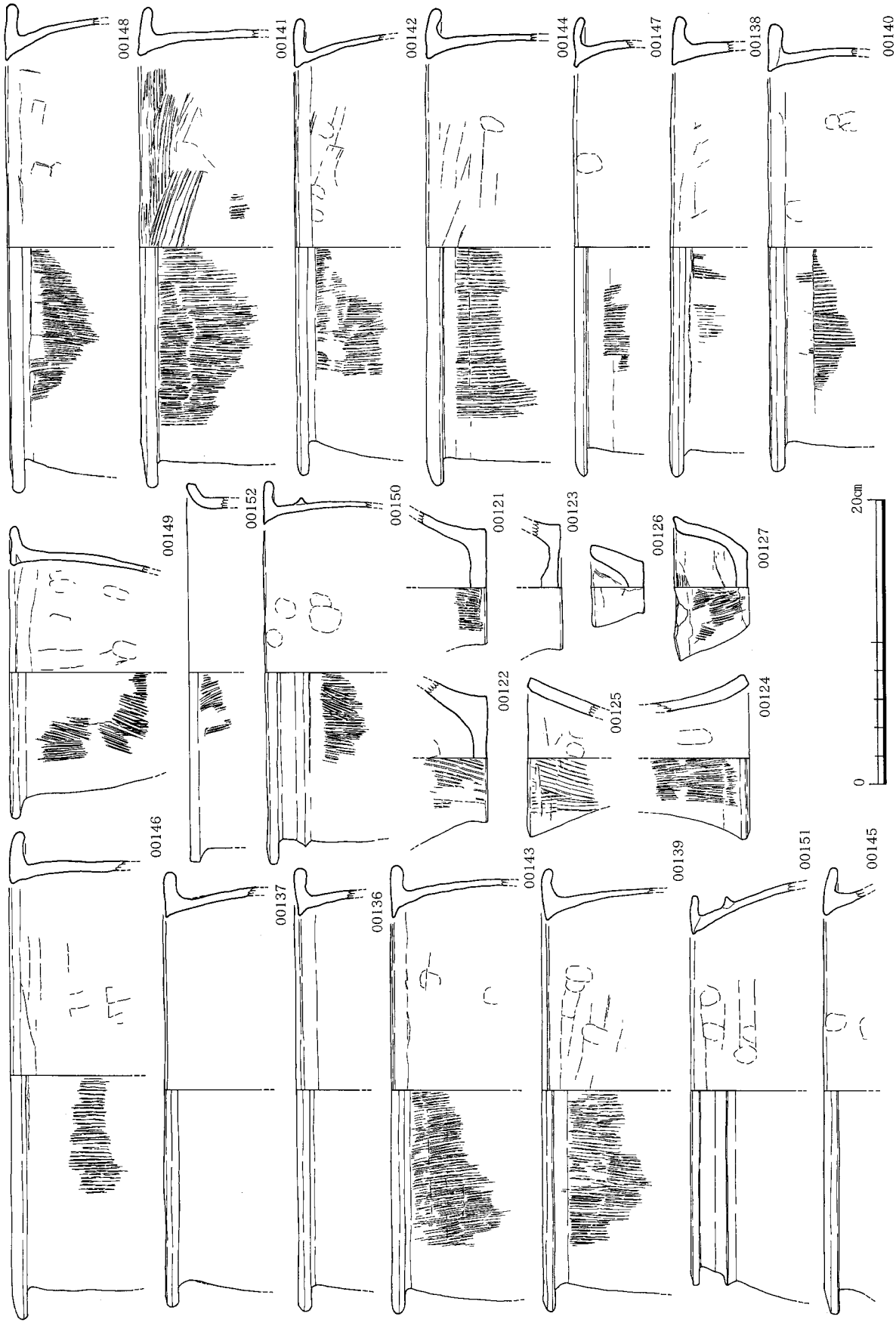


Fig.53　第20号溝下層出土弥生土器実測図（1）

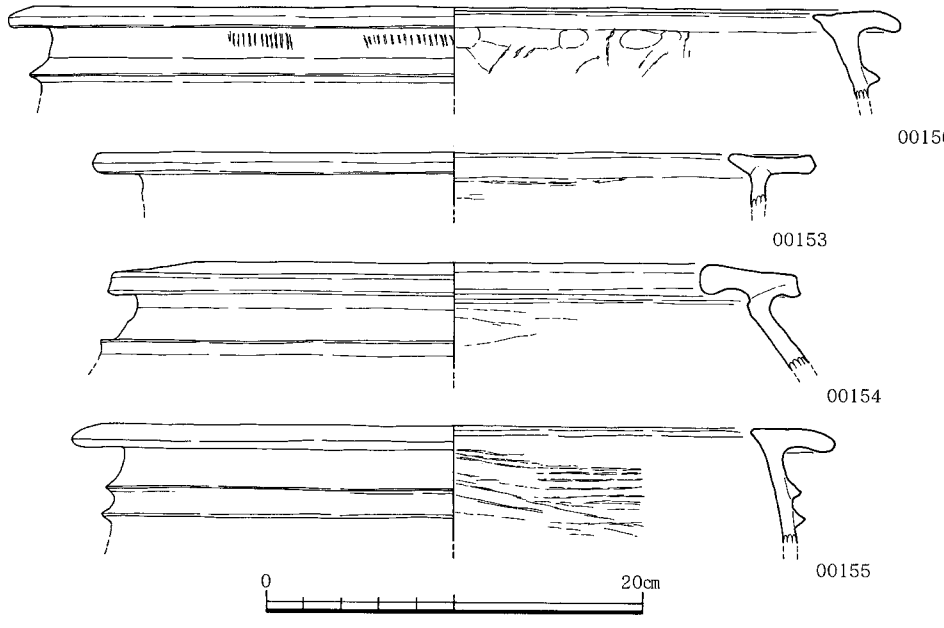


Fig.54　第20号溝下層出土弥生土器実測図（2）

ある。0305はもっとも小さく口径9.6cmを測る。0312・0351は、口縁から外面にかけては横方向のヘラミガキ、内面はヘラ状工具によるナデで仕上げているが、底・中央部には指押さえ痕がみられる。口径12.6cm・14.8cm、器高11cm前後・13.7cm、後者の底径6.4cmを測る。無頸壺は口径14cm前後を測るものが多い。0236は胴中央前後に最大径を持ち、内傾しながらすぼまり逆L字状口縁となる丹塗りの壺で、口縁は横ナデ、胴外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げ口縁直下は暗文状に縦方向のヘラミガキを施し、口径12.8cmを測る。0219・0233・0235・0302は張る胴から屈曲して直に立ち上がりコの字状をなす口縁となる丹塗りの直口壺で、0219・0302はやや開きぎみに立ち上がり、コの字状をなす口唇となり、口縁は横ナデ、他はナデで仕上げ、口縁下に暗文状をなす縦方向のヘラミガキを施し、口径16.4cm・11.4cmを測る。0233はやや上げ底ぎみの底を持ち、張りのある胴から屈曲してやや膨らみぎみに直に立ち上がりコの字状をなす口唇となる。口縁から外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げ、口径10.3cm、器高14.1cm、底径6.2cmを測る。0235は張りのある胴から屈曲して立ち上がりコの字状をなす口唇となり、屈曲部に三角突帯を巡らしており、口縁下に暗文状に縦方向のヘラミガキを施している。口径16.2cmを測る。0234は丹塗りではないが0235に近い器形を持つものの口縁は逆L字状をなしている。器面の内面下部はナデ、他は横ナデで仕上げており、口径13.6cm、器高14cm、底径6.8cmを測る。0211・0290～0293・0297は、肩張りの胴から屈曲して開きながら立ち上がり口縁となる丹塗りの広口壺である。いずれも口縁は横ナデ、口縁下に縦方向のヘラミガキによる暗文が施されているが、0211・0290・0292・0293の器面は横ナデかナデで仕上げ、0291・0297は横方向のヘラミガキで仕上げている。口径は0211から順に33.4cm・36.6cm・32.2cm・36.2cm・35.4cm・32.6cmを測る。鋤先状口縁を持つ広口壺は、0202・0301などのように平坦な口縁となるもの、0194・0227・0249・0296などのように平坦な口縁に近いがやや外に垂れぎみなもの、0201・0222などのように口縁が外に垂れるものがある。0296・0301は丹塗りで、口唇から外面にかけては横ナデ、口縁平坦面から内面はヘラミガキ、口縁下外面に縦方向のヘラミガキによる暗文が施され、口径23.6cm・22cmを測る。0194・0201の口縁は横ナデ、他はナデで仕上げ、口縁下外面に縦方向のヘラミガキによる暗文が施され、口径25.4cm・32.2cmを測る。0227は丹塗りで口唇に刻み目

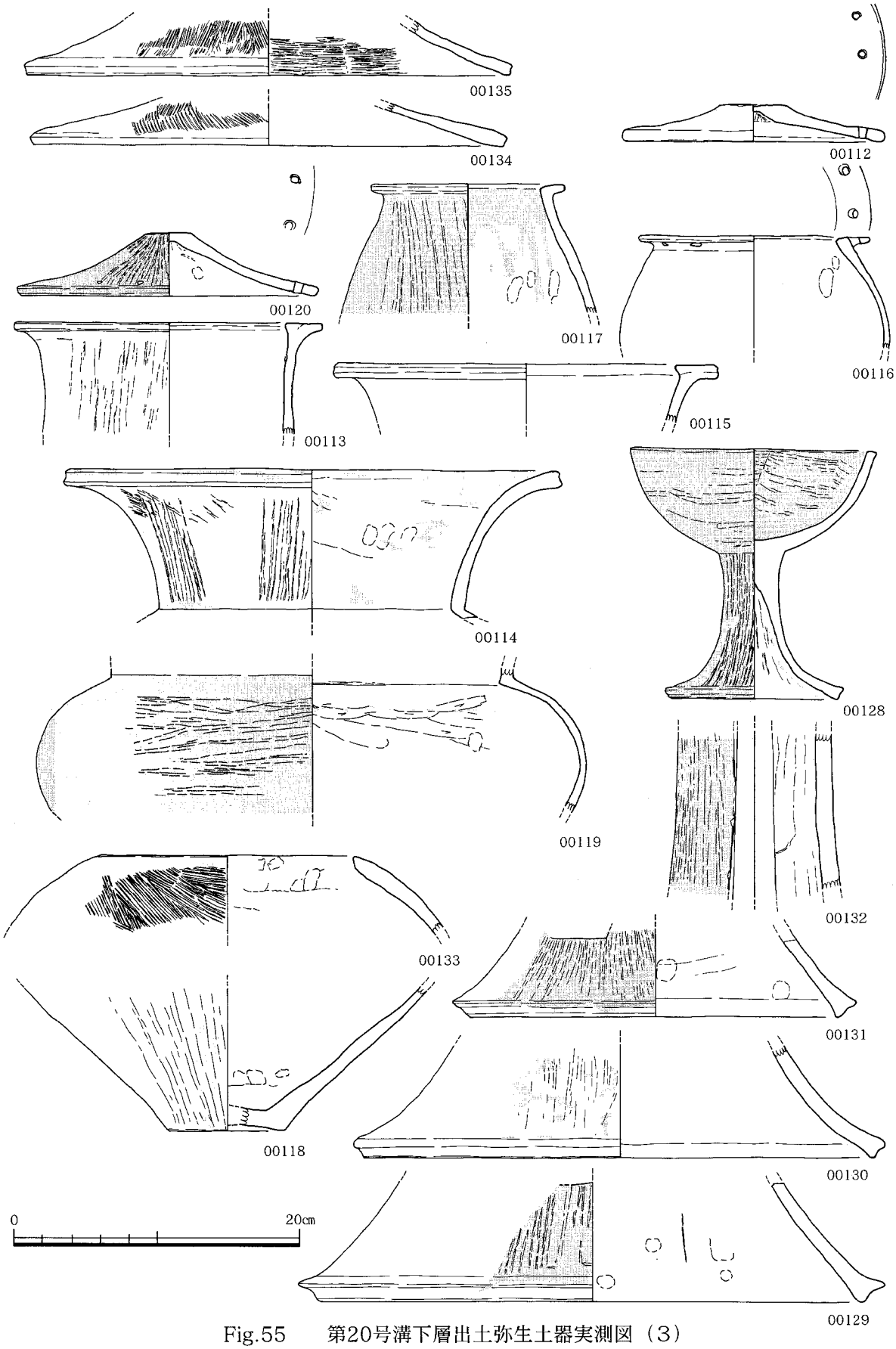


Fig.55　第20号溝下層出土弥生土器実測図（3）

を施し、外面は横ナデ、口縁平坦面から内面はヘラミガキ、口縁下に縦方向のヘラミガキによる暗文を施しており、口径28cmを測る。0249は口縁平坦面にも暗文が施され、口径34.2cmを測る。0294・0298・0300は丹塗りの広口壺の胴から口縁の部位で、屈曲部から上の外面は横ナデ後縦方向のヘラミガキによる暗文を施し、胴外面と屈曲部上の内面はヘラミガキで仕上げている。0413は張りを持つ胴に4条のM字突帯を巡らし、すぼまりT字状口縁をなす壺で、口縁は横ナデ、他はナデで仕上げ、口径29cmを測る。

0407～0411は手捏ねの粘土紐を口縁平坦面に貼り付けた土器で、器面はナデで仕上げ、2～3個体分あり、甕か。筒形器台は、台形台をなす受け部と3面の透かしを持つ長い脚部からなり、丹塗りで同器種としては比較的小型のものか。0274～0276は受け部で、内面の一部はヘラミガキ、他は横ナデで仕上げ、外面に縦方向のヘラミガキによる暗文が施されており、口径13.6cm・12.6cm・11.6cm、0276の軸部径25.8cmを測る。0277・0278は軸部で、軸部径27cm・26.4cmを測る。脚部の外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで指押さえ痕が残り、脚底は横ナデで仕上げている。底径26.8cm～46.4cmを測るものがあり、28cm前後と38cm前後を測るものが多い。器台の0185・0186は受け部径10.7cm・11.2cm、器高17.9cm・17.4cm、底径13.5cm・11.7cmを測る。

下層群出土土器は、0121～0123・0136～0152・0155・0156は甕、0126・0127は鉢、0153・0154は甕棺用大型土器、0128は高坏、0134・0135は蓋類、0112・0120は無頸壺蓋、0113～0119は壺、

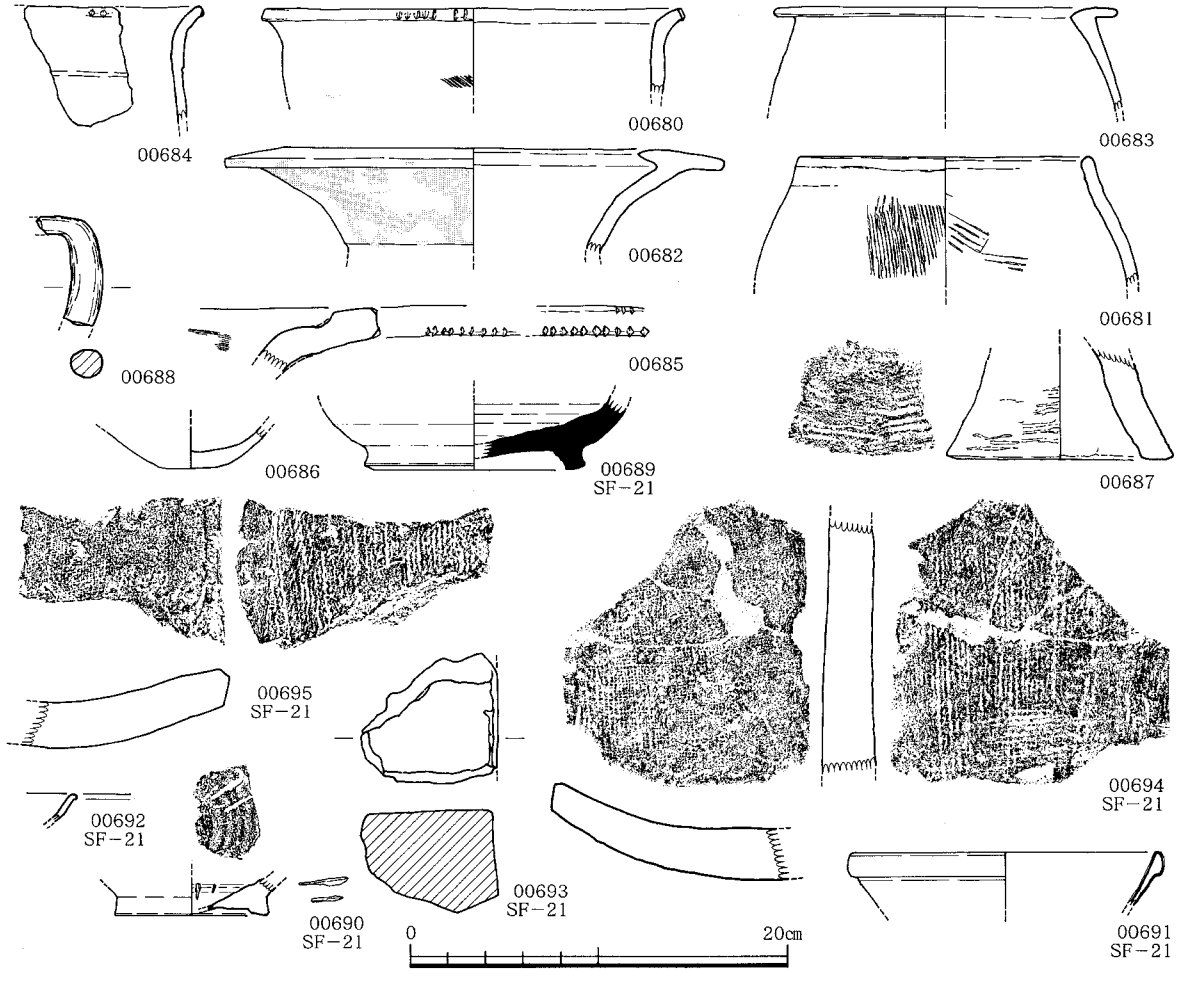


Fig.56　表採遺物実測図

0129～0132は筒形器台、0124・0125は器台である。甕は0152がくの字状口縁を持っているが、出土甕の大半は逆L字状をなす口縁を持ち、0136などのように口縁がやや内傾するもの、0138のように平坦な口縁となるもの、0145のように口縁が外に垂れるもの、0138のように平坦な口縁がやや外に垂れるものなどがあり、0151・0155などは口縁直下に三角突帯を巡らせている。口径は30cm前後のものが多い。0126はぐい呑み状をなし、口径5.6cm、器高3.8cm、底径3.6cmを測る。0127はやや上げ底ぎみの底からやや開きぎみに立ち上がり口縁となる鉢で、口径10.2cm、器高5.3cm、底径5cmを測る。0128は丹塗りの高坏で、坏部はボール状をなし、口縁はコの字状をなす。坏部器面はヘラミガキ、脚部底から内面にかけては横ナデ、外面はヘラミガキで仕上げ、内面にはしぼり痕が残る。口径17.4cm、器高17.6cm、底径12.6cmを測る。0112は口径18.6cm、器高2.5cmを測る。0120は丹塗りで、口縁から内面は横ナデ、外面はヘラミガキで仕上げており、口径21cm強、器高4.4cmを測る。壺は無頸壺（0116）、広口壺（0114・0115・0119）などがある。0117は胴中央前後に最大径を持ち、内傾しながらすぼまり逆L字状口縁となる丹塗りの壺で、胴外面はヘラミガキ、口縁は横ナデ、内面はナデで仕上げ、口径13.6cmを測る。0133は丸みを持つ胴が切れて口縁となる丹塗りの壺で、外面はハケ目調整が施され、口径18cmを測る。

以上、第20号溝出土遺物を取り上げ層群ごとにみてきた。本溝は完掘していないため、溝と断定できないが、壁が直に立ち上がること、多量の祭祀と考えられる土器を包含していることから人手が加わっているとして、ここでは溝とした。完掘していないため掘削時期は限定できないが、上層群には弥生時代後期前半までの遺物を含み、中・下層群は後期初頭前後のものを少量含むが中期後半のものが大半を占めている。また、本溝から丹塗りの甕・鉢・蓋類・高坏・壺・筒形器台など祭祀使用と考えられる土器が多量出土していることは特筆できる。以上から、本溝は弥生時代中期後半前後に使用され、後期前半には埋没したといえよう。

5．その他の遺構と出土遺物

（1）第21号道路状遺構（SF－21）と出土遺物（Fig.３・56, PL.１・５）

本道路状遺構は、調査区東側で幅1.5～2.5mを検出した。調査時は、現代の水田排水溝は切っているものの砂・青灰色粘土・黄褐色ローム・暗褐色から黒褐色粘質土が混在した状態であったため近世から近代にかけての攪乱として扱った。しかし、高畑遺跡・板付遺跡・那珂君休遺跡で確認されている古代の官道の延長線上であること、床底は検出面から10～30cmで、15cm前後の凸凹はあるもののほぼ平坦であり、出土遺物も古代の瓦類と土師器であり、床底近くに祭祀と考えられる馬の下顎骨があること、床底に点々と部分的に砂の薄い堆積がみられることなどから報告書作成の段階で道路の一部と認定した。

遺物は検出面で弥生土器・古代の土師器・近世の白磁などが出土し、床底では古代から中世初期の土師器・須恵器・瓦類などの細片と馬の下顎骨などが出土した。0689～0695を図化した。0692は検出面で出土した白磁の皿。他は床底および床近くで出土したものである。0689は須恵器の貼り付け高台を持つ底で壺か。0690・0691は碗で、前者は陶器、後者は白磁。0693は?、0694・0695は平瓦。

以上から、本道路状遺構は調査時攪乱として調査したため築造時期は限定できないが、８世紀末前後から１２世紀初頭前後に使用された官道と考えられる。延長線上の他遺跡の調査成果から古代官道の西側にあたり、道路幅は20m前後となり、本調査区ではN－39.5°－Wの主軸方位をとる。

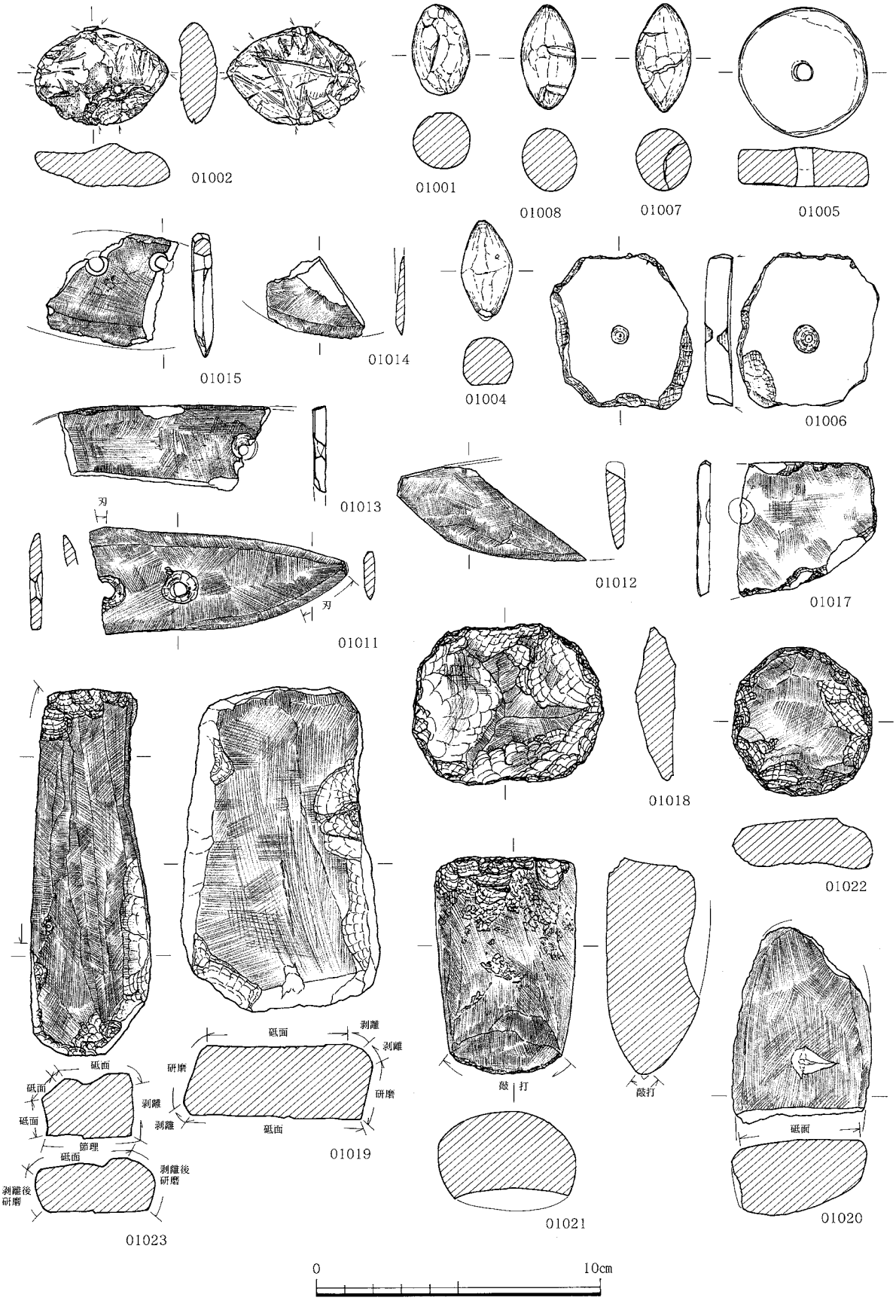


Fig.57　　出土土製品および石器実測図

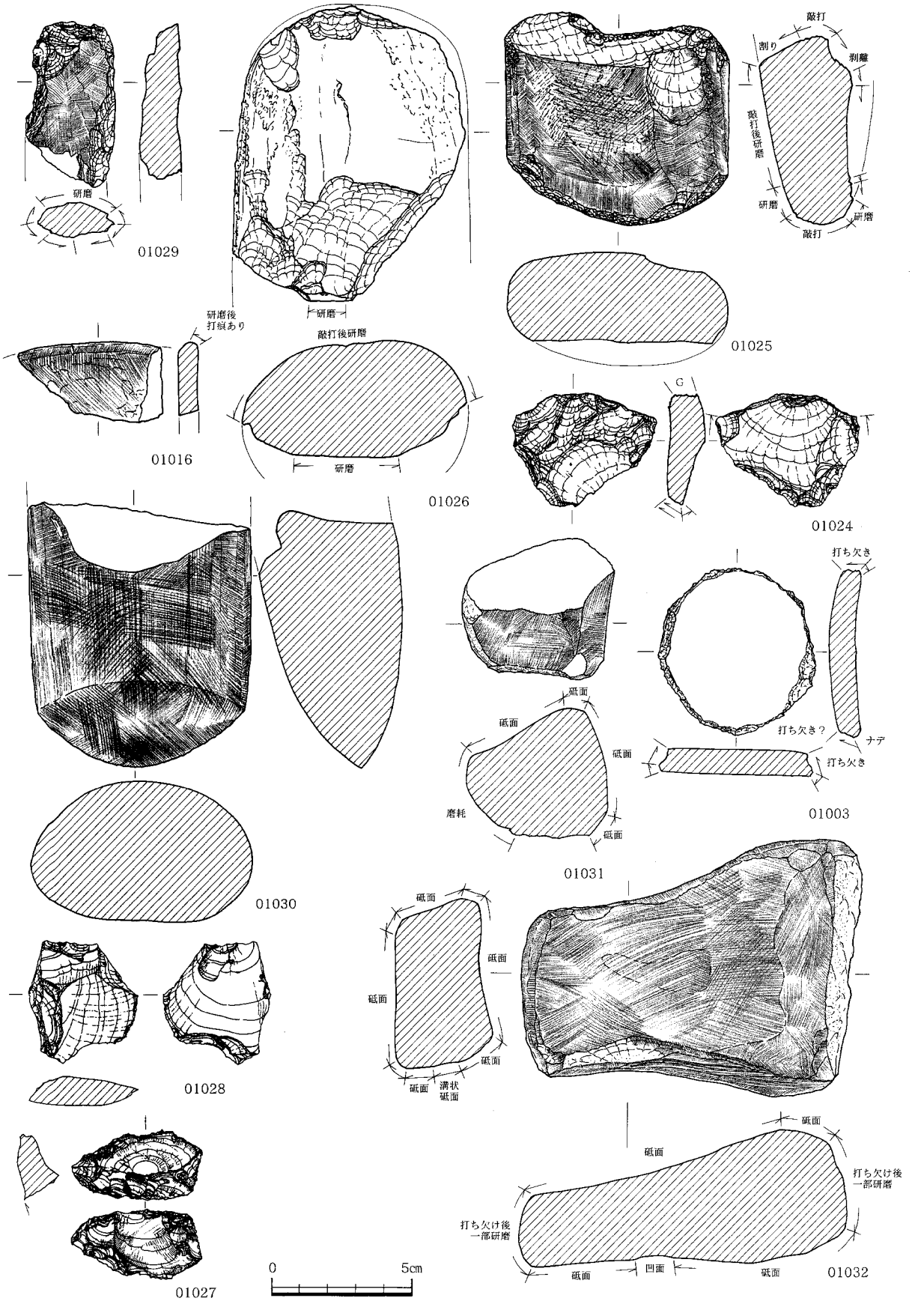


Fig.58　　出土石器実測図

（2）出土土製品と石器（Fig.57・58, PL.19）

本調査では、土製品８点（把手・スプーンを除く）が出土した。投弾が４点（01・04・07・08）で、重さ10.51g・8.76g・11.69g・15.57gを測る。土錘が１点（02）で、重さ18.45gを測る。紡錘車が１点（05）で、重さ31.62gを測る。土器片利用の紡錘車未製品が１点（06）、土器片利用の円盤が１点（03）で、重さ27.27g・37.53gを測る。

石器および石製品は150点出土した。内訳は古銅輝石安山岩製の削器１点（24）・剥片石器１点（28）、安山岩質ホルンフェルス製の石製穂摘み具５点（11～15）・石鎌１点（16）、今山産出玄武岩製太型蛤刃石斧６点（21・25・26・30）、滑石製打製石斧?１点（29）、敲打器５点（21・25）、磨石５点、砥石８点（19・20・23・31・32）、紡錘車未製品１点（22）、軽石１点、黒曜石製の剥片35点・削片49点・石核19点（27）・素材９点、古銅輝石安山岩素材３点である。

これらの遺物は、遺構に伴うものは少なく、前で述べたSC－10出土のほかは、SD－06で円盤１点（03）・石斧転用の敲打器１点（25）・磨石２点、SD－20で投弾３点（04・07・08）・紡錘車１点（05）・同未製品２点（06・22）・穂摘み具４点（11～14）・同未製品１点（17）・石斧転用敲打器１点（21）・砥石４点（19・20・23）・磨石２点が遺構の時期に該当する土製品・石製品である。

6. まとめ

本調査地は、板付遺跡が所在する板付北・中央・南台地のなかの南台地の西南部にあたる。調査前は本地は水田として使用されていたため、台地際の様相がわかるのではと考えていたが、調査の結果、台地が本調査地まで延びており、弥生時代以降の生活遺構が所在していたことがわかった。また、遺構の遺存状態などから、古代に官道を築造した時期に土地改変が行われ、地形的に現代の状況になったのは江戸時代になってからと考えられる。

本調査検出の遺構群は、弥生時代後期初頭前後のもの、古墳時代初頭前後のもの、古墳時代中期前半のもの、古墳時代後期から古代にかけてのものがある。

本調査でもっとも古い遺構は、弥生時代中期後半のSD－20で、後期初頭前後のものとしてSC－10・SD－06がある。SD－06がSD－20より後に埋没しているが、前者の下層群と後者の時期差はほとんどなく、同じ溝の可能性があり、板付台地を廻る外環濠があるとすれば、両溝は外環濠の可能性が高いといえよう。両溝の延長部の調査を待ちたい。

古墳時代初頭から中期前半の遺構としてSB－15・16、SK－08・09などがあり、本調査地周辺が居住地空間として連続して使用されていたことが確認できる。

古代前後の遺構としては、SB－14・17が古墳時代後期から奈良時代までのものと考えられ、８世紀末前後に官道（SF－21）が築造され、同時期にSB－11～13が建築されたと考えられる。両建物は官道になんらかの規制を受けていると考えられる。以降、柱穴からは、12世紀までの遺物が出土しており、少なくとも官道が所在した12世紀までは、本調査地周辺は居住空間として利用されていたと考えられる。また、本調査地の東側に接して現在ある生活道路は、主軸方位からみても官道の残存形といえよう。

第４章　調査の記録 ―第50次調査―

１．調査の概要

遺跡調査番号	8654	遺跡略号	ITZ－50
調査地地籍	福岡市博多区板付五丁目7－39	分布地図番号	24-0094-0842
開発面積	60㎡	調査対象面積	60㎡
調査期間	1987年1月26日～同年2月29日	調査面積	83㎡

本調査区は板付丘陵南台地の南東端部、標高10～12m付近にある（Fig.59）。東側は御笠川流域の沖積平野であり、近年まで台地の縁辺から水田が広がっていた。現在は一帯住宅地となっているが、往時はこの水田を見下ろす丘の上に板付八幡社が祭られていたのである。調査は板付八幡神社の本殿、拝殿の老巧化による改築工事に伴い実施した。当社境内の本殿部分は周囲より２ｍほど高い残丘であり、社殿西側には「板付八幡古墳」と呼ばれる横穴式石室の一部が露出している。また境内南側に近接して1974年に調査された板付遺跡E・D9地点（11次）で弥生時代の組合式木棺が検出されており、本調査区周辺にこれらの関連遺跡の存在が予測された。以下では調査区を便宜上拝殿部（東側）と本殿部（西側）に分けて説明する(Fig.60)。

拝殿部の調査

まず拝殿部分は本殿側と0.7～0.8mの段差があり、すでに相当の削平を受けていることがわかる。残存していた拝殿の礎石（3×3間）と造成土を除去すると鳥栖ローム中～下部の地山面が現われる。地山面は現在の参道と平行した長方形の基壇状をなしており、この基壇状の高まりにほぼ合致する規模の掘立柱建物SB01，02と柱穴多数を確認した。

本殿部の調査

次に本殿部分は現存していた建物の基壇と礎石の除去から始めた。この基壇の中には、やや規模の小さな礎石を持つ基壇が埋め込まれていた。さらにそれを除去すると旧地表面等は削平され、直接新期ロームが遺構面として現れた。この面では弥生時代、古墳時代、近世の遺構が切り合って検出された。古墳時代の竪穴式住居内埋土以外に包含層などの遺存はなく、また古墳墳丘に関わる盛土なども確認されなかった。調査は遺構の平面プランを検出した後、順に掘り下げ調査を進めた。なお、拝殿部と本殿部の間にある石垣も撤去して精査したが、削平が進んでおり杭列とそれを覆う石列が検出されたのみである。何れも近世のものである。

２．弥生時代の遺構と遺物

（１）遺構

土坑SK06（Fig.61）

SC05の床面清掃中に検出した遺構であり、約160×200cmの隅丸方形の平面形を呈し、深さ80～90cmを測る。出土遺物は少ないが土器片がある(Fig.62-1～3)。1～3は甕の破片である。1は鋤先口縁、2,3は底部である。3はやや厚みを残している。須玖１式新相、弥生時代中期中葉の時期が比定される。

柱穴

弥生時代の遺構としては、他に多数の柱穴を検出したが遺構としてまとまるものはなかった。柱穴内からは少量の土器片が出土した。P25からは鉢形土器の口縁部(4)がある。P27からは中型甕口縁部(5)がある。P32からは甕口縁部(6)、壺肩部(7)がある。P34からは甕底部(8)がある。P47からは甕口

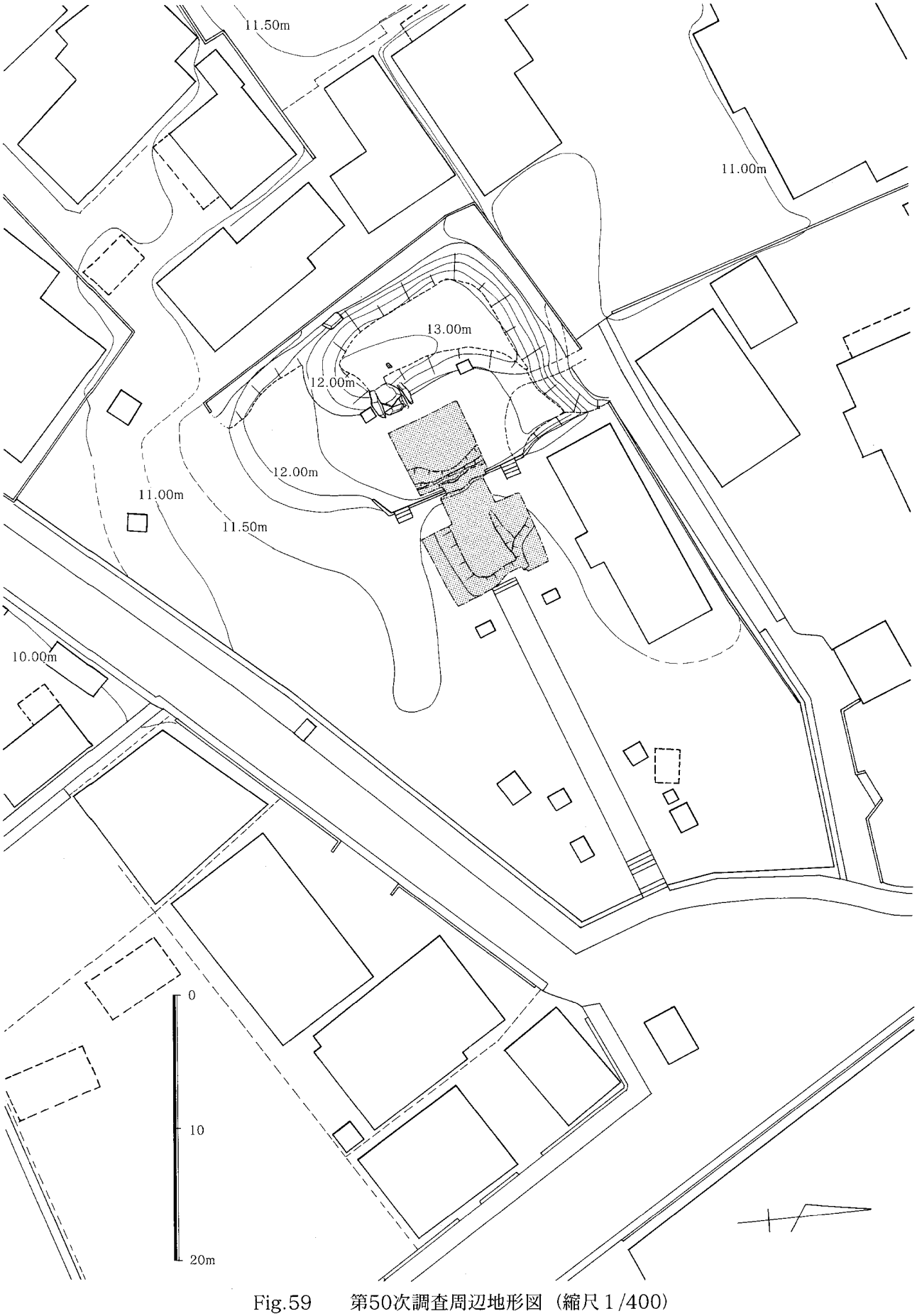


Fig.59　第50次調査周辺地形図（縮尺1/400）

縁部(9)、同底部(10)、投弾(11)がある。投弾は長さ4.5cm、径約2.5cmを測る。土器類は8が亀甲式から城ノ越式、他は須玖１式新相～２式にあたる。

（２）その他の遺物

土器 (Fig.63-12～33)

弥生時代の遺物は主に本殿部下部の包含層から出土した。これは表層、古墳時代住居内埋土や神社基壇などからの出土であるが、基壇の土砂は古墳盛土を利用しているとみられ、本来墳丘内埋土に混入していたものも多いと考えられる。弥生時代土器類としては、甕(12～27,30,33)、壺(27～29,31)、器台(32)がある。甕は鋤先口縁の拡張が短いもの(12～23)と、やや長いもの(24～26)がある。甕底部には小形(30)と中形(33)がある。壺は無頸壺(27)、広口壺(28)、長頸壺(29)、底部(31)がある。器台(32)は調整が荒く、脚部が伸びるものである。これらの編年的位置は詳細には区分困難であるが、12～23,27,30,31,33が城ノ越式から須玖１式、24～26,28,29が須玖２式、32は下大隈式に比定される。

土製品 (Fig.63-34)

34は投弾である。長さ3.4cm、径2.1cmを測る。

石器 (Fig.64)

調査では本殿部分から少量の剥片石器が出土した。黒曜石製の剥片石器類19点である。ここでは黒曜石の微細な砕片2点を除く17点について報告する。ほとんどが拝殿部から出土したものであり、このうち5は土坑SK06、9,11,13は弥生時代柱穴P－47、3,4,10,14,16,17は古墳時代住居SC05内から出土したものである。そのほかはより後出する時期の遺構や包含層からの出土である。全て黒曜石製であり、剥離面の風化は1,2が進んでおり、他の3～17は進んでいない。石材は科学分析を行っていないが、肉眼では2が牟田産、3～17が腰岳産と推定される。

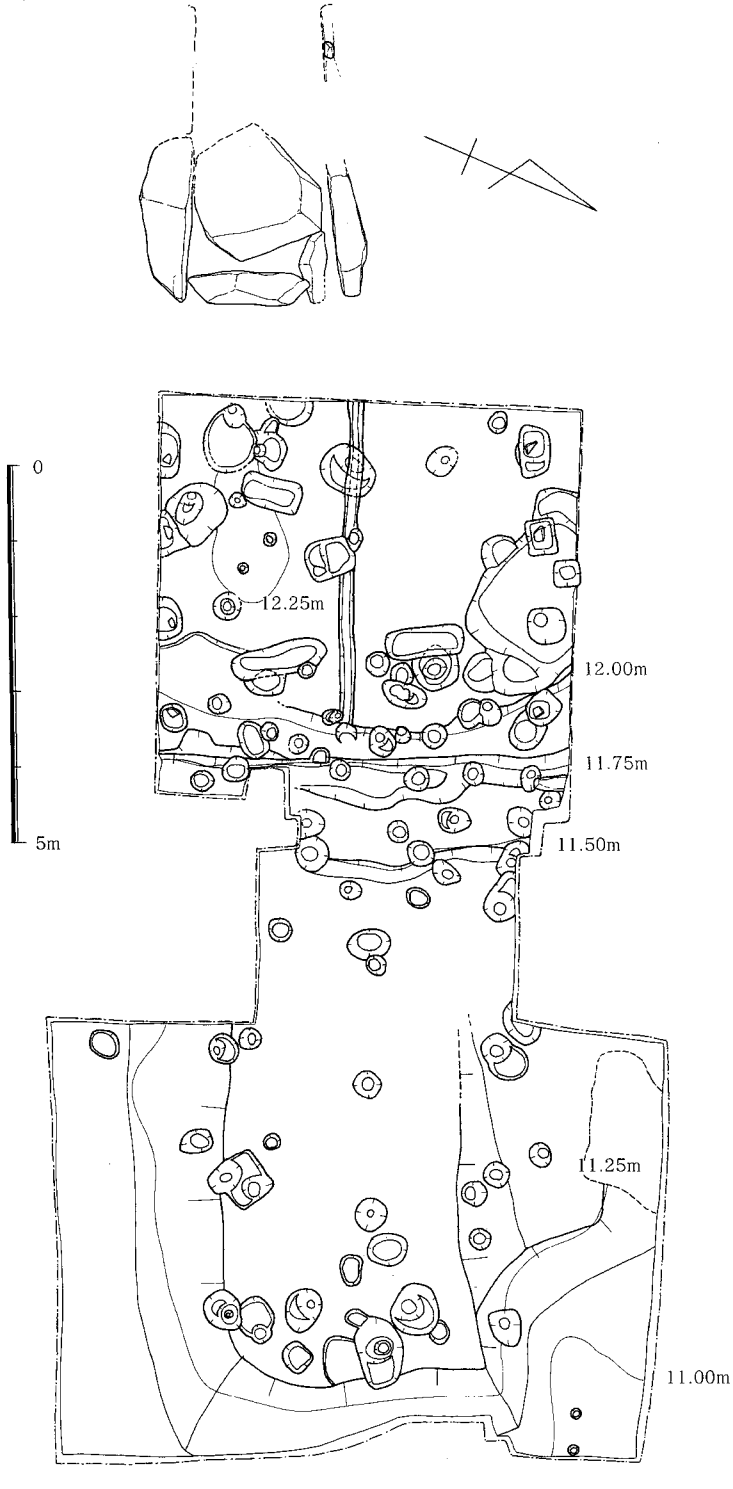


Fig.60　第50次調査全体図（縮尺１/100）

1は横長の剥片である。打面には調整がなく平坦な剥離面である。また、打面はポジ面である。長さ1.2cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmを測る。2は縦長の剥片であり、背面には凹凸のある円礫状の自然面が残る。石核形成時の帽子状砕片とみられる。長さ4.0cm、幅2.3cm、厚さ1.2cmを測る。3はくさび状石器である。小型であるが、四方からの打撃が加えられている。背面には素材の主剥離面が残り、縦長剥片を素材としていることが分かる。右側縁には裁断状の剥離面が形成されている。長さ1.7cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。4は削器と見られる。縦長剥片を素材とし、三方の縁に荒い調整を施す。左側縁は未調整で刃縁に微細剥離がある。長さ3.0cm、幅1.9cm、厚さ0.9cmを測る。5は二次調整ある剥片である。分厚い不定形剥片の両縁に裁断状の調整を施し、先端部を刃縁としている。微細剥離がみられる。長さ2.8cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmを測る。6は微細剥離ある剥片である。寸詰まりの縦長剥片であり、両側縁に微細剥離が認められる。長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。7は稜上打撃を有する縦長剥片である。長さ3.0cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmを測る。8は先行打撃部を除去する石核調整剥片である。稜部と基部に階段状の潰れがあり、一部に熱剥離がある。長さ2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.8cmを測る。9は作業面砕片である。長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmを測る。10は作業面砕片である。長さ1.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測る。11は不整形な横長剥片である。稜状打面であり、先端の刃縁部に微細剥離がある。長さ1.9cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmを測る。12は横長剥片である。背面は自然面であり、石核成形時の調整剥片と見られる。長さ2.5cm、幅3.7cm、厚さ0.8cmを測る。13は不整形の横長剥片である。調整打面であり、下縁に自然面がある。二縁に微細剥離がある。長さ2.0cm、幅2.5cm、厚さ0.6cmを測る。14は横長剥片である。打面は自然面

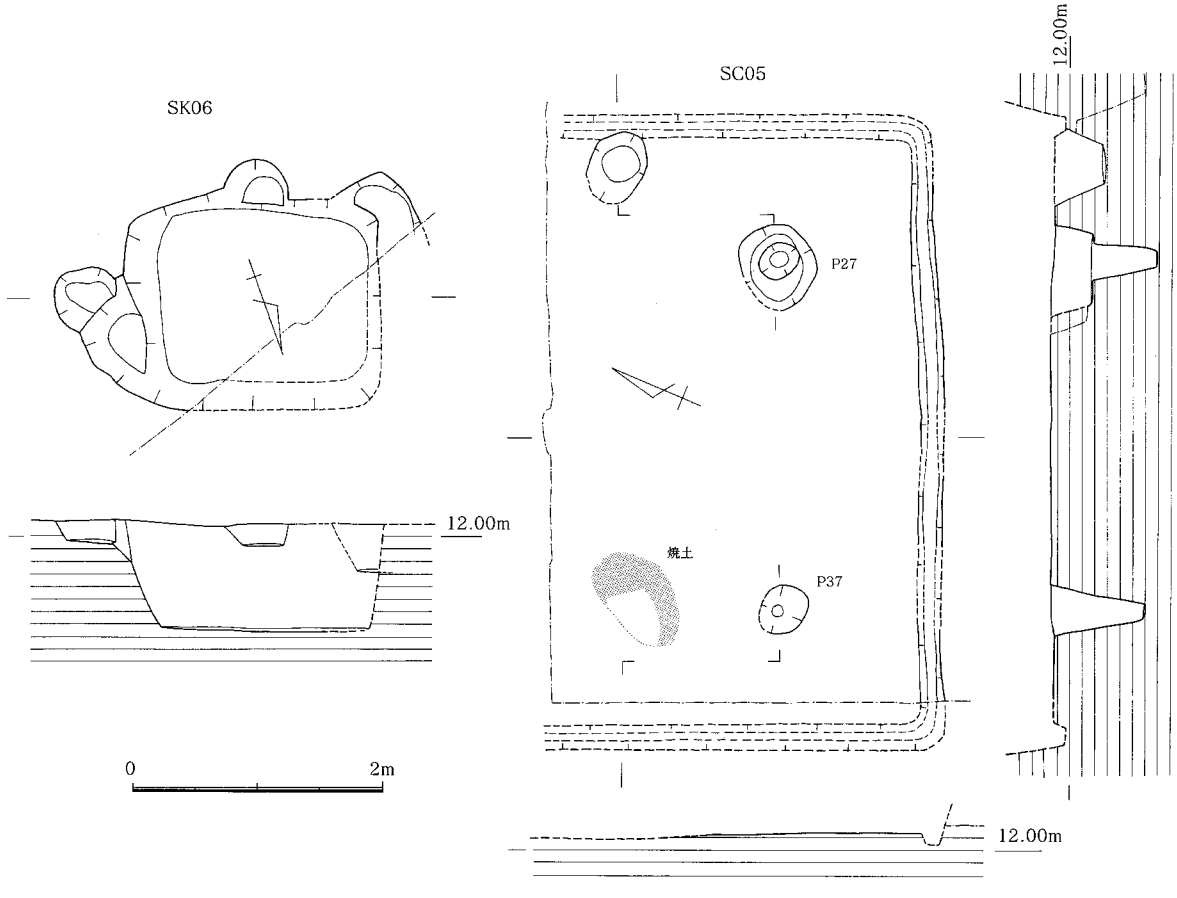


Fig.61　弥生・古墳時代遺構図（縮尺1/60）

である。長さ1.9cm、幅2.8cm、厚さ1.1cmを測る。15は石核である。剥片素材の可能性もあるが、表面は周囲からの剥離により素材面が観察できない。なお、この剥離が横長剥片剥離であるのか、石核調整かは不明である。上部の熱剥離面を打面とし、平坦打面端部から剥片剥離を行っているが、初期の調整剥片剥出以降は階段状剥離となり、作業を中止している。長さ2.6cm、幅3.5cm、厚さ1.3cmを測る。17は石核である。角礫状の分割礫の端部から剥離作業を進め様としているが、階段状となり、打面調整も不十分で作業を中止している。長さ2.2cm、幅3.7cm、厚さ1.4cmを測る。17は小型の石核である。平坦、調整打面から剥離を行っているが、階段状となり中止している。長さ0.9cm、幅1.3cm、厚さ1.1cmを測る。

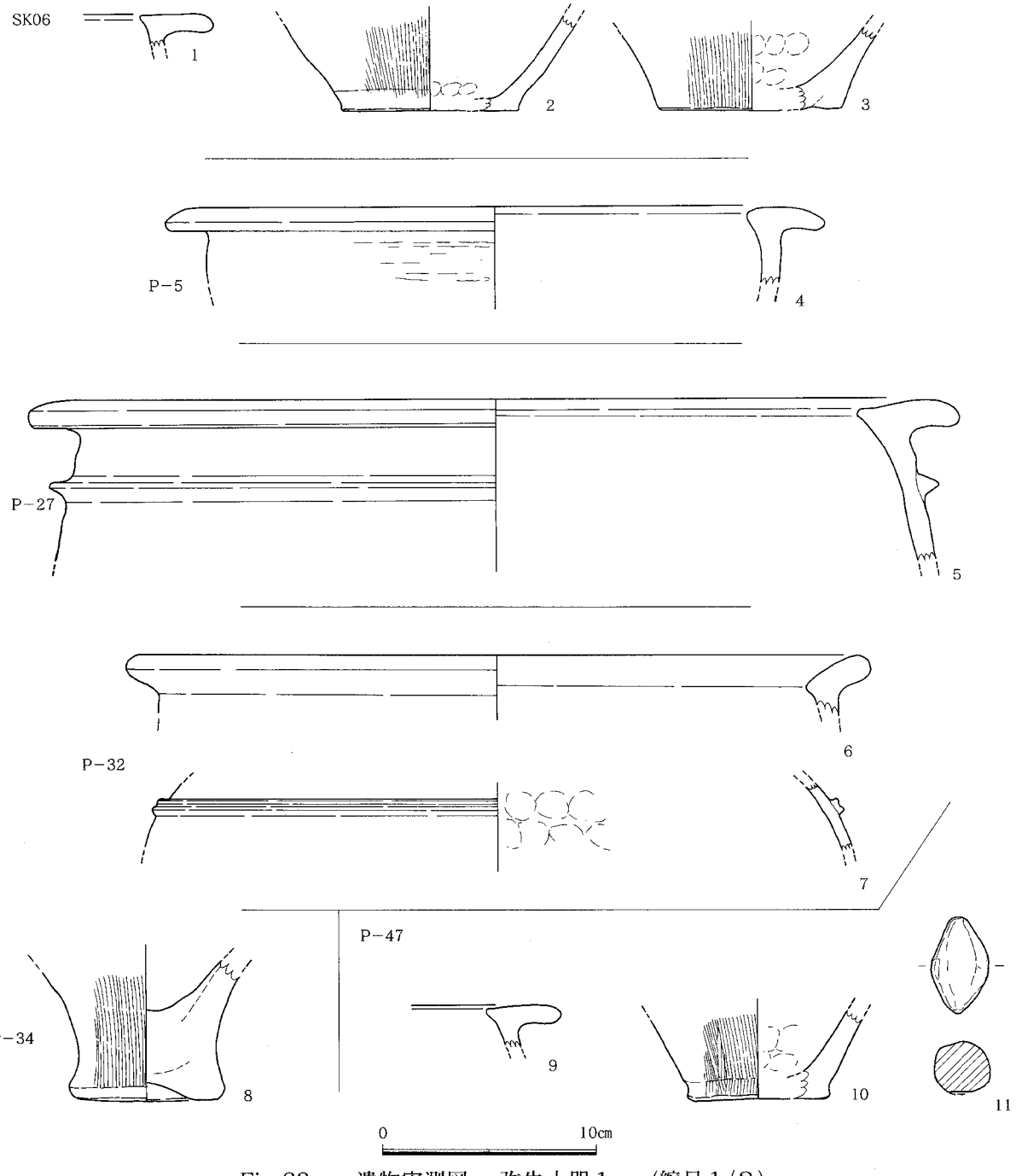


Fig.62　遺物実測図 −弥生土器1−（縮尺1/3）

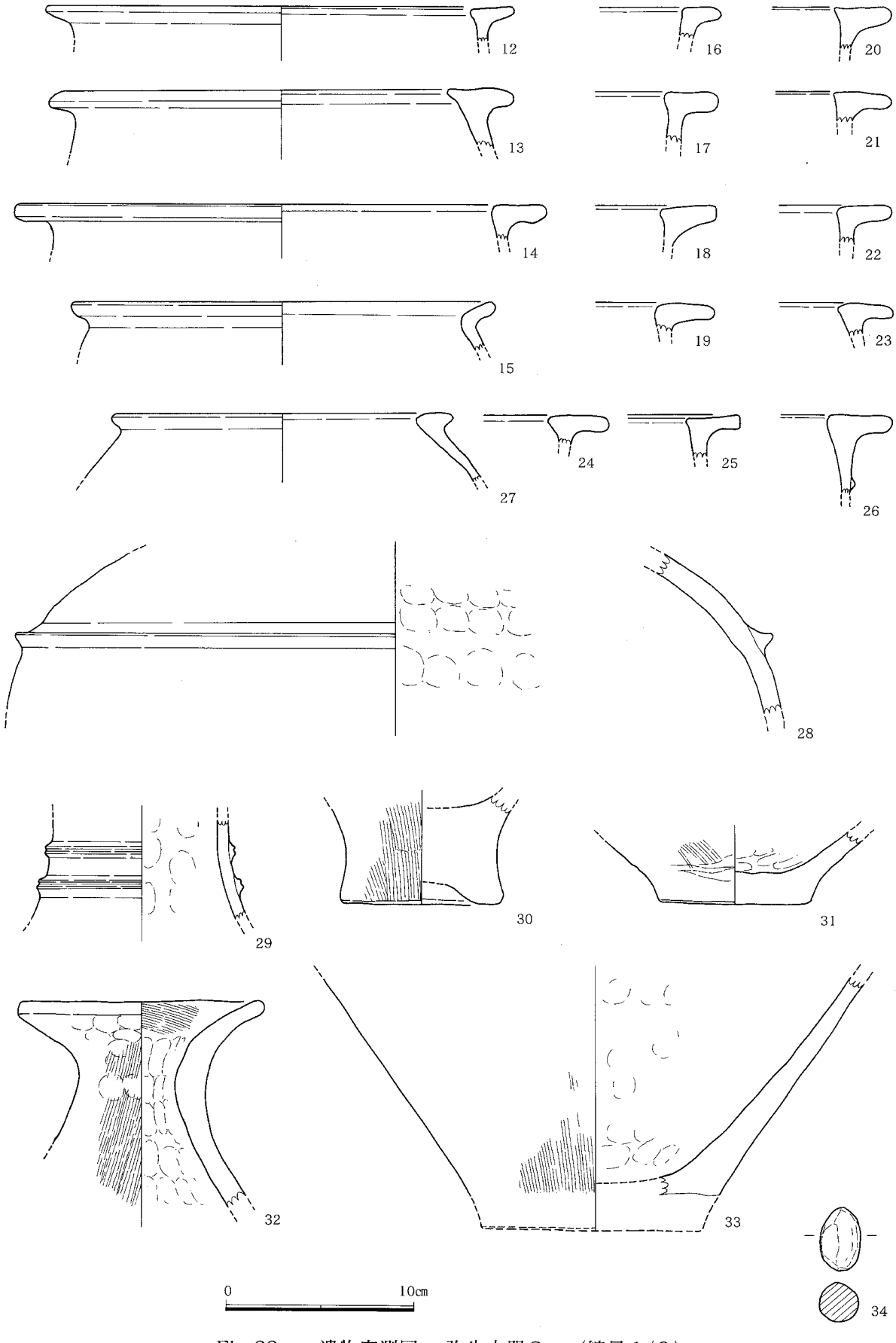


Fig.63　遺物実測図 －弥生土器２－（縮尺１/３）

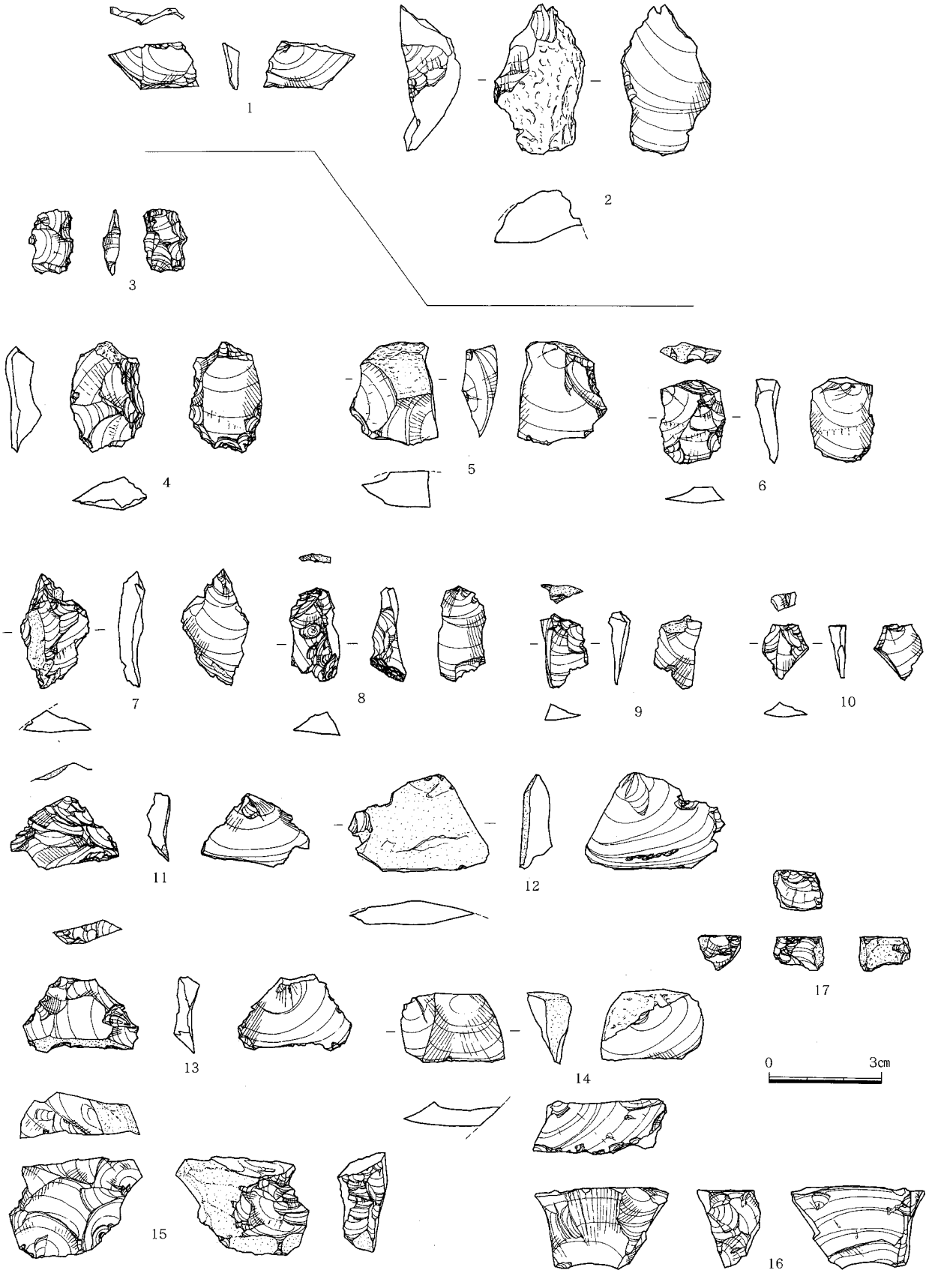


Fig.64　遺物実測図 －旧石器・弥生時代石器－（縮尺2/3）

以上の剥片石器類は5,9,11,13が弥生時代中期中葉の遺構から出土し、共伴すると考えられる。それ以外の石器類のうち利用石材、風化状況、剥離技術の類似した3,4,6～8,10,12,14～17も本来同じ時期に所属すると考えられた。なお風化が強く、異なる石材を含む1,2の２点は後期旧石器時代に所属するものである。

福岡平野中央部での剥片石器類の利用は弥生時代中期中葉には激減し、同後葉に入るとほぼ失われる。本資料は少ないながらも剥片石器類使用の最終状況を示す資料といえる。出土石器の石器組成は、削器、くさび形石器、微細剥離（使用痕を含む）を有する剥片などである。石核と砕片の存在からこの場所での石器製作が予測される。なお前段階まで剥片石器の中心となる石鏃は不在であるが、この段階では検出例が乏しく、本来の石器組成から欠落したものかは慎重な検討が必要である。剥片剥離技術は、石核、剥片からまず縦長剥片を指向するものが伺える。これは前期以来の傾向とみてよい。縦長剥片は4,6,7など寸詰まりの厚手・幅広があり、削器など切削具としての利用が第一義とみられる。また、くさび形石器にも縦長剥片を利用している。不整形の横長剥片は石核調整剥片も多いが、石核15のように周囲からの剥離により幅広剥片を剥出するものもある。不整形横長剥片についても切削具としての利用が認められる。

３．古墳時代の遺構と遺物

（１）遺構（Fig.61）

竪穴式住居SC05は拝殿部北半で検出した。調査区中央北側で壁溝と床面の一部を確認したが、東側は削平を受け失われている。また、西側と北側は調査区外に展開する。壁溝はほぼ直線であり、幅0．2m深さ0.2mを測る。床面は南側の遺構検出面より約10cm下がり、ほぼ平坦である。住居の主柱穴は壁から1.2m離れた位置に２基が確認できた(P27、P37)。また床面の北西側に80×50cmの範囲に焼土が検出された(アミ部)。焼土のある対面の壁際に深さ0.4mの穴がある。東西両壁は未確認であるが、以上の状況から本来は１辺約５mの正方形４本主柱の竪穴式住居と見られた。床面焼土の周辺から土師器壺(2,7,8)、甕(10,13)、鉢(11)、高杯(15,18～20,24,27,29)や砥石(30)が、主柱P37から高坏(17,21,26,28)が出土した。また住居内埋土やその上部から近接する時期の土器類が多く出土した。以下ではそれらをまとめて報告する。

（２）遺物（Fig.65・66）

１.土器

壺には小形の粗製(1,6)丸底壺(2～4,9,8)、平底壺(5)、二重口縁壺(9)がある。甕には布留式系(12)、牛角把手付(13)などがある。鉢形土器(11)は直口縁、丸底であり、底部に焼成前穿孔がある。高坏には坏部(14～20)、脚部(21～29)がある。坏部は下半部でやや膨らみ、口縁部に薄くなるが、口唇部に直線的に開くもの(14,16,19)と、やや外反するもの(15,17,18,20)がある。脚部は軸部が直線的に開き、さらに脚端で屈曲、端部に薄く、短く終わる。穿孔は認められない。

２.砥石

30は砥石である。細粒砂岩の亜円礫を素材とし、3面に研面がある。一面にのみ溝状の研磨痕がある。長さ12cm、幅10.5cm、厚さ4.7cmを測る。

３.鉄器

31は不明鉄製品であり、両端を欠損している。刀子の基部か。長さ3.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。

これらの遺物は共伴に疑問の残る床面出土の甕(10,13)を除くと比較的まとまった組成をなしている。この甕は調査時の出土状況からは区分できなかったが、より新しい様相をもつ。その組成に含ま

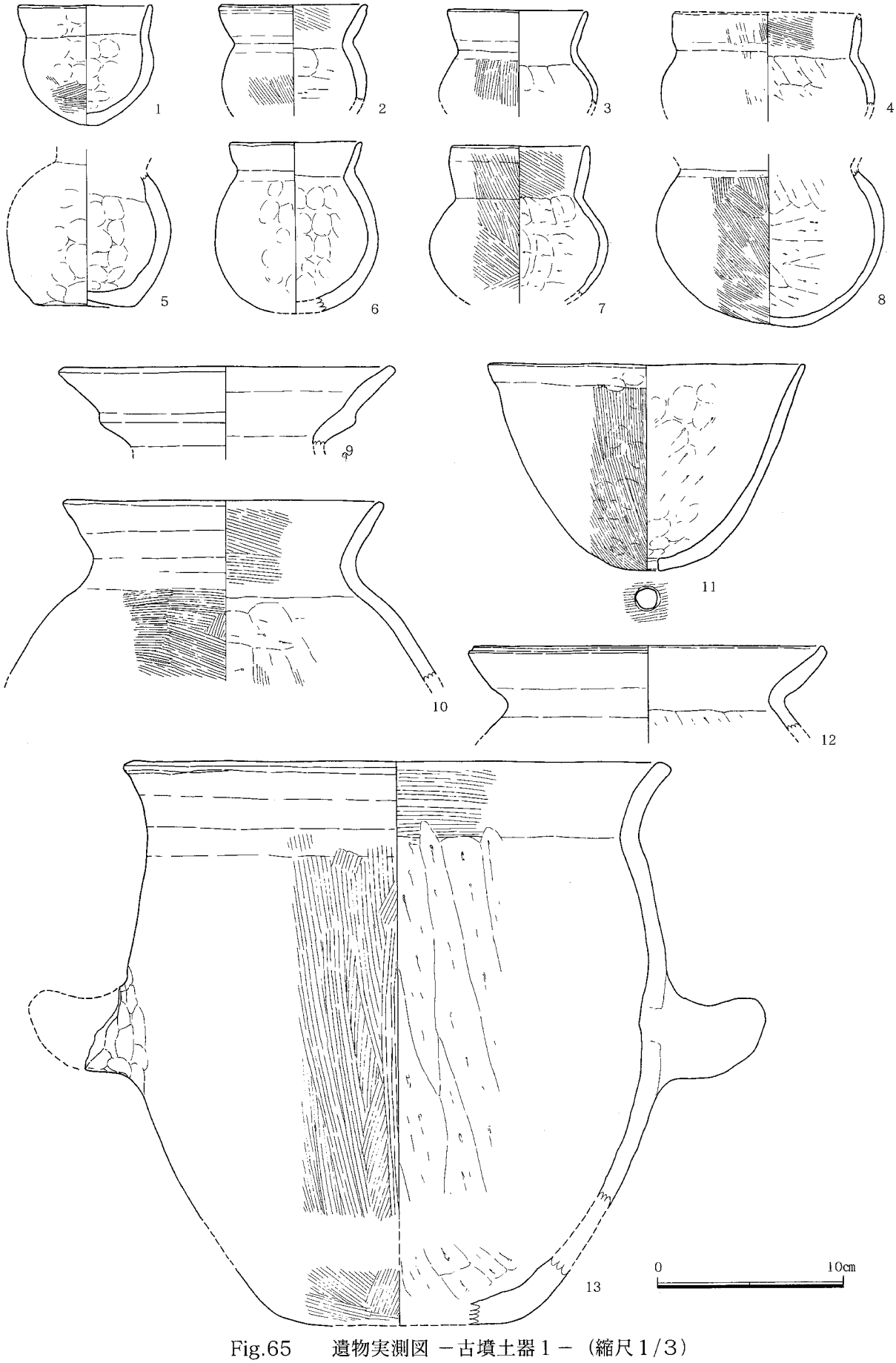


Fig.65　遺物実測図 －古墳土器１－（縮尺１/３）

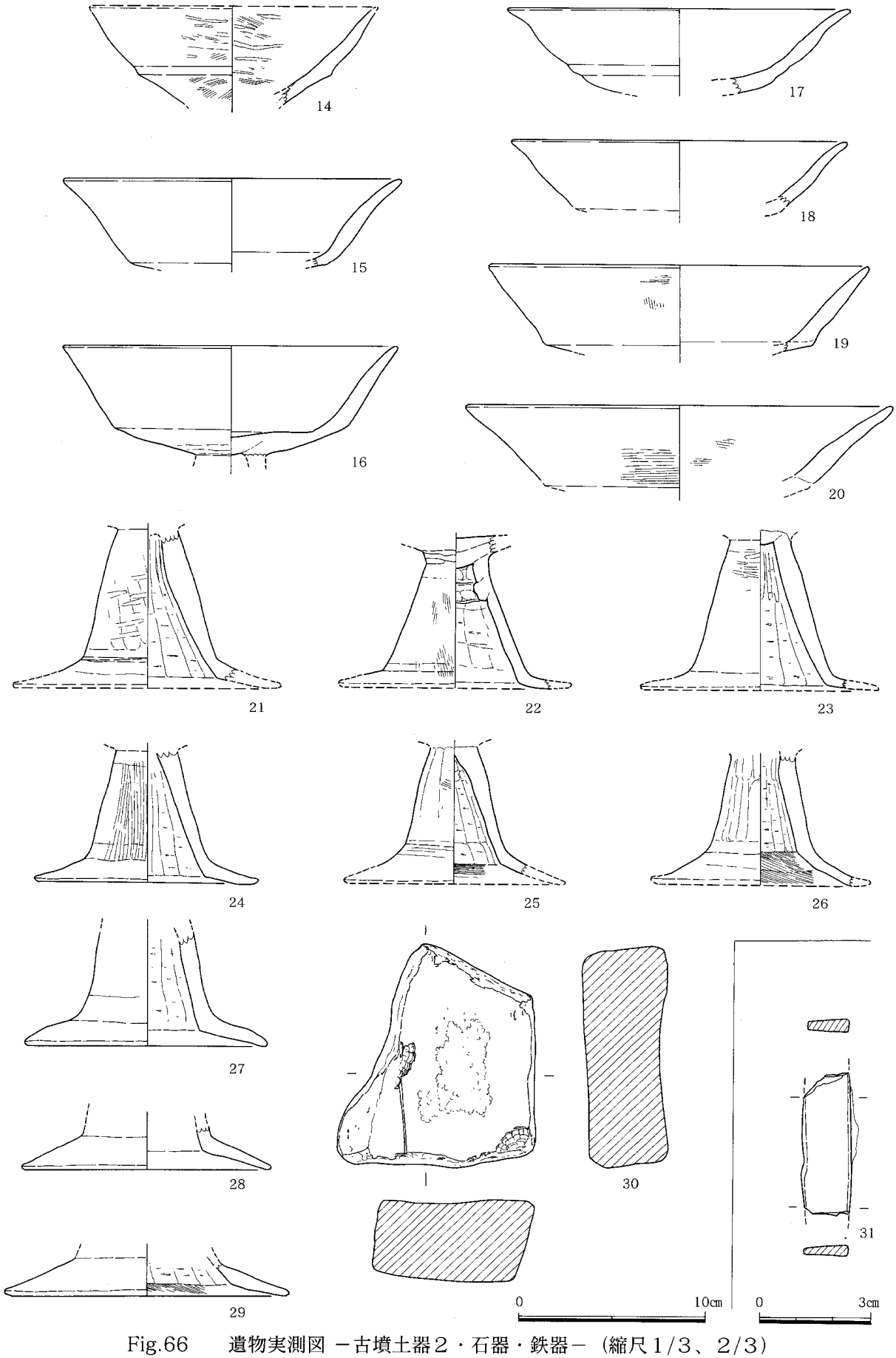


Fig.66　遺物実測図 －古墳土器２・石器・鉄器－（縮尺１/３、２/３）

れる可能性も残し、そのほかの土器類は古墳時代中期（5世紀前半）頃の時期が推定される。

4．板付八幡古墳について

（1）あらまし

板付八幡神社の境内、神殿の背後には、一目で古墳石室と分かる大石を組み合わせた石材がむき出しとなっている。苔生した石材であり、いつの頃に墳丘が失われ、このように石室が露出したのか明らかでない。しかし今回の調査により近世初期と見られる神社建物の配置が、この石室の東側約１ｍの位置で検出されたことや、調査や周辺の踏査でも古墳時代以降古代、中世の遺構、遺物を見出すことが出来なかったことからみて、それは神社創建時の造成工事と直接関連する可能性が高い。すなわち墳丘は中世まで壊されることなく遺存していたのであるが、神社建設にあたって、当初石室後方にあたる墳丘を大きく削り込むことにより、平坦面を設けて神殿の敷地としたと考えられるのである。その後の改築・増築などの際にも、残された墳丘の土砂が採掘され、利用されたことは想像に難くない。数百年の間にこのように僅かな墳丘とむきだしの石室という現状となったと考えられる。なお神社を見晴らしの良い周囲より一段高い位置に建設することや、その際に古墳墳丘が利用されることはけっして稀なことではない。この位置は板付南台地の南東端部にあたり、現在では周囲に建物が密集してしまい、立地環境が分かり難いが、近年までは周囲に水田が広がり、そのなかにあって小高い鎮守の森を形成していたのである。

本古墳に関する記録はほとんどない。福岡市教育委員会発行の報告書でも、「板付遺跡があり、（略）南端には小円墳（板付八幡古墳）一基がみられ（山口他1974）」「板付台地南端には板付八幡古墳がある。墳丘は失われ、大破した石室が残る（後藤他1976）」などとの記載が見られる程度である。

なお、今回の調査では古墳に関連したトレンチなどは設けず、あくまで表面観察を行った。そのために、遺構、遺物に関する情報はほとんど得ることができなかった。以下現状での記載にとどめ今後の正式な調査に委ねたい。

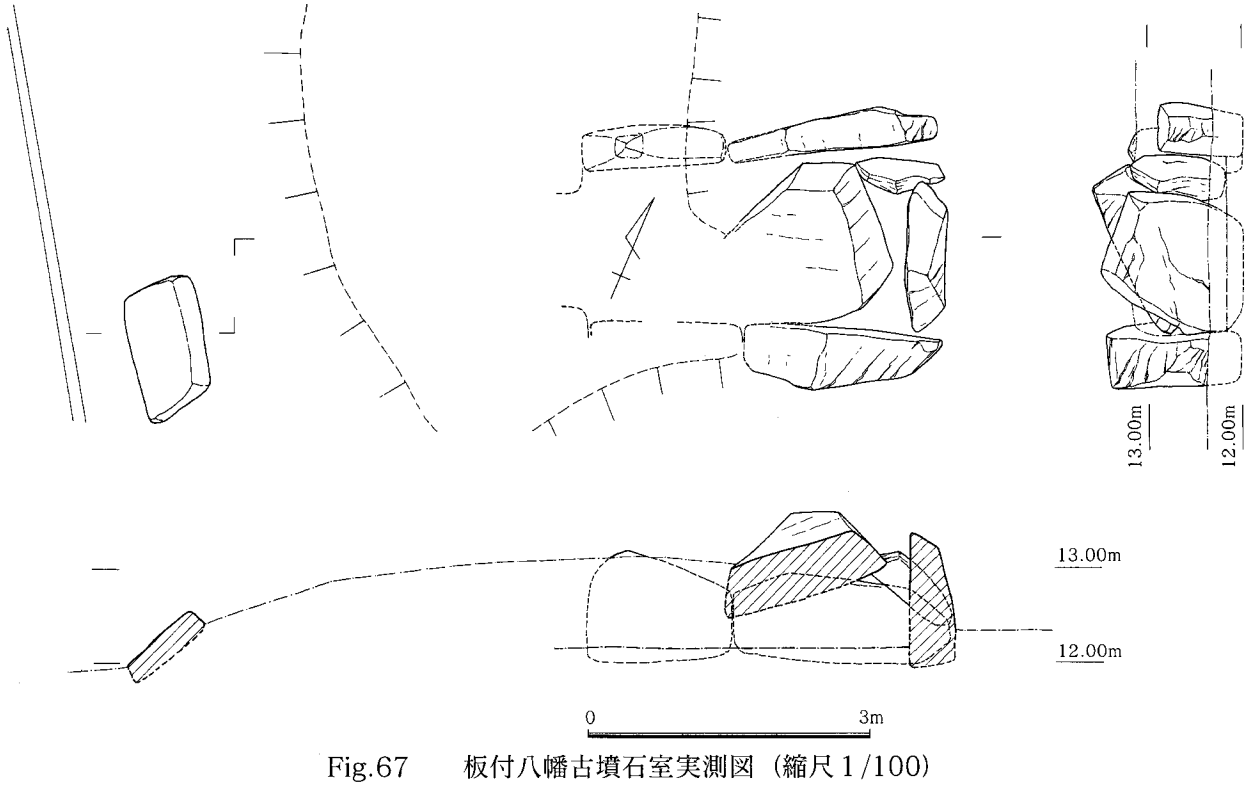


Fig.67　板付八幡古墳石室実測図（縮尺１/100）

（1）**石室**（Fig.67）

現在も八幡宮拝殿後方に石室が露出したままとなっており，その観察は比較的容易である。露出している部分は数トン級の巨礫が「コ」字形に配置され、その中に数個の大きい礫が落ち込んでいる。石室は略西側に開口すると予測され、露出している部分は石室後半部から奥壁付近の腰石である。石材は花崗岩を主に一部粗面玄武岩が用いられている。奥壁は幅1.6m、高さ1.2m以上、厚さ0.4mの花崗岩角礫と幅0.5m、高さ1.1m、厚さ0.2mの粗面玄武岩を立て並べている。右側壁は幅1.9m以上、高さ1.2m以上、厚さ0.5mの花崗岩角礫、左側壁は幅1.6m以上、高さ0.6m以上、厚さ0.4mの花崗岩角礫で構成される。石室内には巨礫が落ち込んでおり、長さ1.6m以上、幅1.7m、厚さ0.7mの花崗岩角礫であり、その大きさから天井石と考えられる。腰石は奥壁を挟むように両側壁が配置され、ほぼ垂直に立てられている。また平面的には直角に接するのではなく、内角は僅かに鋭角となる。つまりいずれの側壁も開口側に向かってややすぼまる傾向がある。正確な計測値でないが、奥壁から約１mの位置で幅約1.8mとなる。また天井石の幅は石室奥側の幅よりも狭く、腰石が垂直であることから、石室上半部は持ち送りをとると考えられる。石室の全長は不確実であるが、左側壁は奥壁から3mの位置にもう１つの腰石が露出しており、ボーリングステッキなどによる観察から同規模の腰石がもう1個づつ配置されているようだ。

以上の観察結果から石室の規模は、奥壁側で幅2.1m、玄門側で幅1.6m、長さ約3.2mと予測される。

石室内の高さは上半部分が崩落しているために明らかでないが、現状の腰石が高さ1.1mあり、さらに徐々に内傾する持ち送りが予測されることから、高さは2m以上になると見られる。羨道や墓道の規模は完全に埋没しているために不明であるが、両者をあわせて墳端までの8m前後の規模とみられる。

（2）**墳丘**（Fig.68）

墳丘は板付八幡本殿の背後にある石室を中心に低平な起伏として残存している。発掘調査と並行して周辺地形の測量調査を行った。その結果著しく改変されてはいるものの一部に墳丘斜面を反映している部分があり、ある程度の墳丘復元も可能と考えた。以下ではその後の分布調査成果も合わせて現

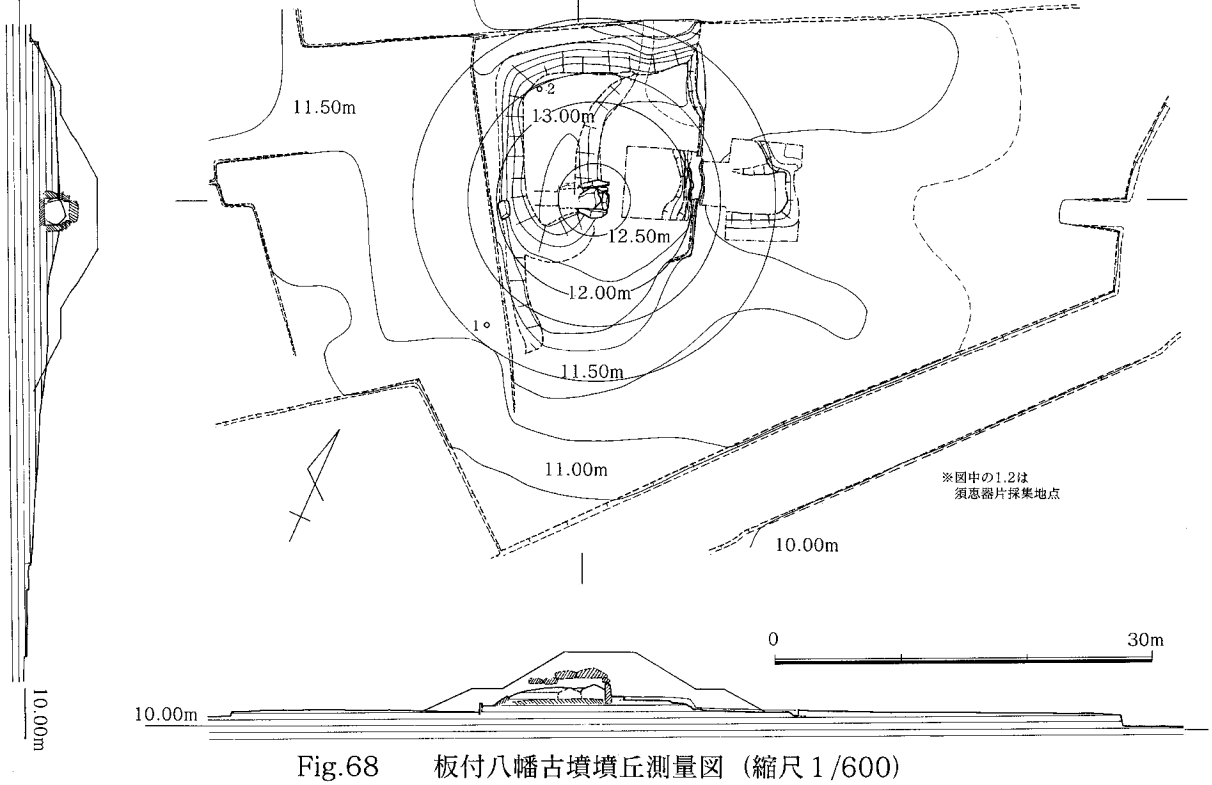


Fig.68　　板付八幡古墳墳丘測量図（縮尺１/600）

時点で推定される墳丘について示したい。現在古墳は周囲からは１～２mほどの高まりとして見られるが、神社境内の保存樹木などに覆われ、それほど顕著な高まりとは認めにくい。さらに詳細に見るなら、周囲の拝殿や境内広場付近の標高11～11.5m付近を平坦面とし、本殿の建つ標高12.3m付近の平坦面、そして露出した石室の上面にそろった標高13.0m付近と、三面の段状地形となっている。墳丘の保存状況は悪いが、石室北側10m付近から高さ約1.5mの斜面が残り、石室を中心に円丘をなすことを認めることができる。この斜面は本来の墳丘形状を残している可能性がある。なお、この斜面下端は標高約11.2mであり、これを墳端と仮定して円を描くと石室を中心とする起伏のほぼ全体を取り込むことができる。その径はおよそ28～30mである。調査などを通じて墳端を把握した上での数値ではないが、これが墳丘の外縁とみることができよう。周辺地形で見ると板付南台地の頂部は標高約12mであり、東西に伸びる丘陵がこの古墳との間で途切れ、鞍部が形成されている。その鞍部の開始は標高11.25mから11.5mの間にある。また、この鞍部に向かって墳丘北側の道路側から円丘に沿って馬蹄形状の落ち込みの痕跡がある。古墳の地山整形は南台地の丘陵尾を切断して行われてと考えられる。こうした点からも墳丘が比較的大きくこの程度の規模であったことが了承される。段築については明らかでないが、崩落露出する石室石材の頂部は標高約13.7mであり、復元される石室天井高は標高14m以上にあると予測された。天井石の厚さを加味し復元される墳頂部は標高16m付近と推定できる。この規模で北側墳丘斜面から直接墳頂に達するとは考え難く、一般的な二段築成と予想されよう。段築平坦面は露出した石室の上面にそろった標高13.0m付近がもっとも考えやすい。

周溝は明らかでないが、先の馬蹄形状の落ち込みが周溝の痕跡であると考えられる。なお、50次調査の範囲は石室の東側1mから15mの範囲を覆っていることになる。当初周溝の検出も予測していたが、この範囲内においては痕跡も認められなかった。最深で標高11mに達していることから、すでに削平されたものか、あるいはこの部分では周溝を設けられなかったと考えられる。この周溝の未検出という事実と墳丘斜面の北側遺存部が北東側へ直線的にのびる点から、本古墳に対して前方後円墳の可能性を指摘する向きもあるが、この点については確認調査などを通じて今後慎重に検討したい。

（1）出土遺物（Fig.68・69）

出土遺物については発掘調査を行っていないので不明である。調査中に地元の方から、かつて石室内を掘った者がいて、鉄刀を掘り出したことがあったという。なお、発掘調査中から最近まで幾度も踏査をおこなった。これまで古墳に関連するとみられる採集資料は２点だけである。まず調査期間中に石室北側8m付近で須恵器甕の肩部破片を表面採集した（Fig.69-2）。径が大きく、厚めで内面青海波、外面格子叩きである。次に調査後の踏査によって、石室前面左側の墳裾付近の削平部から須恵器坏蓋（身）の破片を採集した（Fig.69-1）。口縁部を欠くが外面頂部に荒い回転ヘラ削りがある。口縁径は推定で12.5cm前後と復元される。いずれも小破片であり、おおよそ6世紀後半～7世紀前半の間に位置づけられるものである。

以上、詳細を語れるほどの資料ではないが、調査を通じて墳丘下にこの時期の遺物が出土しなかったことから考えて、古墳にかかわる資料の可能性があるといえよう。

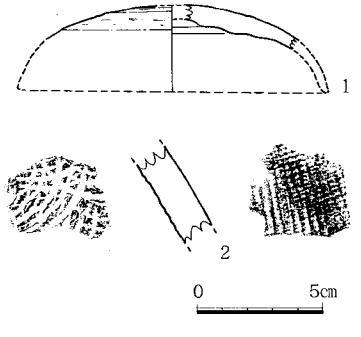


Fig.69　板付八幡古墳墳丘採集遺物（縮尺1/3）

（4）小結

板付八幡古墳は、洪積世の低丘陵である板付南台地の南端に立地し、花崗岩巨礫を主に一部粗面玄武岩によって構築された横穴式石室墳である。周辺地域では月隈丘陵や諸岡

丘陵などに群集墳として分布する一般的な横穴式石室墳に対して、この立地と石室石材の特異性がこの古墳を特長つけている。この古墳の性格や評価を考慮する上で若干の検討を加えたい。

1.**墳丘規模と分布について**：本古墳は直径28～30mで、二段築成の墳丘が推定された。葺石や埴輪などの外表施設は無く、丘陵先端を掘割りし主に盛土で構築されていると考えられる。福岡平野内の洪積世低丘陵上に立地し、単独墳をなしている。福岡平野において６世紀以降の横穴式石室をもち、円丘部が30m前後となる同規模墳の例は、前方後円墳では東光寺剣塚古墳、日拝塚古墳、下白水大塚古墳などがある。これらは墳長50～80mの規模で福岡平野内では最大規模墳である。この前方後円墳はいずれも低丘陵上に単独墳に近い状況で分布し、6世紀前葉から後葉の構築と考えられている。円墳では赤井手古墳、穴観音古墳、今里不動古墳などがある。何れも径30m前後の円墳である。赤井手古墳は丘陵先端に立地し、石室規模は板付八幡古墳と近似する。６世紀初頭の築造とされる。後者の円墳は平野外縁の谷あいの丘陵斜面に構築され、周囲に群集墳が展開する。明確な構築時期は不明であるが、何れも7世紀代の構築と考えられている。

2.**石室について**：本古墳の構築石材は花崗岩を主とし、奥壁に粗面玄武岩を僅かに用いている。花崗岩は周辺の那珂川・御笠川流域に多く産出し、周辺の古墳横穴式石室石材としては一般的かつ普遍的である。また粗面玄武岩は博多湾内の能古島等に産出し、福岡平野では前期古墳である卯内尺古墳、博多1号墳、老司古墳などの主石室材となり、後期古墳でも東光寺剣塚古墳に一部利用が認められる。しかし小規模墳や群集墳での使用は認められていない。古墳時代後期段階で限られた利用しかない石材が本古墳で確認されたことは注意されて良い。

石室は破壊され、表面観察のために厳密ではないが、平面プランは奥壁側に広い羽子板形を呈するようである。単室か、複室であるかは不明であるが、後室(玄室)が幅約2.1m(奥壁側)、長さ約3.2mと本地域では大型の部類に含まれる。

3.**伴出遺物について**：副葬品は石室内から鉄刀の出土が伝えられているだけである。関連遺物としては墳丘や周辺から採集した２点の須恵器片がある。いずれも小破片であり、おおよそ6世紀後半～7世紀前半の間に位置付けられ、本古墳の経営時期の一部を示しているとみられる。

4.**福岡平野における位置付けについて**：板付八幡古墳について現時点で明らかにできることは少ない。しかし、以上のような石室や墳丘の構造や規模、分布状況などからみて福岡平野内においては傑出した古墳のひとつであると考えられる。石室材への粗面玄武岩の使用は、累代の首長墓系譜や東光寺剣塚古墳との近縁性を示していることも考えられる。現時点では東光寺剣塚古墳に後出し、穴観音古墳、今里不動古墳に先行する福岡平野を代表する首長墓のひとつにあげられる可能性を提示しておきたい。

5．近世の遺構と遺物

（1）遺構と遺物（Fig.70・71）

掘立柱建物SB01

旧拝殿の直下に検出した。未掘部分もあり全体は不明である。東西3間、南北3間で主軸はN-68°-Eである。東西の桁行540cm、南北の梁行360cmを測る。柱穴の下部には柱の腐敗後の空洞が認められる例もあった。小量の瓦片と糸切り底を有する土師器皿が出土した。

掘立柱建物SB02

SB01の北側桁行の柱穴を共有する東西3間、南北3間であり、主軸はN-66°-Eである。東西の桁行550cm、南北の梁行320cmを測る、変則の総柱建物である。SB02は切り合いからSB01に先行する建物である。なおSB02とSB03の間に主軸を共通する柱列を検出した。この部分は両者の検出面に段差が

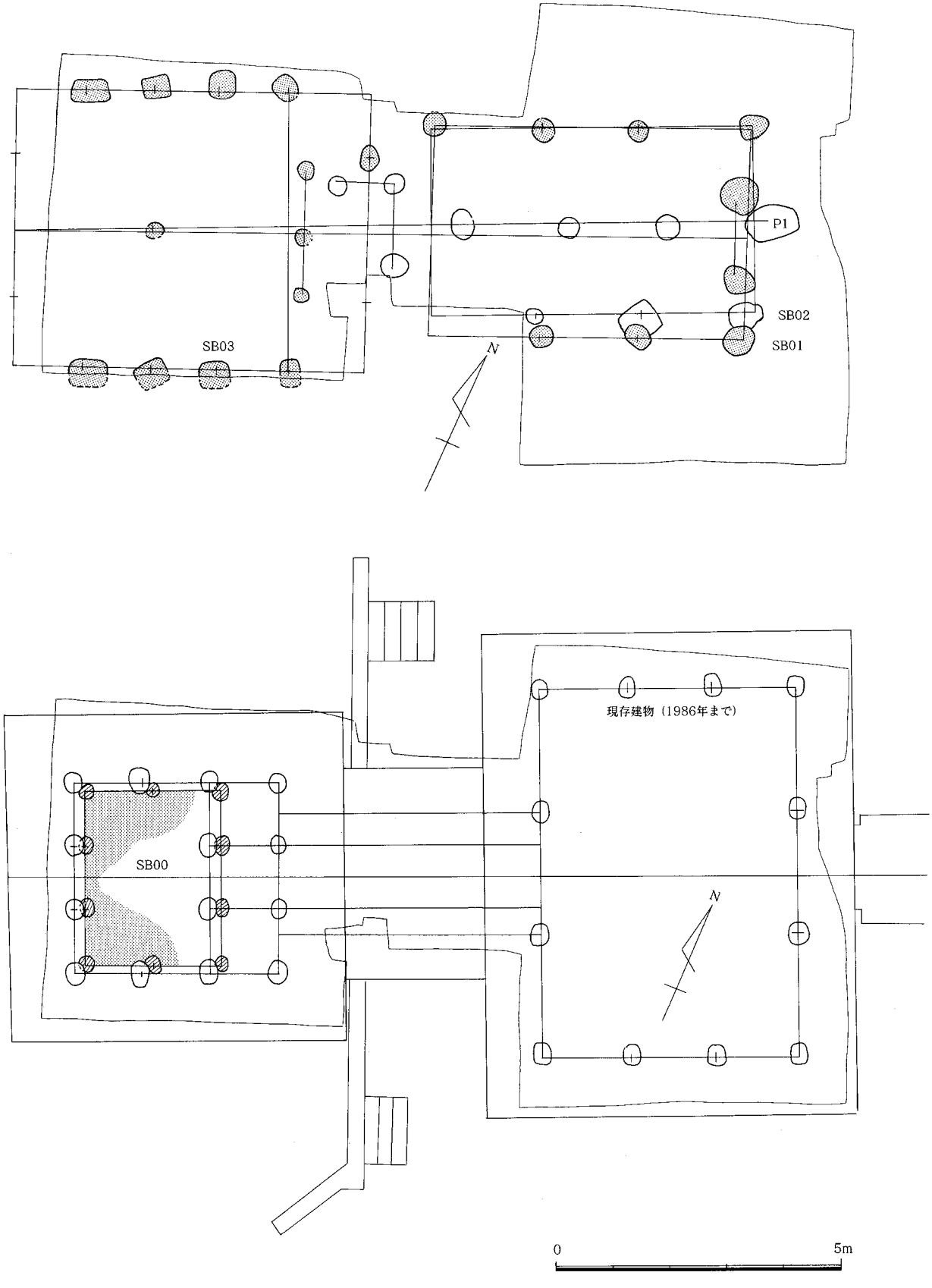


Fig.70　建物SB01～03、板付八幡神社旧社殿平面図（縮尺1/100）

約0.5mあり、両者を連絡する渡り通路状の施設（階段を含む）と想定される。棟持柱かと思われる柱穴（P-l）掘り方からは糸切り底を有する土師器坏、皿類と焼土、炭化物が多量に出土した。何らかの祭祀に関わる遺物と考えられる。

P1から土師器皿(1～43)が出土した。出土した土師皿は法量で以下の3群に区分される。小型のA群（1～23）は、底部径5～6.5cm、器高1.5～2.5cm、口縁径7.5～9cmを測る。中型のB群(24～38)は、底部径7～8.5cm、器高2.0～3.5cm、口縁径10cm以上を測る。大型のC群(39～43)は、底部径9cm以上、口縁径10cm以上を測る。何れも精緻な粘土を使用し、焼成はよい。

礎石建物SB00

調査前まで現存していた神社本殿建物の基壇と礎石の除去を始めたところ、この基壇の下に、やや規模の小さな礎石を持つ基壇が埋め込まれていることが分かった。この遺構については正式な調査は行えず、略測と写真による記録にとどまった。この埋没していた基壇は現存基壇と同様の構造でありながら、桁行300cm、梁行240cmとやや小さな規模となる。この基壇の底面には焼土・炭化物が多量に分布する面があり（Fig､70下の網かけ部)、基壇構築の直前に火床が形成される状況があったと考えられる。またその上面からは糸切り底の土師器皿や国産陶磁器などが一括出土した。

出土した土師器皿（44～62）は法量で以下の４群に区分される。最小のA群（44～51）が最も多く、底部径5cm以下、器高2cm以下、口縁径7cm以下である。小型のB群(52～54)は、小破片ばかりであるが底部径5～6.5cmを測る。中型のC群(55～59)は、底部径7～8.5cm、口縁径10cm以上を測る。大型のD群(60～62)は、資料数が少ないものの底部径9cm以上を測る。国産陶磁器には伊万里系青花小椀(63)や唐津系椀(64)がある。

なお、1987年まで現存していた本殿は、東西2間、南北3間の庇付きで桁行320cm、梁行240cmを測る。

掘立柱建物SB03

礎石建物SB00基壇と20cm程度の造成土を除去すると鳥栖ローム上部の地山面が現れ、この部分で掘立柱建物SB03を検出した。未掘部分もあるが、4間×4間で主軸はN-66°-Eである。桁行490cm、梁行480cmを測る。柱穴内には石や瓦片が根じめとして設置されている。掘り方内の埋土は汚れており､掘り方主軸と根締め瓦主軸とにややずれがあり､掘り方内での柱建替えが予測された。SB03の主軸はSB01とほぼ一致している。

そのほか

その他の柱穴にも土師器皿を含むものが多く、以上の建物と同様の時期と推定される。これらの遺構は近世の所産である。

（2）その他の遺物

1.土器類（Fig.71）

65は柱穴P25出土の土師器皿であり、底部径5.2cm、器高1.5cm、口縁径約7.5cmを測る。66は礎石建物SB00基壇付近採集の土師器皿であり、底部径5.5cm、器高1.6cm、口縁径約6.8cmを測る。この2点は何れも緻密な胎土であり、SB02土師器皿A群に類似する。67が瓦質火鉢の底部片である。灰白色で焼成不良である。底部径18.5cmであり、凹線二条により突帯が削りだされている。

2.青銅製品（Fig.72）

青銅製金具1点と銅銭12点が本殿部直下の弥生時代柱穴P-47直上に折り重なるように集中出土した。これは現存建物もしくは礎石建物SB00に関連する可能性が強いが､明確な埋納遺構などを検出することはできなかった。1は不明の金具であり、厚さ0.1cm以下、幅約1.1cmの銅板で幅8cm、長さ

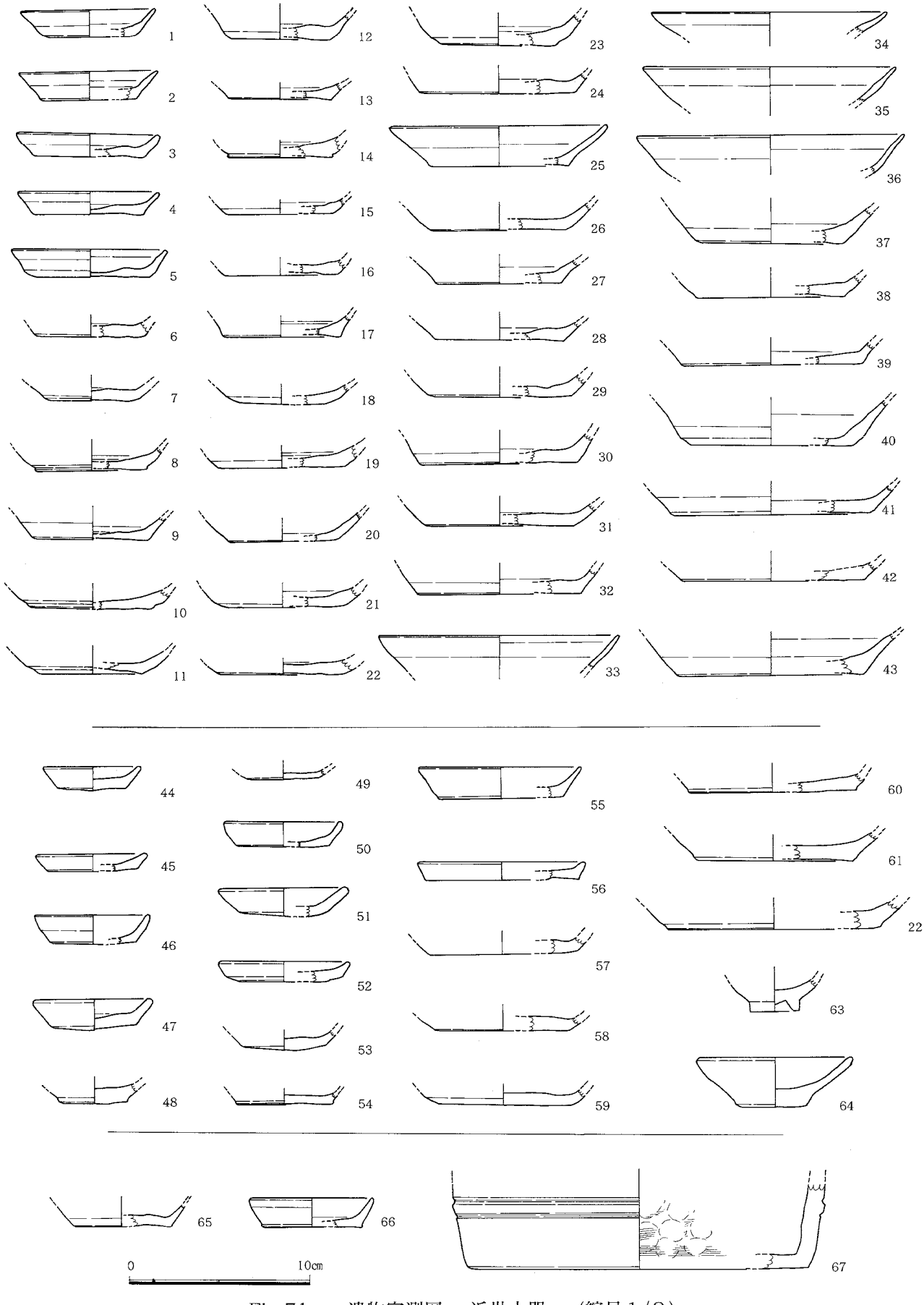


Fig.71　遺物実測図 －近世土器－（縮尺1/3）

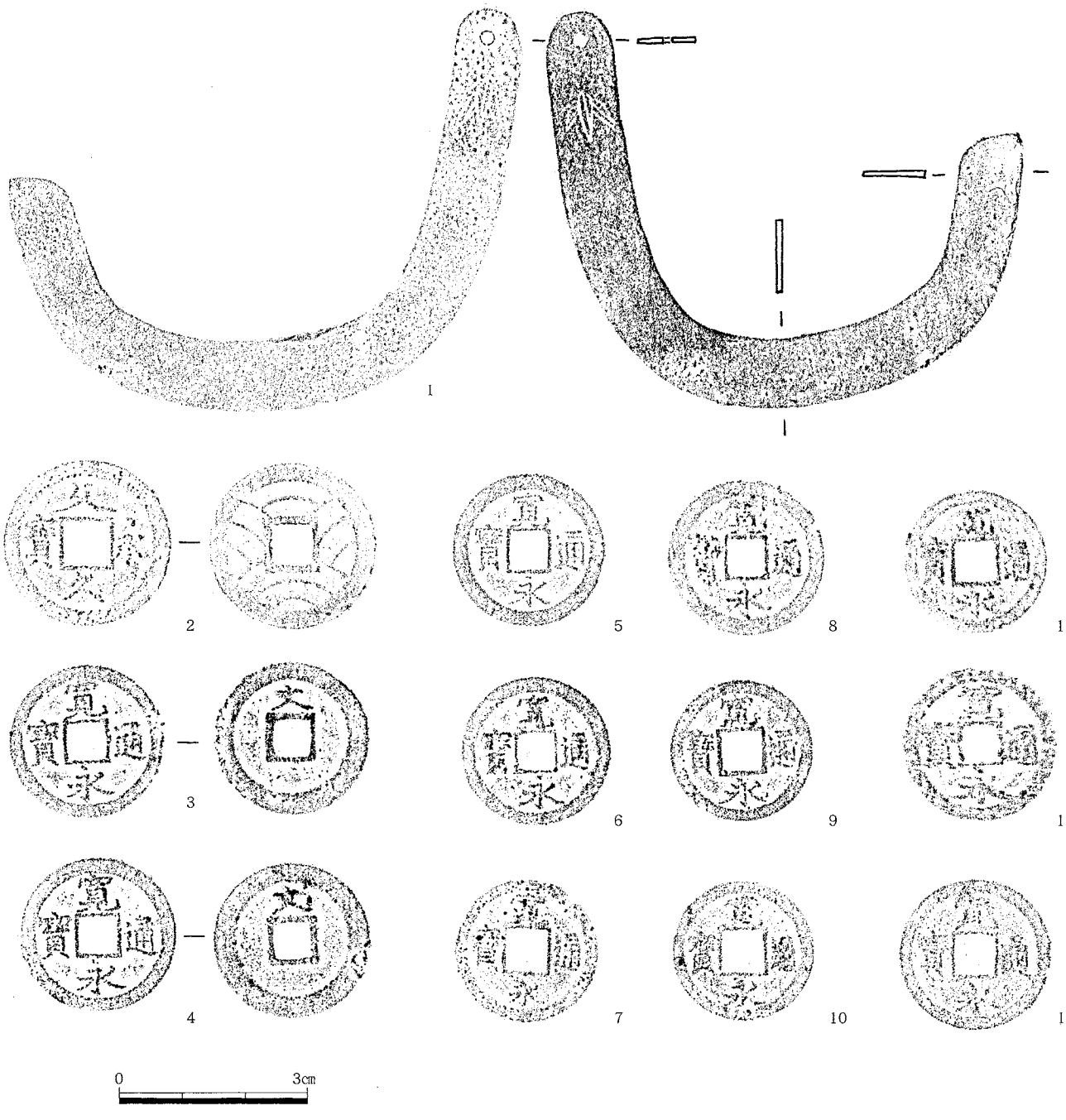


Fig.72　遺物実測図 －近世青銅製品－（縮尺1/1）

5cmの「し」字形に形成されている。長端は丸みを帯び径0.2cmの穿孔がある。その直下の両面に笹の刻印がある。銅銭(2～13)は錆を除去すると全て判読可能となった。2は文久永宝、3～13は寛永通宝である。文久永宝は「寶」字の真文銭であり1863（文久3）年初鋳である。寛永通宝はすべていわゆる新寛永であり、そのうち3,4は裏面に「文」字の入る「文銭」であり、1668（寛文8）年～1683（天和3）年鋳造、他は1695(元禄8)年以降の鋳造と考えられる。

（3）小結

近世の遺構は、掘立柱建物３棟と礎石建物1棟である。これらは本殿部、拝殿部ともに現存建物と主軸や配置が共通し、両者を繋ぐ通路状の柱穴も検出した。こうした点から、これらは現存した神社

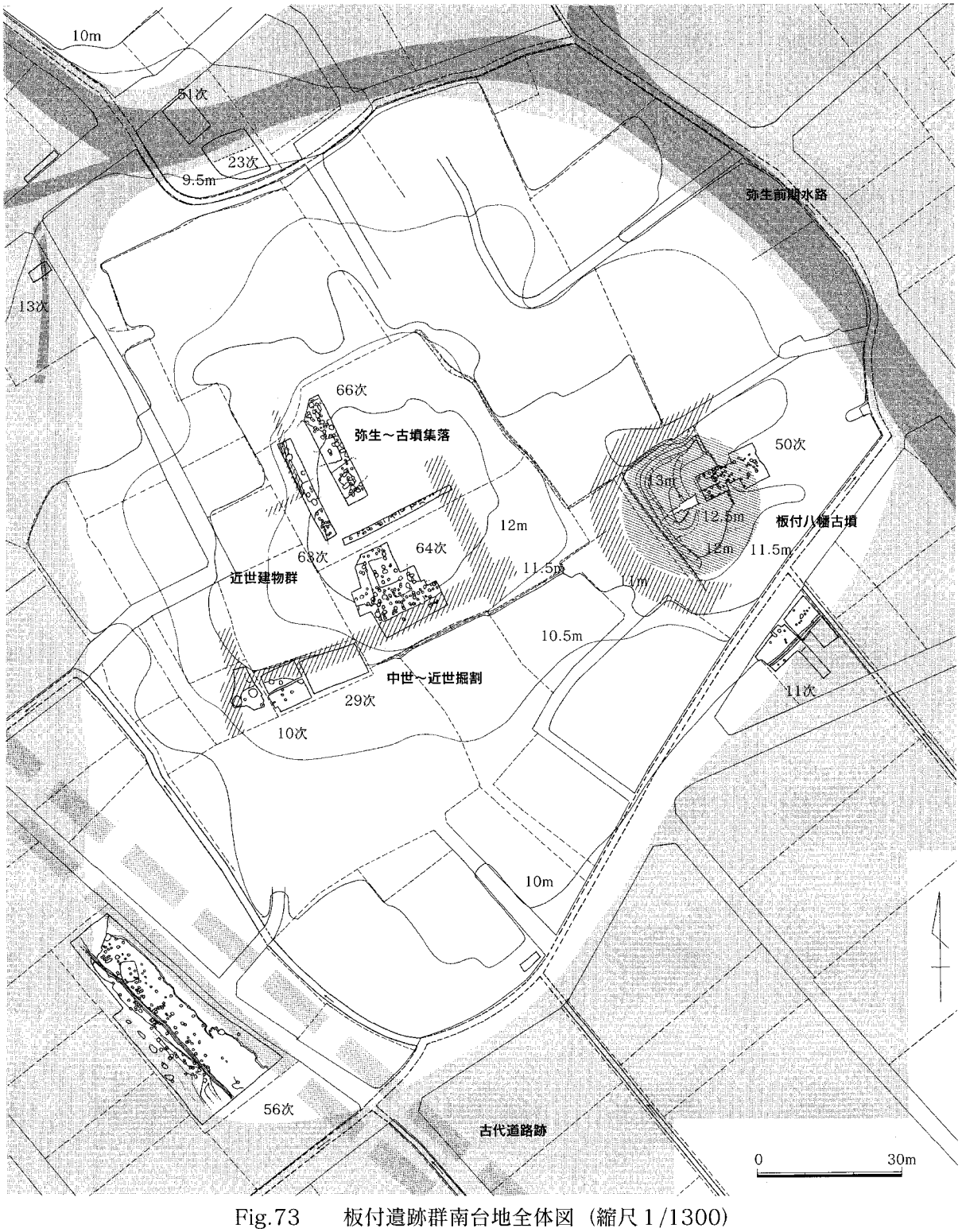


Fig.73　　板付遺跡群南台地全体図（縮尺1/1300）

に先行する神社建物跡であると考えられた。その変遷や時期比定、構造の変化は次節で述べたい。

6．まとめ

50次調査は100㎡に満たない調査面積であったが、弥生、古墳、近世とおおきく三時期の遺構群があった。以下、その成果を時期別にまとめると次のようになる。

（1）弥生時代前期末から同中期中葉の土坑・柱穴

（2）古墳時代中期の竪穴式住居と同後期の古墳の築造

（3）近世の神社に関係する遺構群（切り合いや出土遺物から次の三期に区分される。）

第Ⅰ期　SB02（拝殿）、SB03（本殿）

第Ⅱ期　SB01（拝殿）、SB00（本殿下部基壇）

第Ⅲ期　現存した建物群

このうち弥生、古墳時代については各小結でふれたので、ここでは（3）の神社施設についてふれる。

1986年まで現存していた本殿から外された棟札が社務所に保管されており、天明元（1781）年建立の墨書記載がある。寛政7（1795）年貝原益軒により編集された『筑前国続風土記』巻17、那珂郡板附村の項に、八幡宮は「鏡座の始詳ならず。此社いにしえは枝郷八幡原（現在のJR南福岡駅前周辺 筆者注）にありしを、近世今の所に遷し祭れりとそ。」「神殿方一間半、拝殿二間三間、石鳥居一基」とある。これは現存していた規模（第Ⅲ期）にほぼ一致する。神殿の方一間半は前面の庇部分も含めた規模であり、石鳥居は参道中にある享保5（1720）年銘のものであろう。

第Ⅰ、Ⅱ期の遺構の時期はきめ手に欠けるが、SB02のP-1柱穴内から出土した土器群は17世紀代以前、SB00基底面出土土師器等は18世紀代を主とする。

本神社に関する最も古い記年銘を示す資料には現在社務所に保管されている瓦質の灯籠がある。これには、「九州筑前国那珂郡内板附村、八幡宮、芳（慶か）長15年卯月　大工　甘木九良右衛門　寄進也」と刻書がある。甘木九良右衛門については明らかでないが、江戸初期の大工としての寄進物であり、神社創建と関連し、慶長15（1610）年頃に本社(Ⅰ期)が建設された可能性は高いと考えられる。

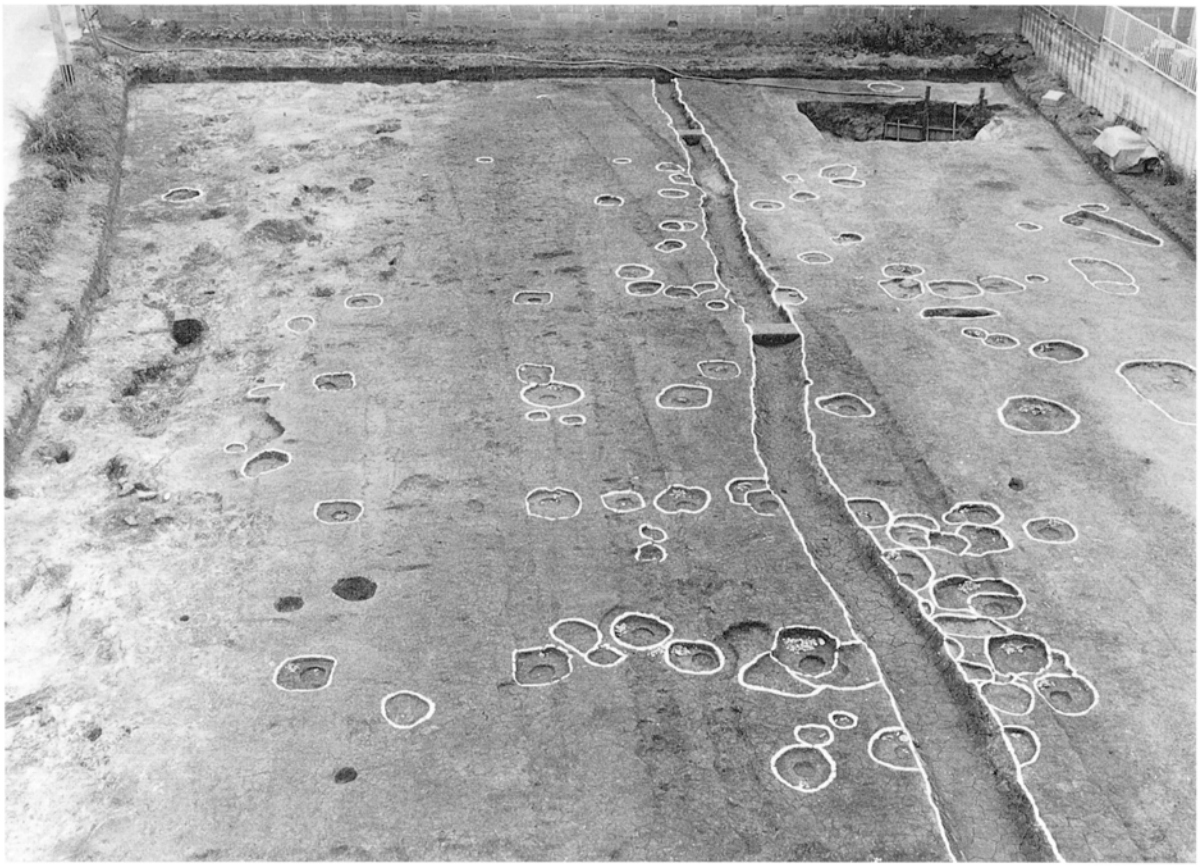
以上の断片的な資料から想定するならば、第Ⅰ期は17世紀初頭～17世紀後半、第Ⅱ期は17世紀後半～18世紀後半のそれぞれの間に存在し、その後、第Ⅲ期とした調査前に解体された社殿が1781年～1987年の約200年間鎮座していたと考えられる。社殿の形態や規模はⅠ・Ⅱ期に本殿建物が大きく、拝殿が小規模で主軸方向に長い形態をとり、Ⅲ期には掘立柱から礎石建物になると共に本殿が小さくなり、合わせて拝殿が大型化、横に長い形態へと変化する。これは神社内での祭式の変化や参加氏子衆の動向と無関係とは考え難い。またこうした形態の変化はⅡ期の拝殿建替えの段階に既に発現していることも見逃せない。近世の八幡社経営並びに地域信仰研究と合わせて検討が必要であろう。

さて、板付南台地ではこれまでに10箇所ほどの調査が行われている（Fig.73）。調査地点が台地中央に偏っているために、なお台地全体の遺構分布については不明確である。現時点で判断できる様相を示す。弥生時代前期後半に一部台地縁辺での集落形成や墓地の経営があり(10・11次)、同中期後葉に台地全体に集落が拡大する。古墳時代前～中期までは集落が継続し、同後期には台地南東端に大型古墳である板付八幡古墳が築造された。古墳時代後期から古代まで集落は不明瞭となるが、古代には南台地西側を削平し大宰府からの官道が造成される(56次)。中世後期には再び集落が展開する。台地全体に少量の遺物が分布し、井戸(23次)、溝(10・63次)など遺構が確認できる。近世には台地中央に大規模な溝(掘割）と瓦葺建物が設けられる(10·63·64次)。こうした掘割と共通する直線的な地割は、周囲の条里制地割と異なる方向を取り、現在も南台地中央～北半部に断続的に残されている。南台地では10次付近が通称「オイ屋敷」と呼称されている事や、黒田藩の「馬屋」伝説があることに注意され、早くから中・近世の居館跡が推定されていた。近年各調査の近世遺構について、青柳種信編集による『筑前国続風土記拾遺』に記述される黒田藩の「行館」跡の可能性が指摘されている。「行館」は寛永2(1625)年～正徳6(1716)年と享保7(1722)年～明和3(1766)年の二期に板付村に建設されている。この「行館」の運用時期は板付八幡社のⅠ・Ⅱ期に対応し、神社建物や参道などは掘割などの地割と近似した方位を取る。両者に何らかの関連も予測される。今後の調査・検討の課題としたい。

図　　版

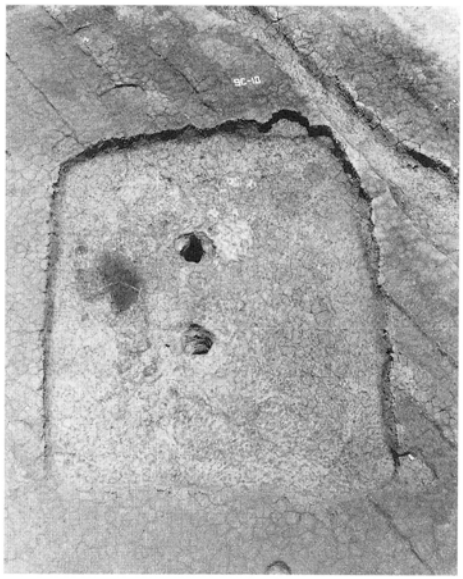
板付南台地現況（第56次調査区から）

PL.1

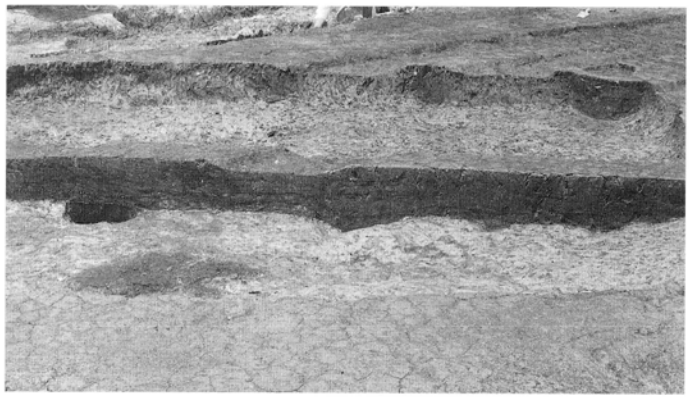


(1) 調査区南側遺構検出状況（北から）

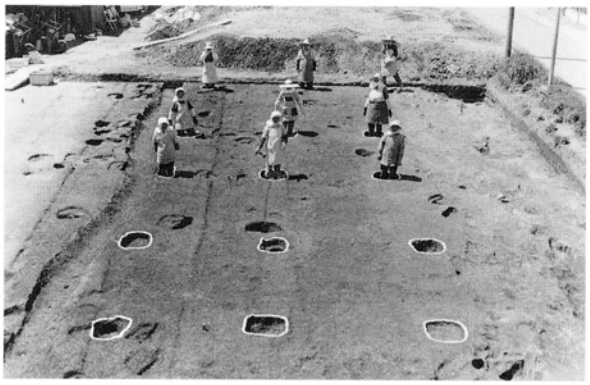
(2) 調査区北側遺構検出状況（南から）



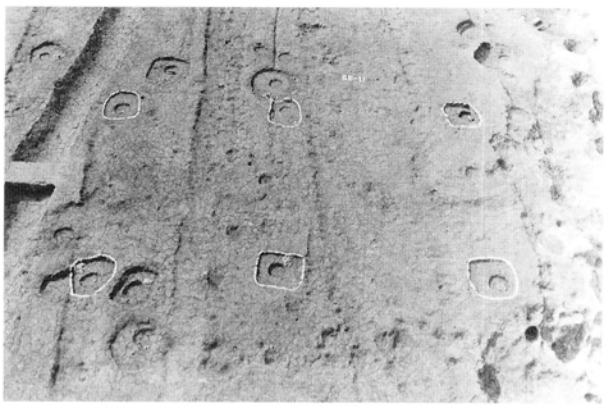
(1) 第10号竪穴住居跡完掘状況



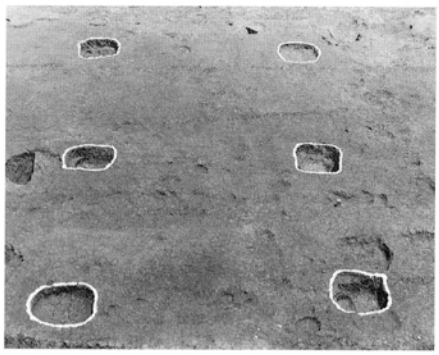
(2) 第10号竪穴住居跡埋土堆積状況



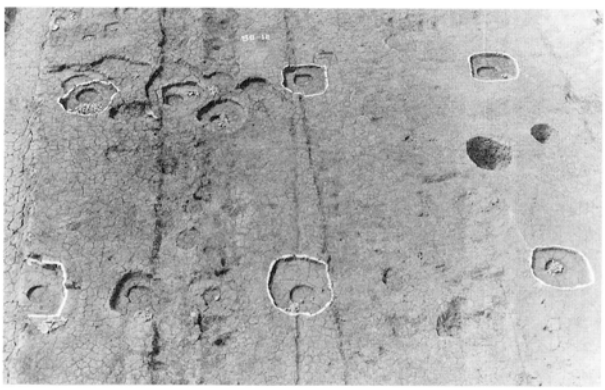
(3) 第11～13号掘立柱建物配置状況



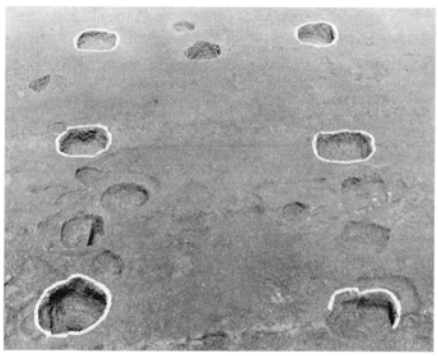
(4) 第11号掘立柱建物検出状況（南から）



(5) 第11号掘立柱建物完掘状況

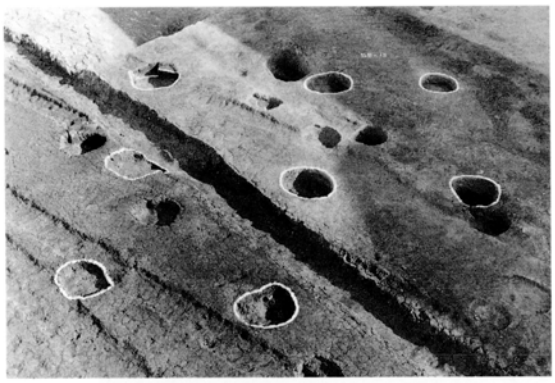


(6) 第12号掘立柱建物検出状況



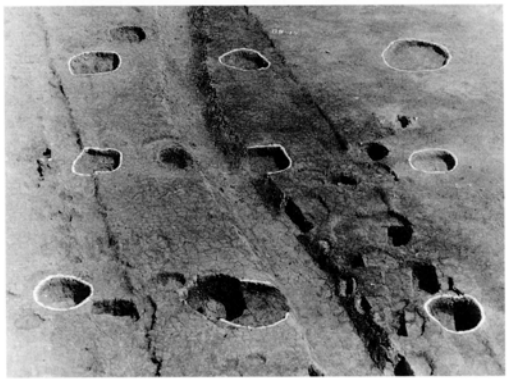
(7) 第12号掘立柱建物完掘状況（西から）

(1) 第14号掘立柱建物完掘状況



(2) 第15号掘立柱建物完掘状況（北から）

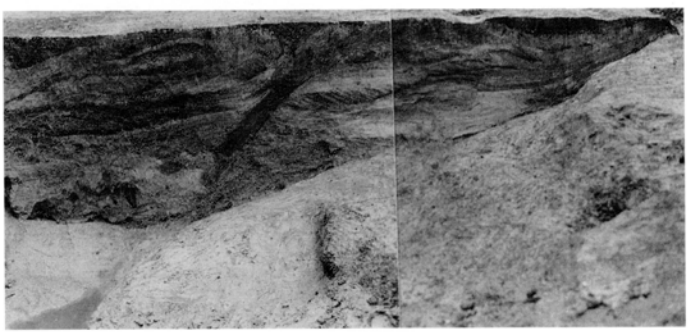
(4) 第8号土坑遺物出土状況



(3) 第17号掘立柱建物完掘状況

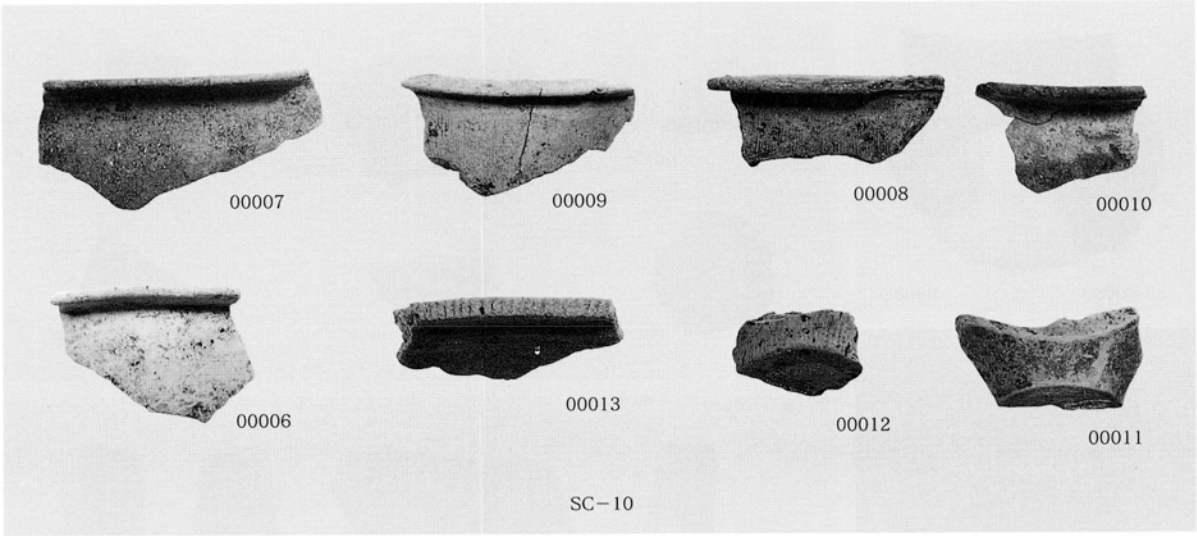
(5) 第9号土坑遺物出土状況

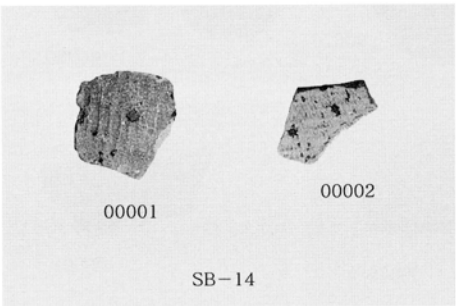
(6) 第6号溝検出状況（北から）

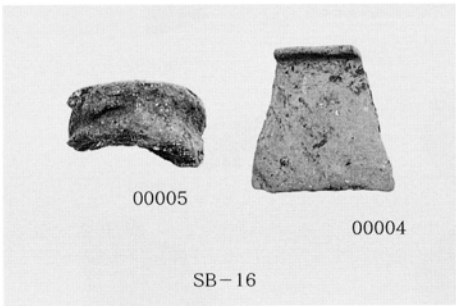


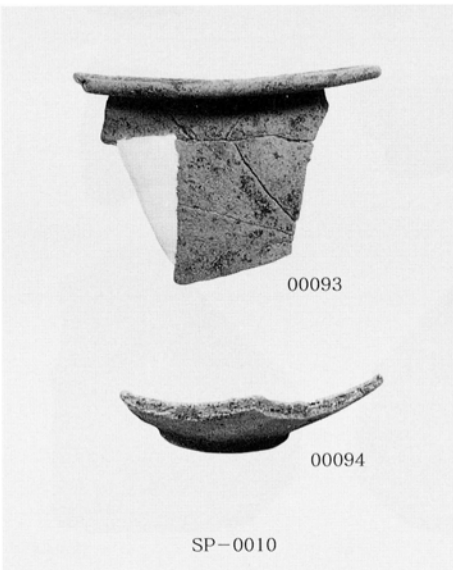
(7) 第6号溝上層堆積状況

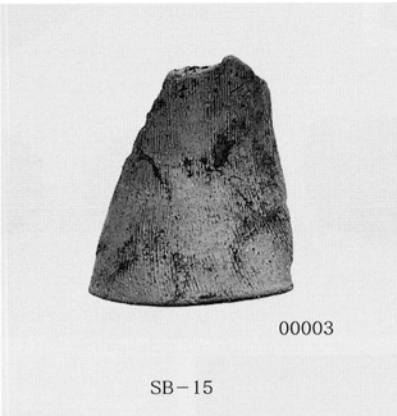
(8) 第20号溝上層堆積状況（東から）

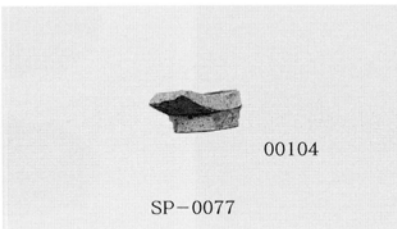

00007
00009
00008
00010
00006
00013
00012
00011
SC−10

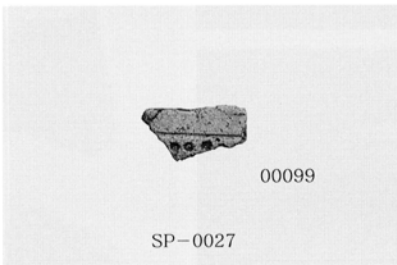

00001
00002
SB−14

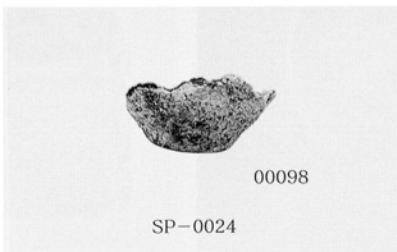

00005
00004
SB−16

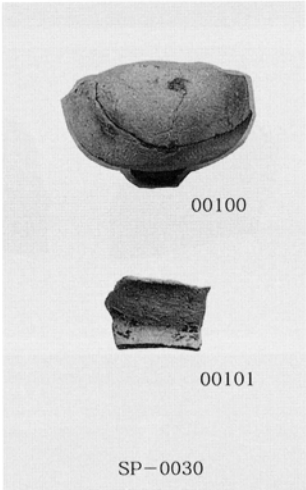

00093
00094
SP−0010

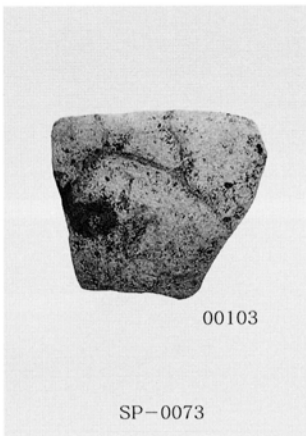

00003
SB−15

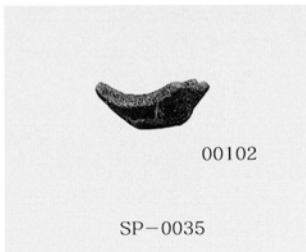

00104
SP−0077


00099
SP−0027


00098
SP−0024

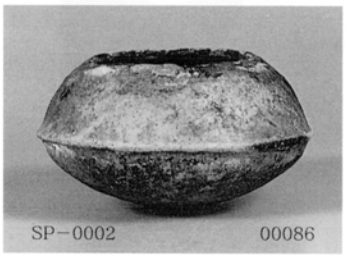

00100
00101
SP−0030

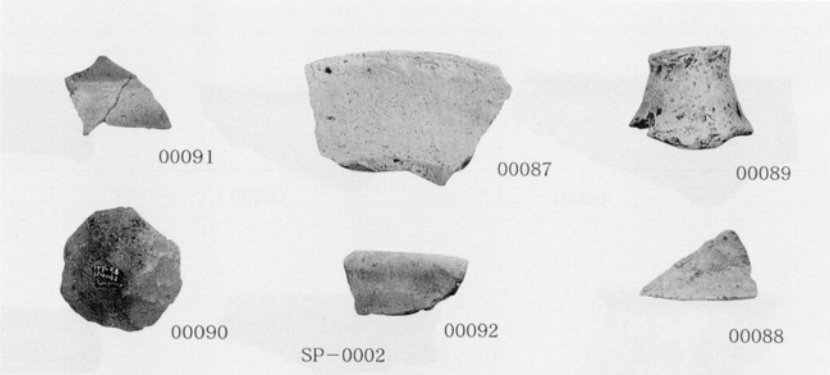

00103
SP−0073

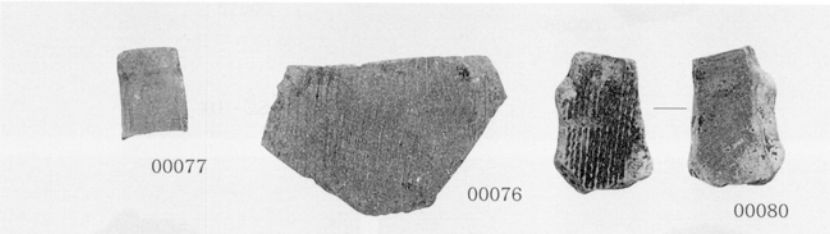

00102
SP−0035

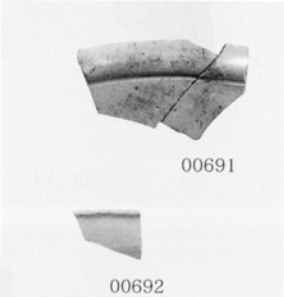
各遺構出土遺物（1）

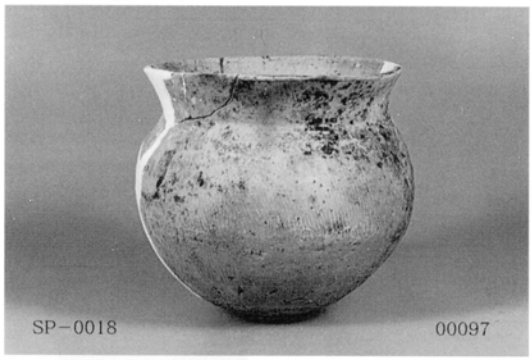
PL.5

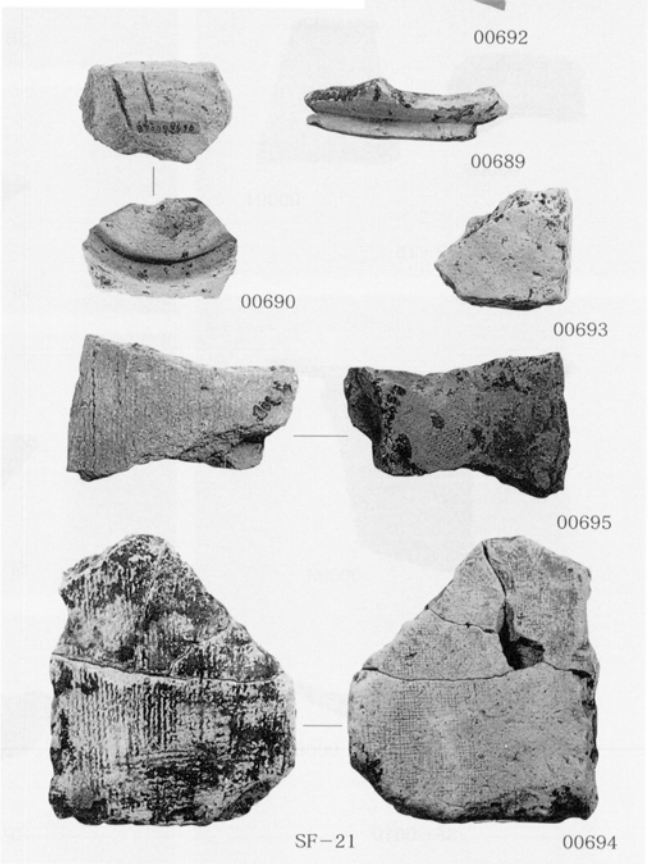




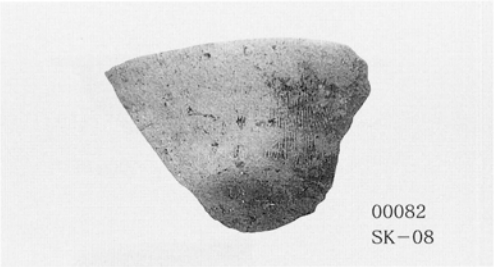


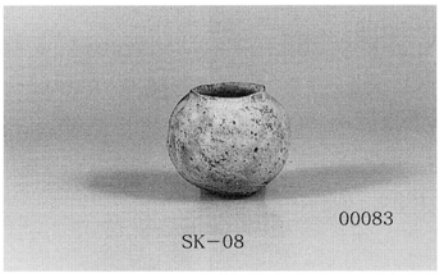




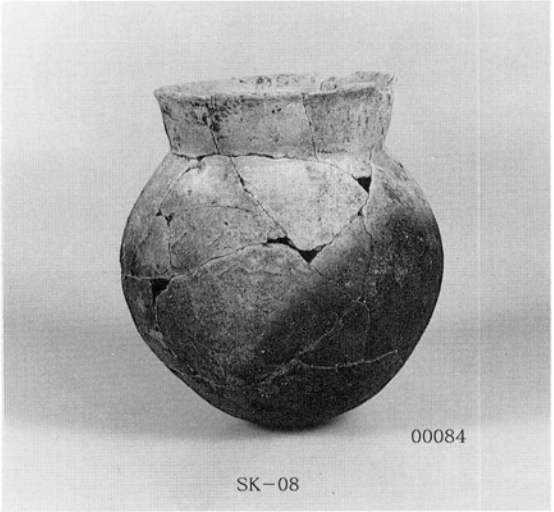


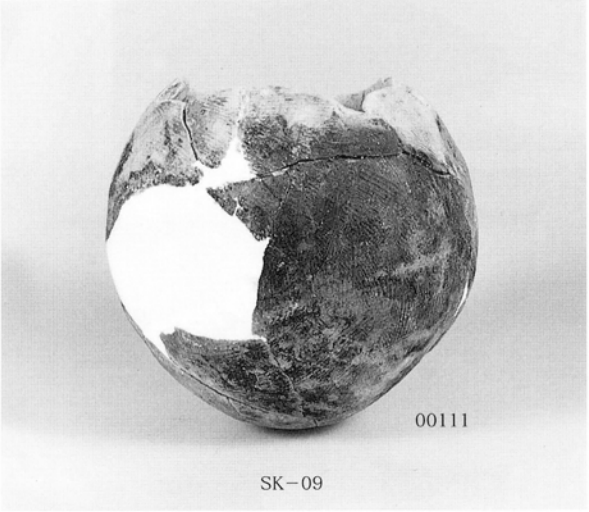
各遺構出土遺物（2）

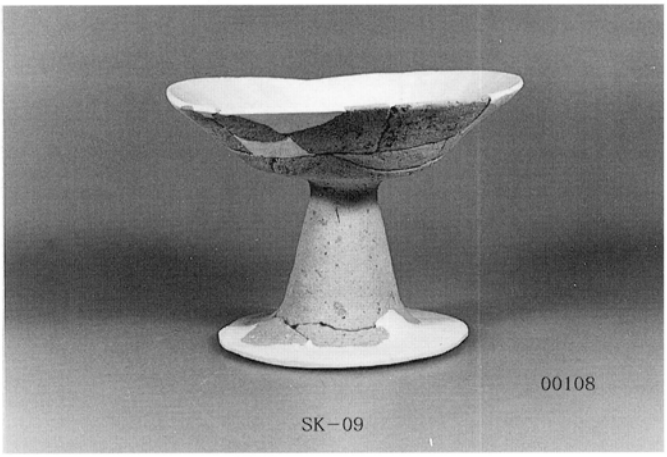

00082
SK−08

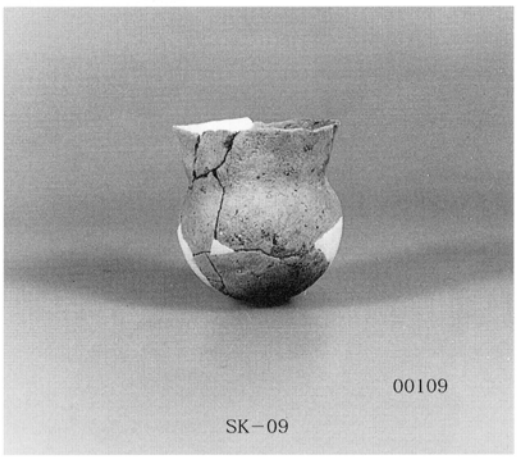

00083
SK−08

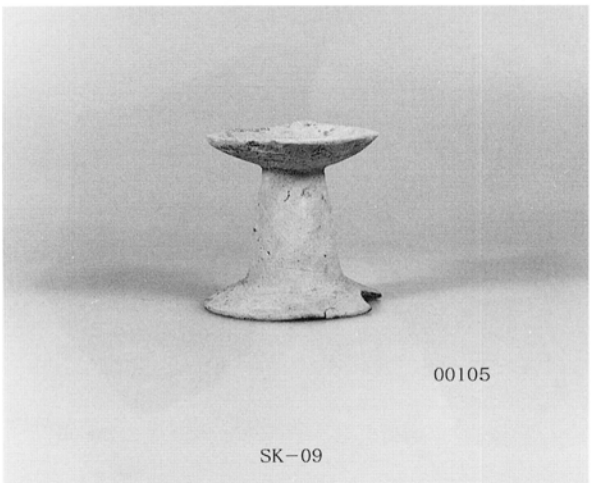
00081
SK−02

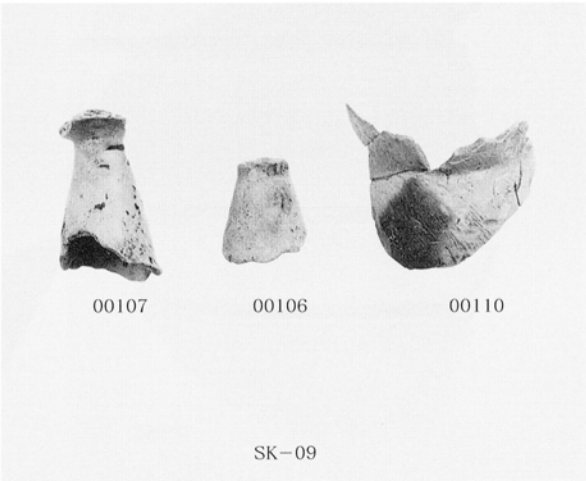

00084
SK−08


00111
SK−09

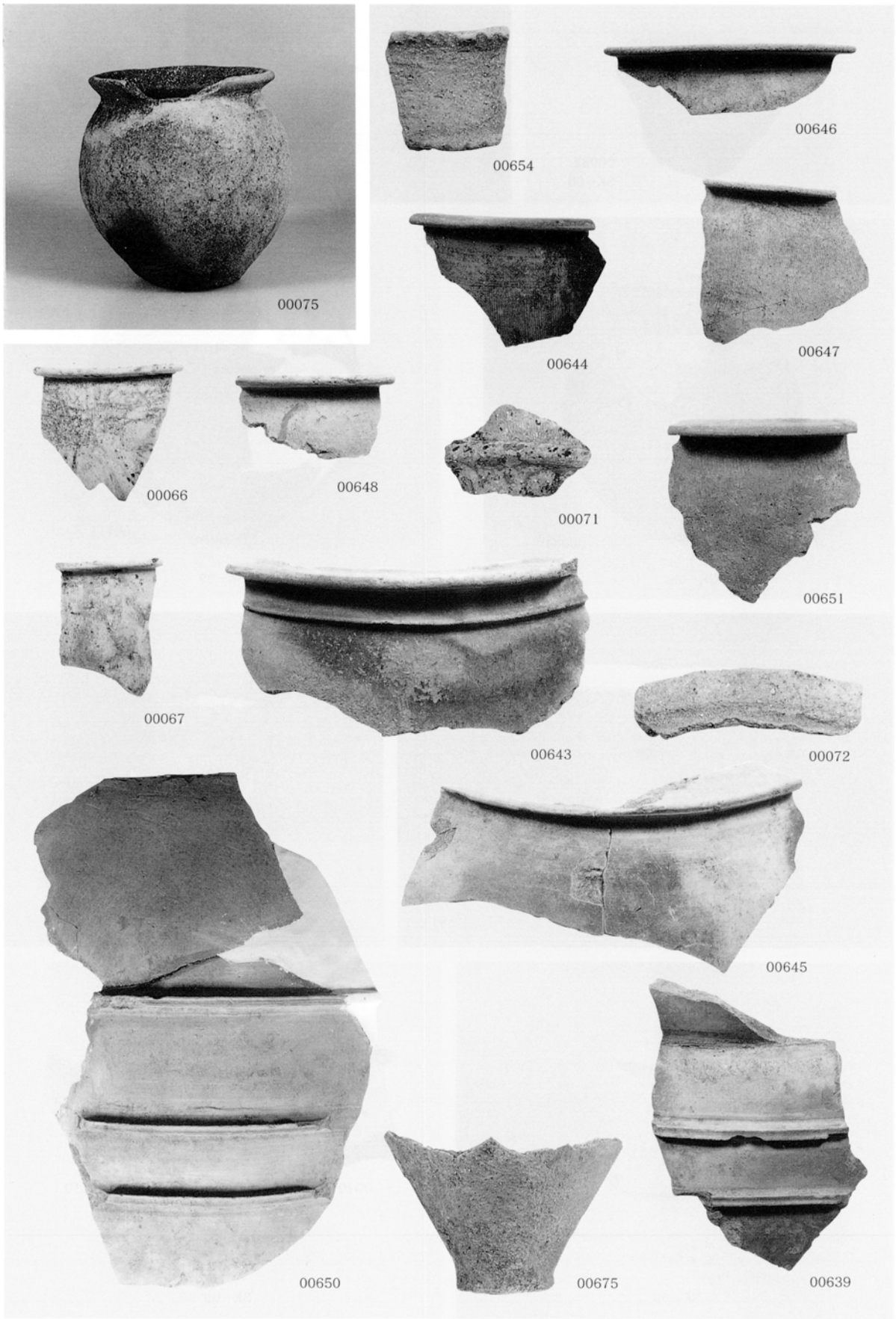

00108
SK−09


00109
SK−09

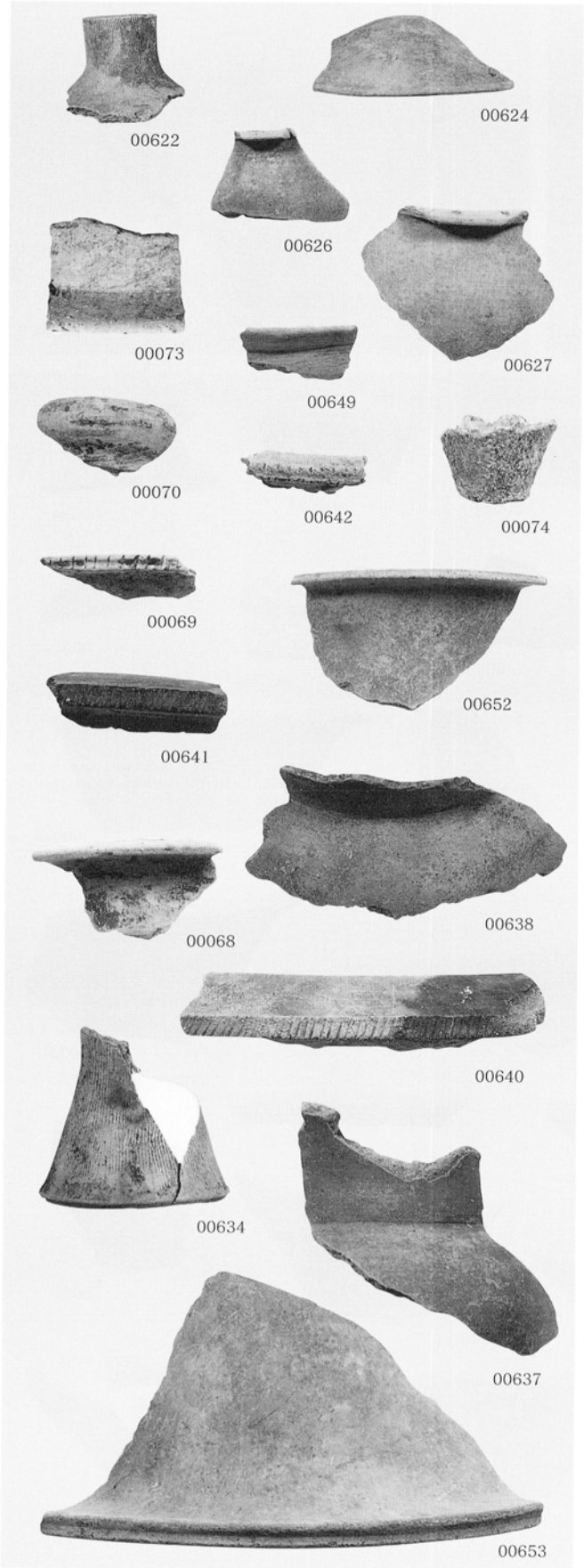

00105
SK−09

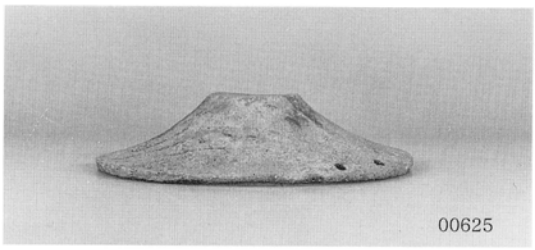

00107
00106
00110
SK−09

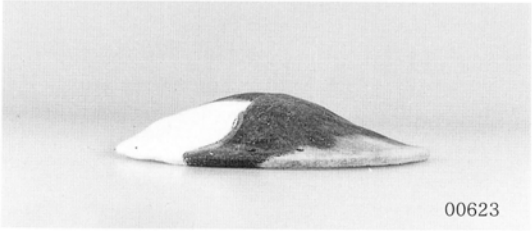
各土坑出土遺物



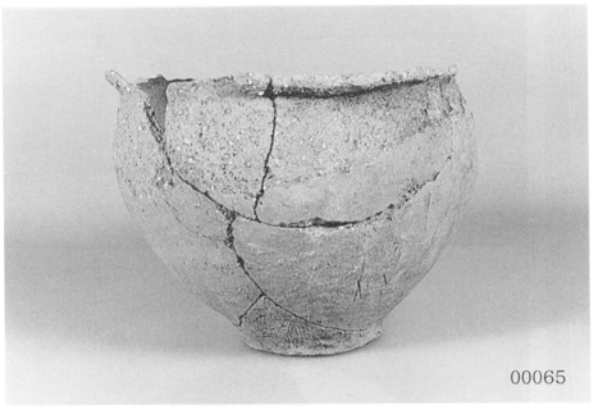
第6号溝（上層・西側段落ち）出土土器（1）



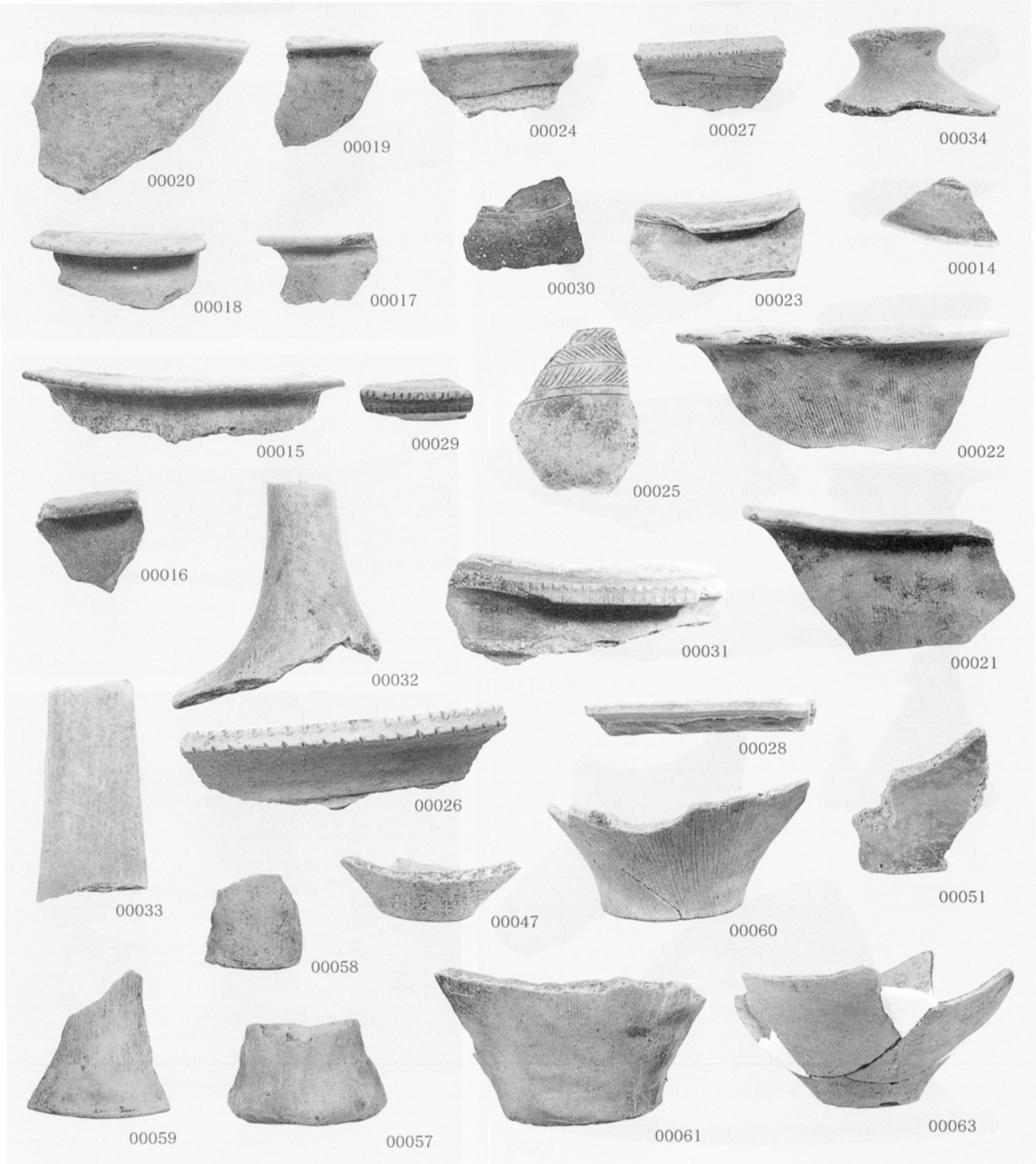




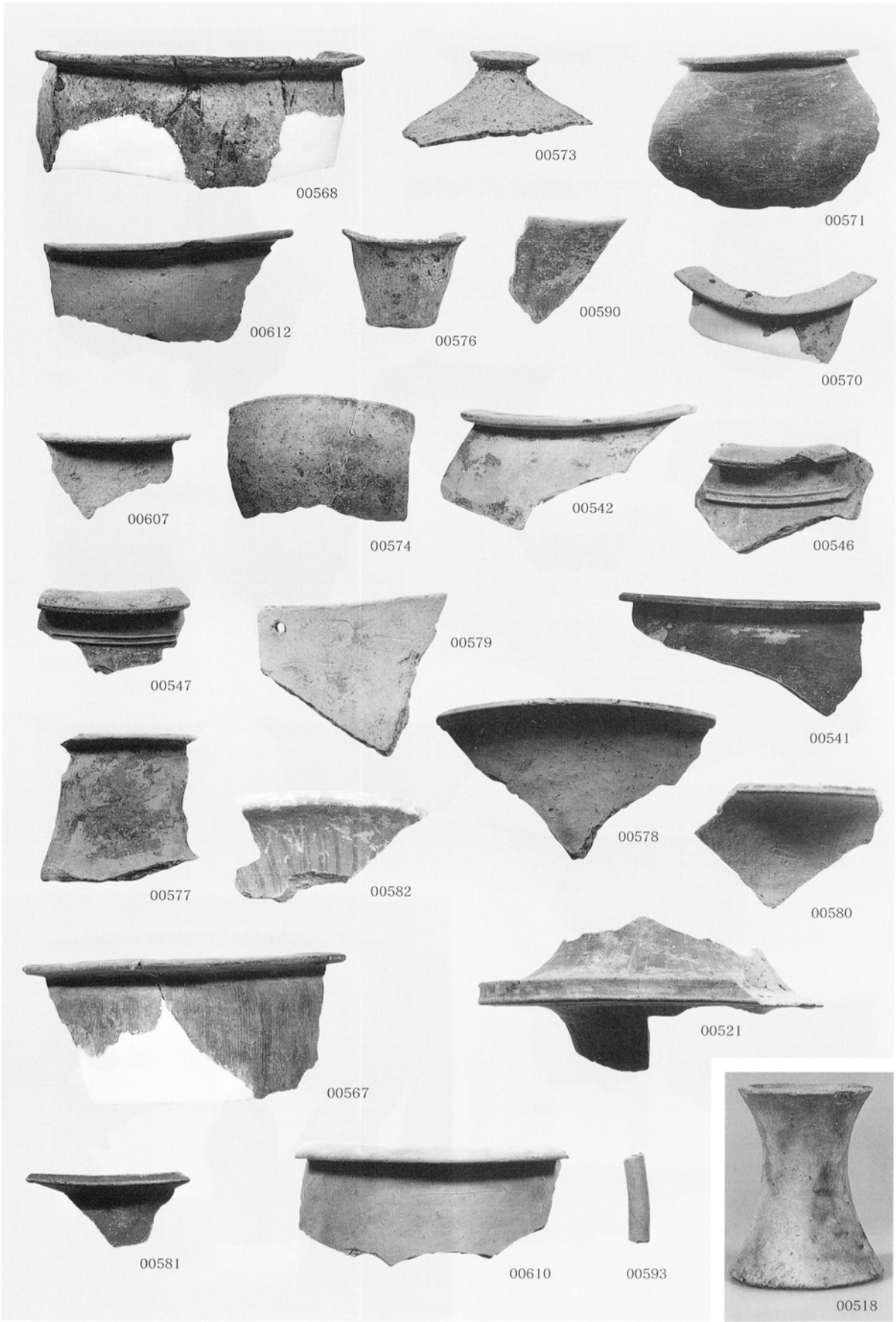
第6号溝（上層・西側段落ち）出土土器（2）


00065

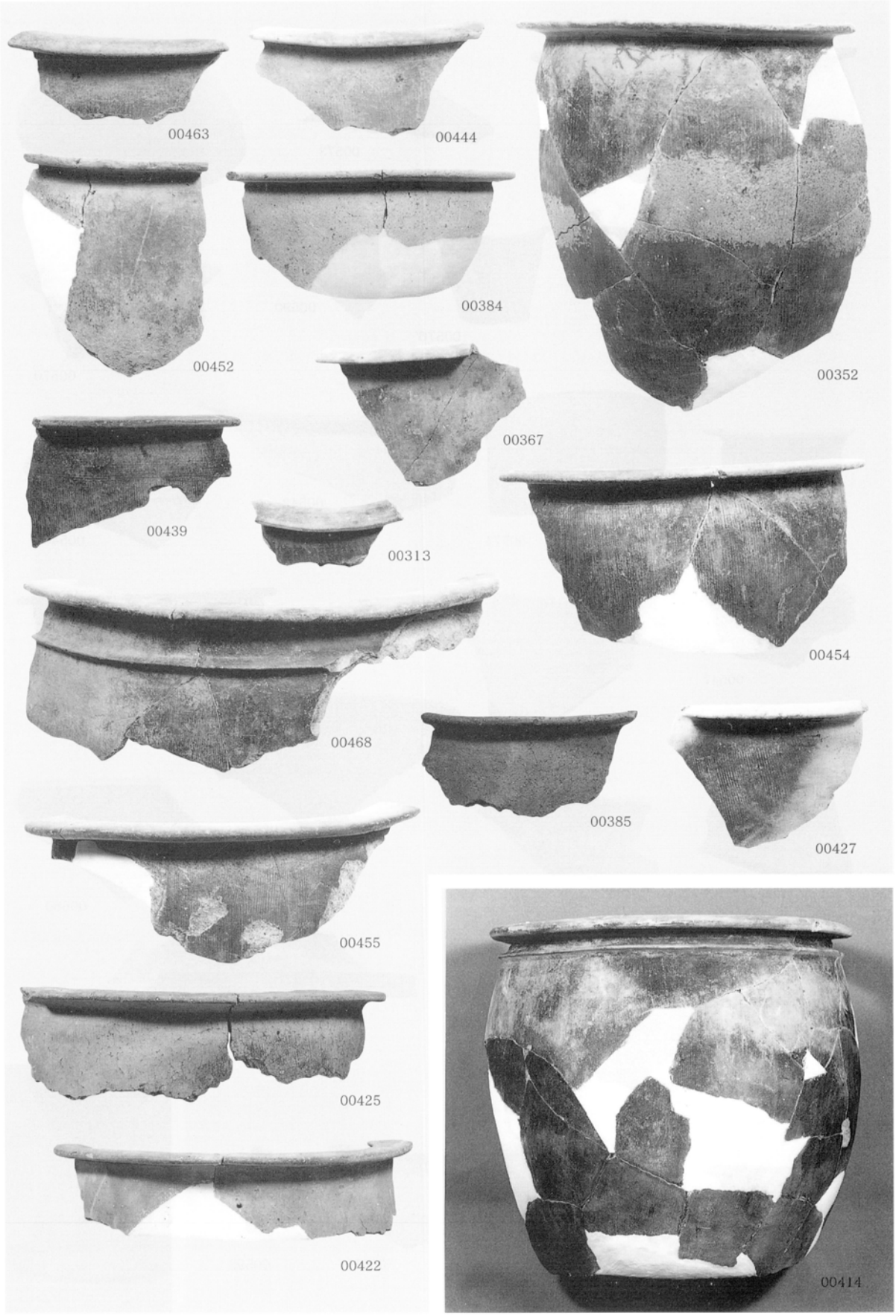
00064


00020
00019
00024
00027
00034
00018
00017
00030
00023
00014
00015
00029
00025
00022
00016
00032
00031
00021
00028
00026
00033
00047
00060
00051
00058
00059
00057
00061
00063

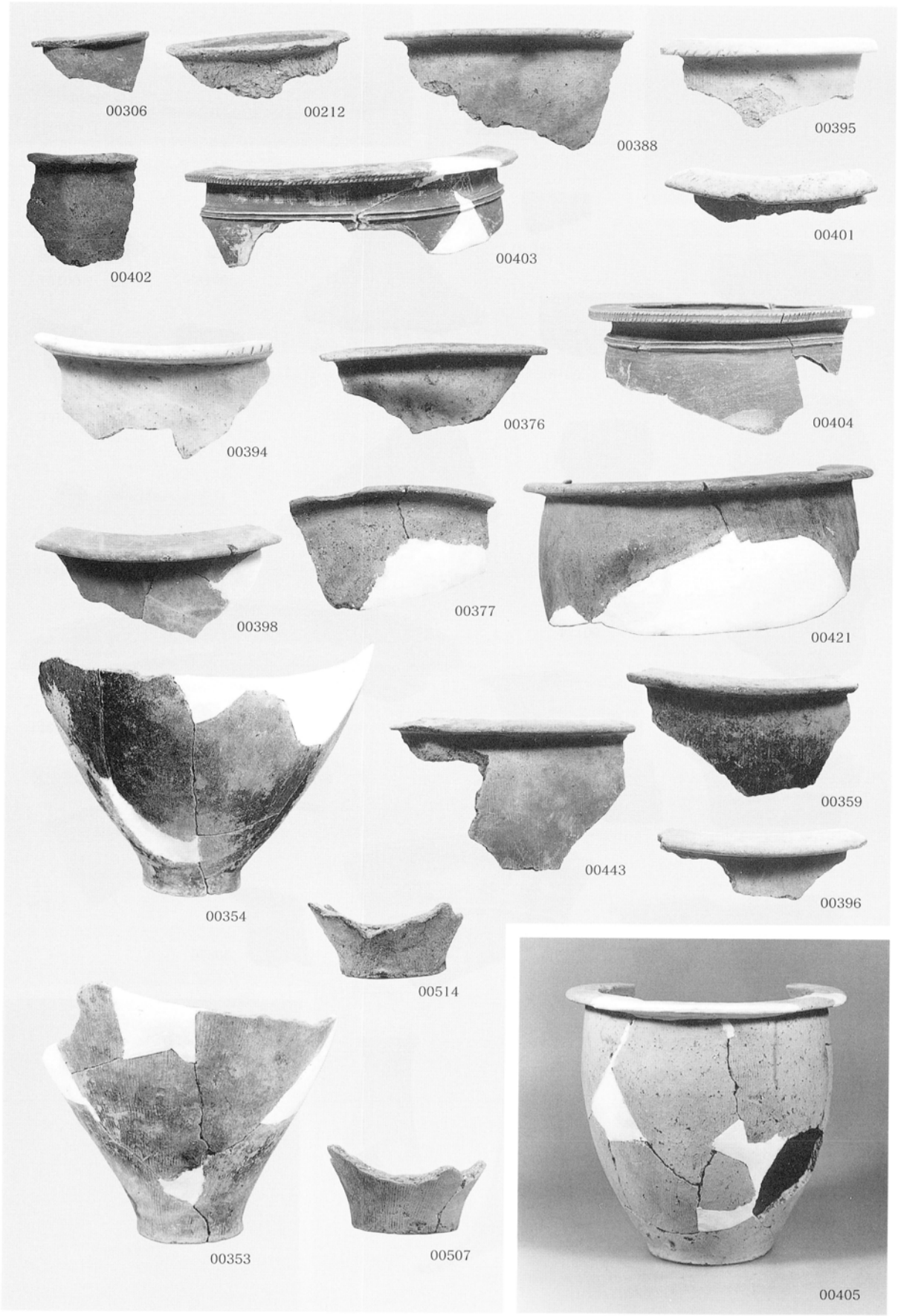
第6号溝下層出土土器



第20号溝上層出土土器



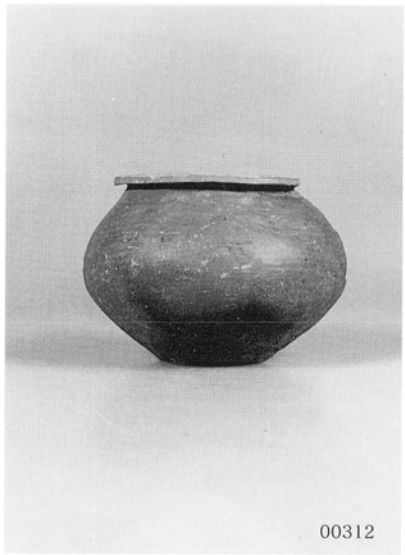
第20号溝中層出土土器（1）

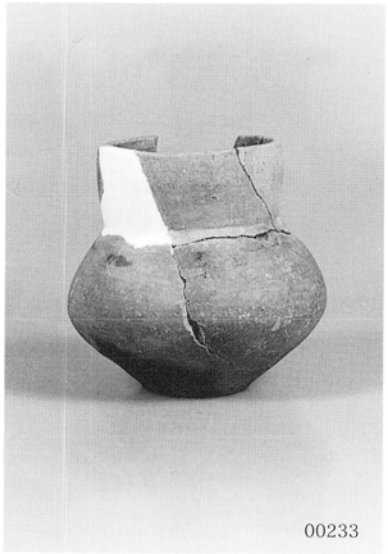


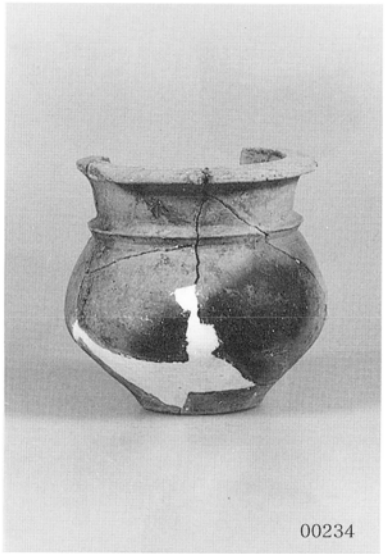
第20号溝中層出土土器（2）

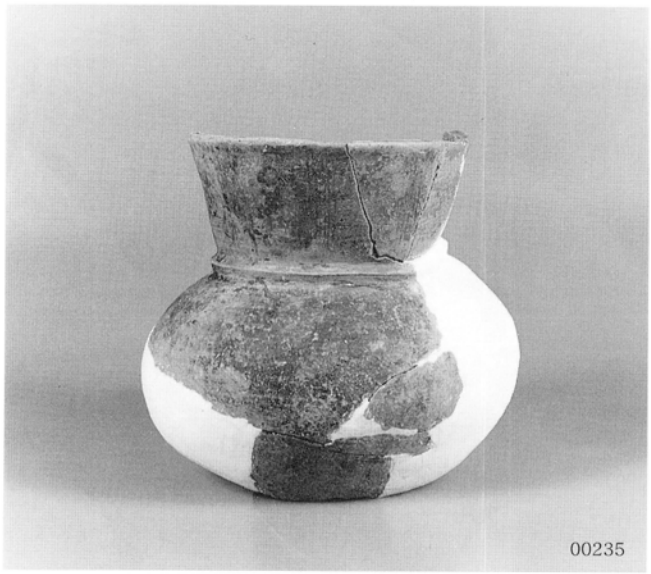
PL.13

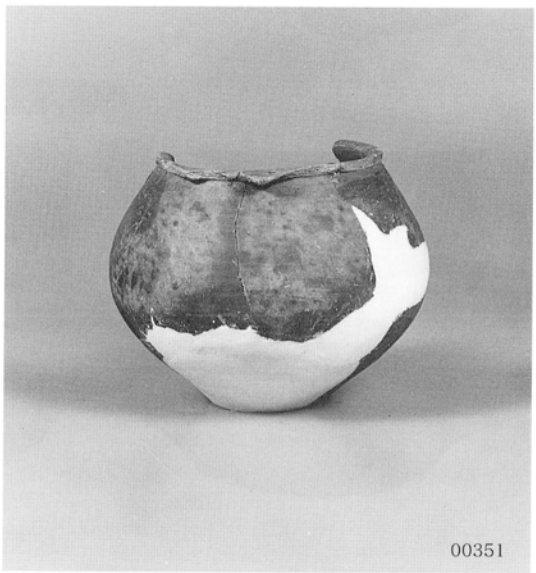
第20号溝中層出土土器（3）


00312

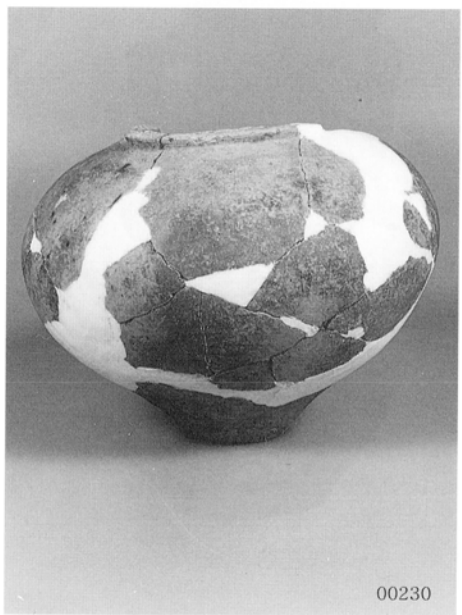

00233


00234

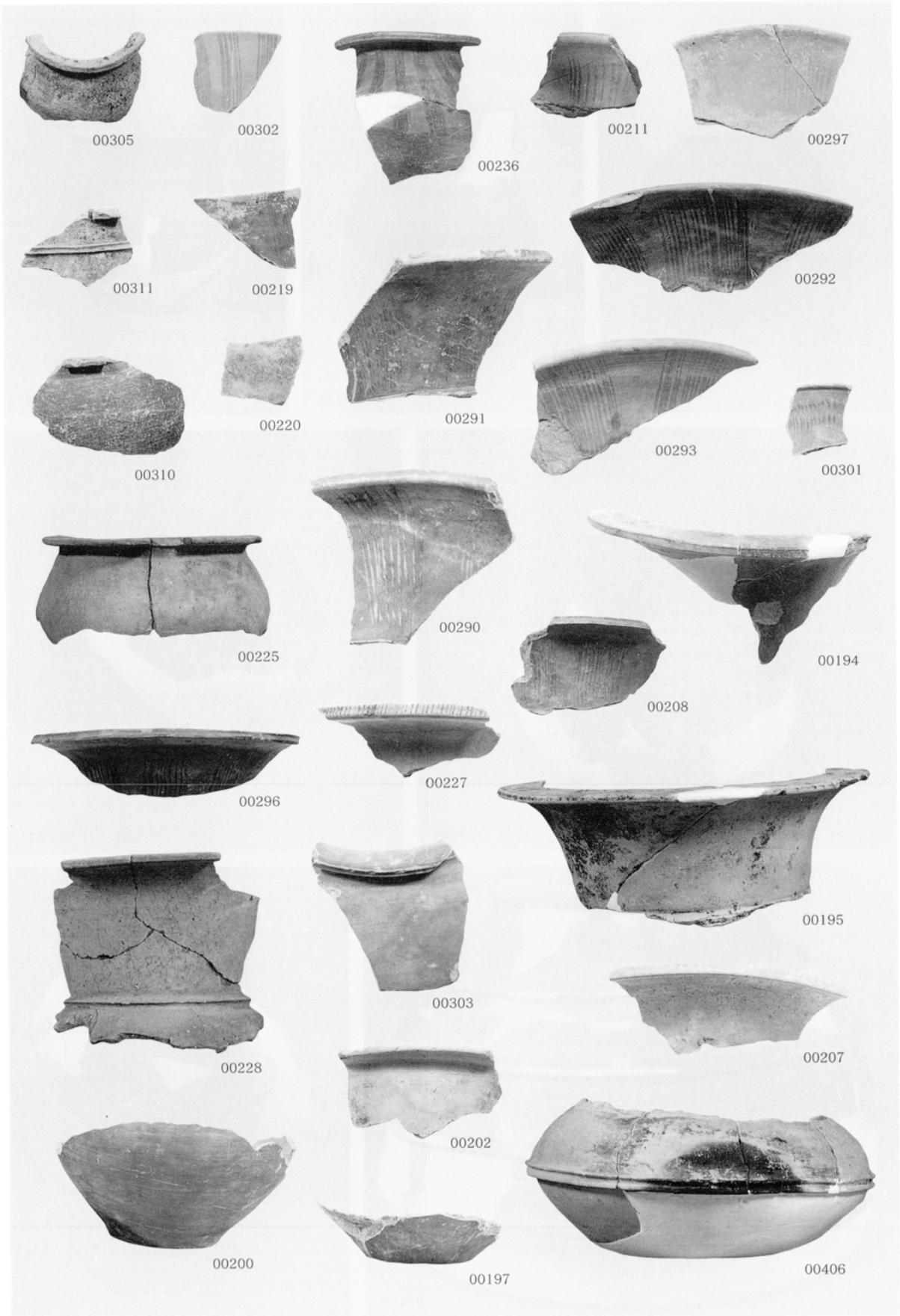

00235


00351

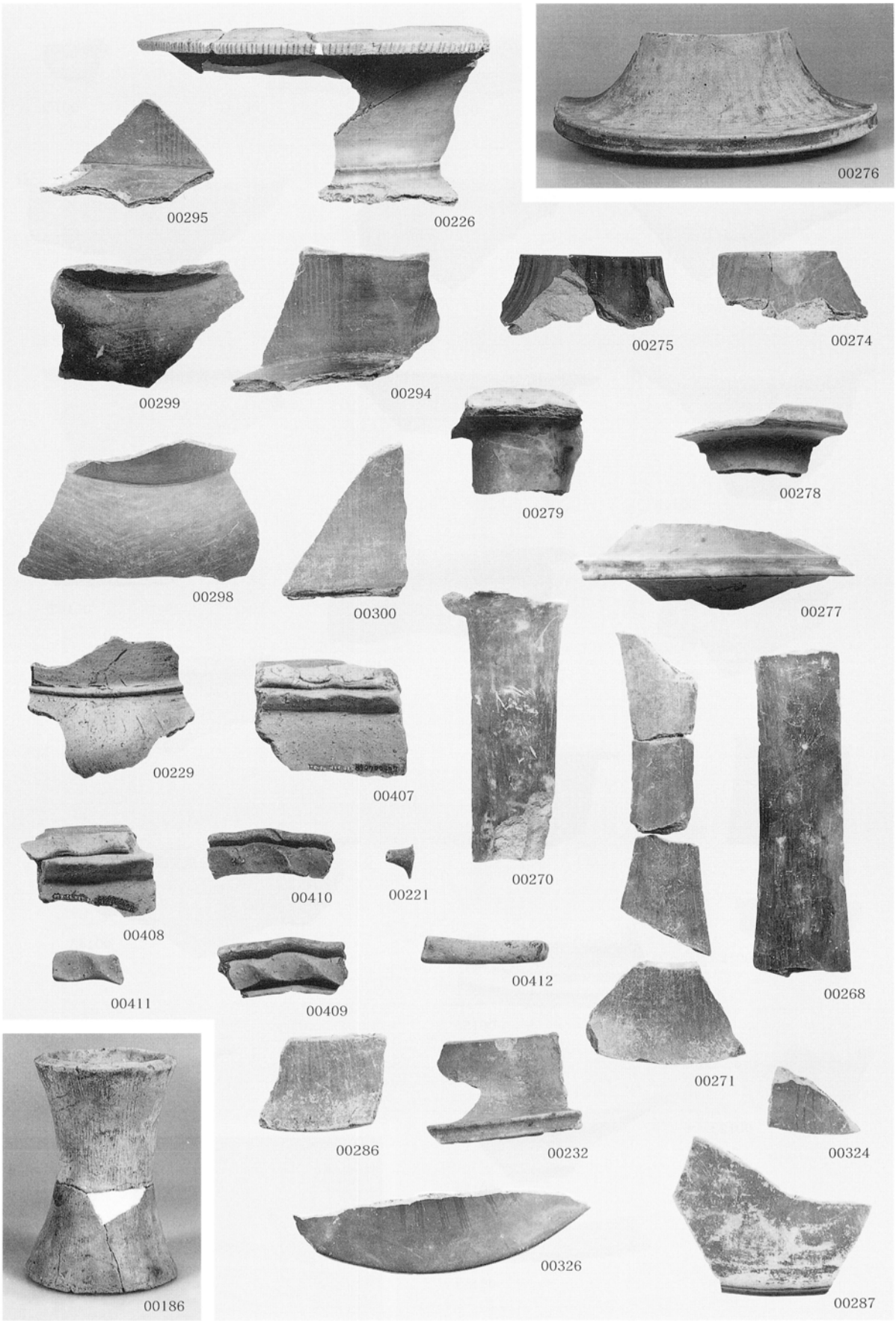
00413


00230

第20号溝中層出土土器（4）

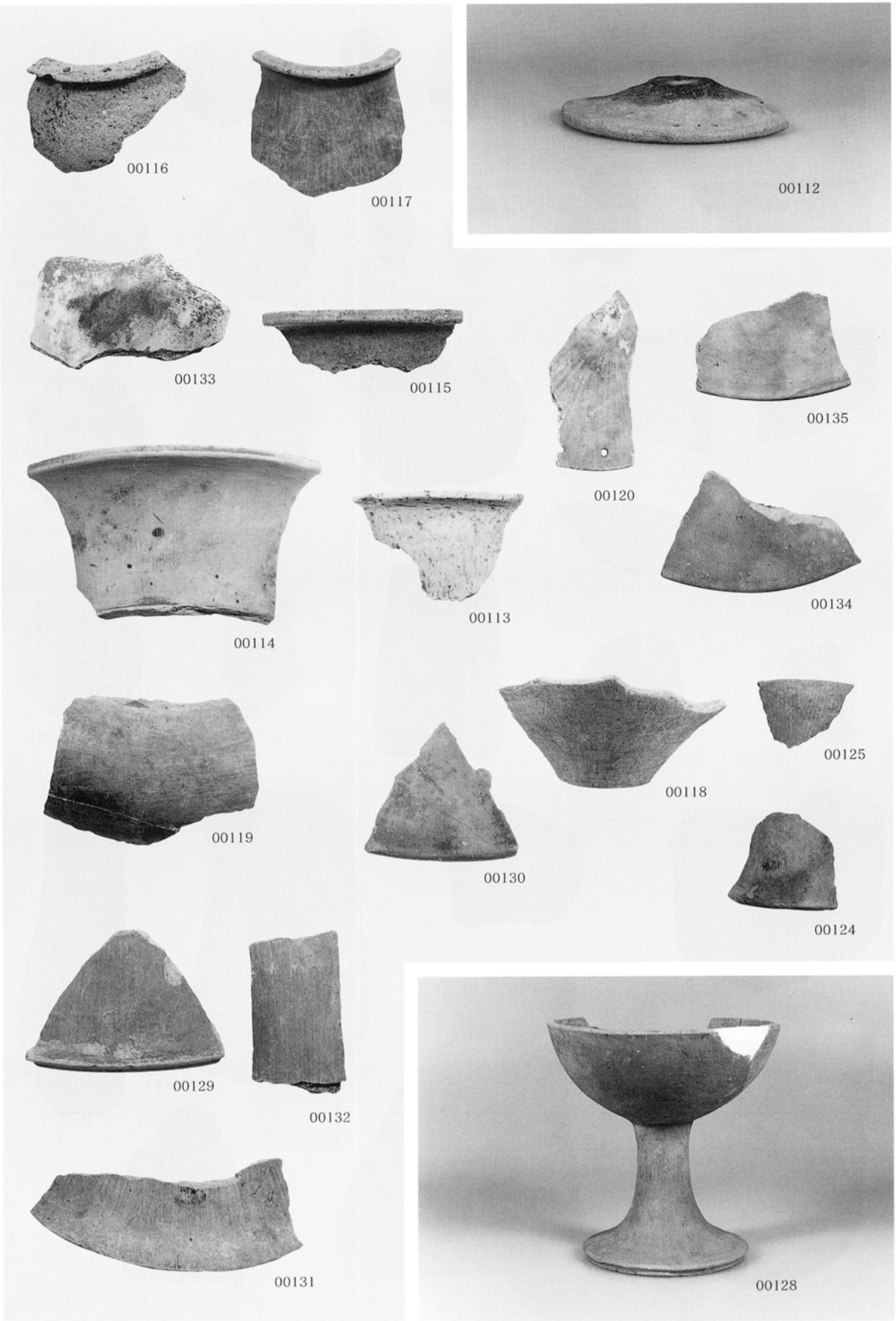


第20号溝中層出土土器（5）

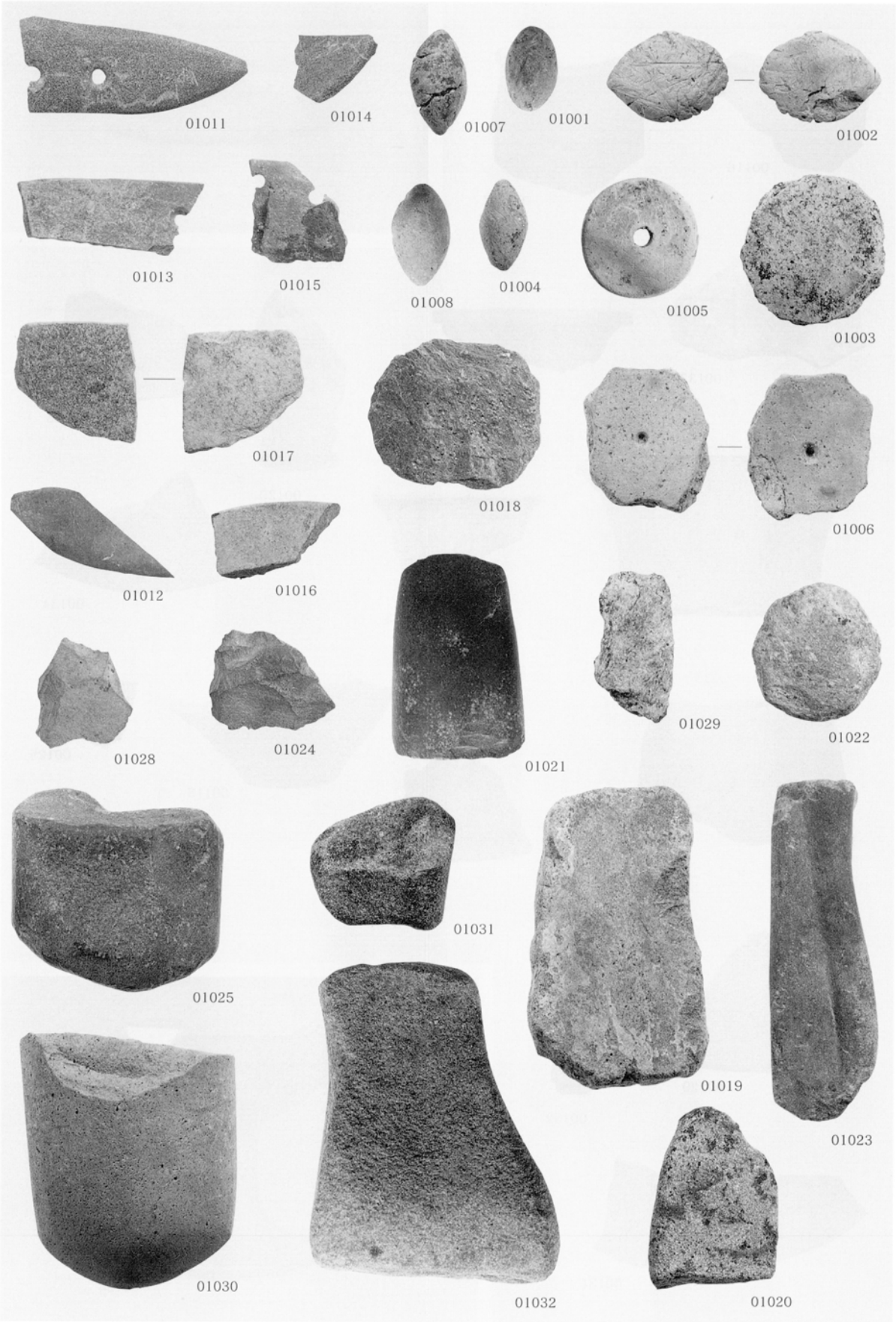


第20号溝中層出土土器（6）

第20号溝下層出土土器（1）



第20号溝下層出土土器（2）


01011
01014
01007
01001
01002
01013
01015
01008
01004
01005
01003
01017
01018
01006
01012
01016
01029
01022
01028
01024
01021
01031
01025
01019
01023
01030
01032
01020

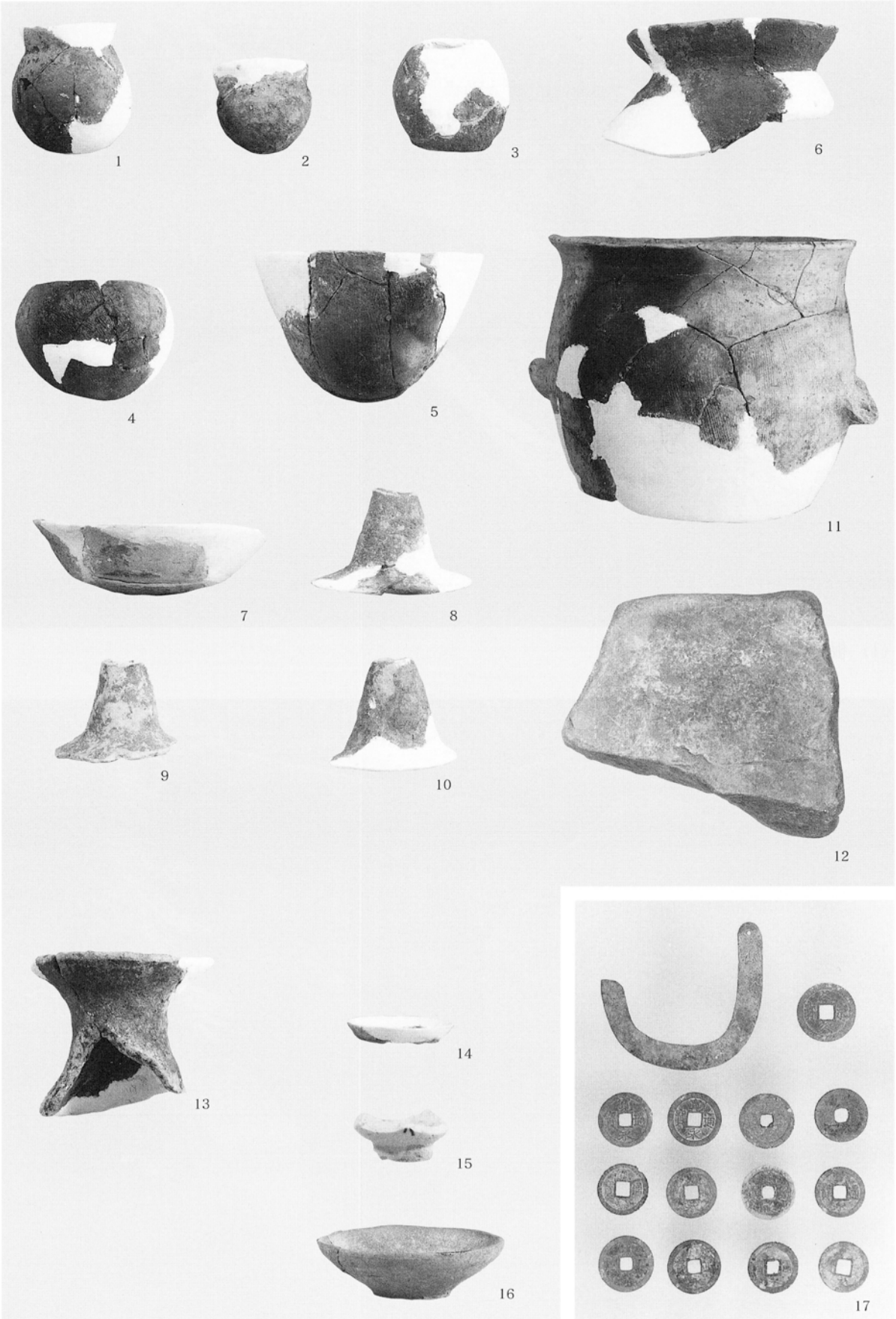
出土土製品および石器

(1) 板付50次地点近影（東から）

(2) 調査地点の現状（板付八幡宮）

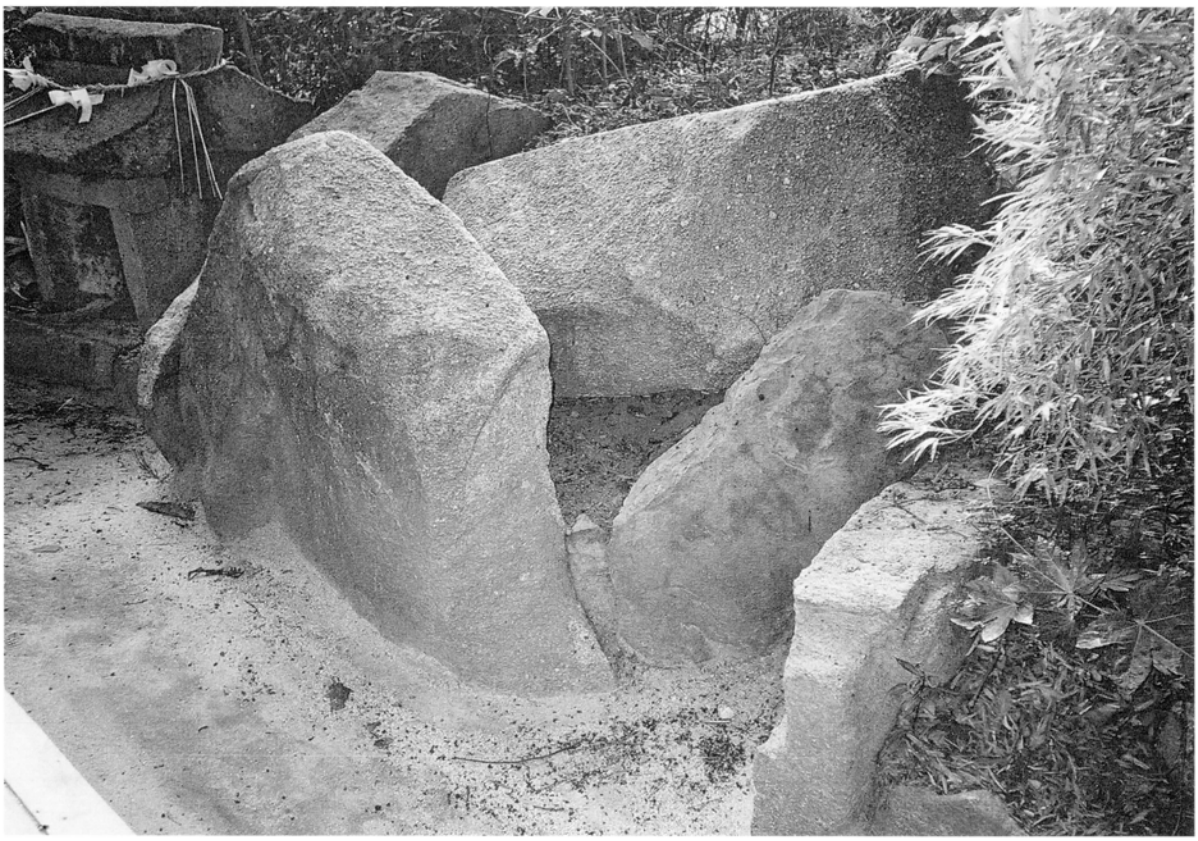
(1) 板付50次地点全景（東から）

(2) 本殿部並びに板付八幡古墳（東から）



板付50次出土遺物

(1) 板付八幡古墳石室（東から）



(2) 板付八幡古墳石室（北東から）

板付周辺遺跡調査報告書第24集

— 板付遺跡第50・56次調査報告書 —

2002年(平成14年)　3月29日発行

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印　刷　江口印刷株式会社
福岡市南区大楠二丁目22番8号